

神門川・斐伊川下流流路の變遷

川の全長凡そ七十餘軒、國中第一の大川にして、其の上流は水流急奔すれども、木次町より以下は川幅廣く、流れ亦緩にして舟筏を通ずべく又灌漑の利少なからず。

神門斐伊の兩川は上流地方より土砂を送致すると夥だしく、簸川平原の沖積地は全く其の作用にて成生せしものなり。されば此の二川が土砂の堆積に伴ひて屢、其の路を變ぜしことは有史時代に於ても明かに認めらるゝ事實にして、神門川は昔時平野と山地との境に近き字馬木より直ちに西流し、古志の南を過ぎ神西湖に注ぎしものとす。其の後永祿年中馬木より鹽冶を過ぎ、松が枝を經、西園に至り、中荒木に於て海に注ぎ以て現今の河床をなせしものにして、舊時の敷地は開拓して田畝となしたるも、今尙ほ一帶の窪地をなし古川田の稱あり。斐伊川は舊時杵築灣に流入せし者にして、現今の如く末流平原に出づるに及びて急に東折し、宍道湖に注ぐに至りしは天平以後或は寛永十二年ともいふなりとす。當時に起りたる大洪水は著るしく砂礫を流送して舊來の河床を埋却し、従つて本流は此の際略、現今の位置に等しき水路を

飯梨川

求めて東流宍道湖に入るにいたれり。舊時の河床は其後漸次開拓せられ新村落を作りたれども尙ほ所々に小沼澤をなして其の遺址を示す者あり。又斐伊川の東流するに當り、水勢強く、堤防潰決の憂屢ありしかば天保二年一川を開鑿し、以て本川の流勢を殺ぎたり。其の長さ約十軒、幅は百五十乃至二百〇五米、宇出西より分派して東北に向ひ直江の南を經、庄原を貫く。之れを新川といふ。斐伊川の土砂堆積作用は其の後絶えず行はれて河口には數多の三角洲を作り、湖面は次第に狭くなり、又湖底も漸く淺くなり以て今日に及べるを觀れば、苟くも此の作用にして止まざらんか、宍道湖の水は次第に淺く、遂に一條の水路を残すに至るべきは過去の事實に徴して毫も疑を容るべきにあらずとす。

飯梨川は國の東部にあり、能義郡南部の三郡山に發する山佐川、玉峯山に發する西比田川、猿隠山に發する東比田川等の相合して北北東流するものにして、廣瀬町を過ぎ、中の海に注ぐ。其の過ぐる所の地は概ね粗粒の花崗岩地なるを以て、従つて砂土を流出すると甚だしく、爲めに河床次第に隆まり、

伯太川

屢、洪水の害を生ず。川の長さ凡そ三十軒あり。
伯太川は飯梨川の東方にありて、南方國境上に發源する諸溪流を集め、北流して母里を過ぎ、安來町に至りて中の海に注ぐ。長さ僅かに二十五軒に過ぎざれども飯梨川と同じく砂土を流出すること夥だしく、水害を起すと屢なりといふ。

大橋川

其の他國の西陲には西北流して口田儀に至り日本海に入る田儀川あり、又北流して宍道湖の南岸に注ぐ者には玉造川、乃白川等の諸水あり、同じく北流して中の海の南岸に朝する者に意宇川、田頼川等あり。何れも十乃至十五軒の細流なり。大橋川は宍道湖と中の海とを連絡する一條の水路にして、宍道湖畔の松江市に起り、東流すると七軒馬瀨瀬戸に於て中の海に入る。

佐陀川

佐陀川は宍道湖の東北岸より北方日本海に通ずる一條の水路にして、往昔人工を加へて開鑿せしものなりといふ。湖畔の濱佐陀に始まりて、日本海岸の江角浦に注ぐまで凡そ八軒、漕運の便甚だ多し。
其の他宍道山脈地方には或は北流して日本海に注ぎ或は南流して宍道湖中

湖永

宍道湖

の海に入るもの甚だ多けれども何れも細溪にして特に記するに足らず。

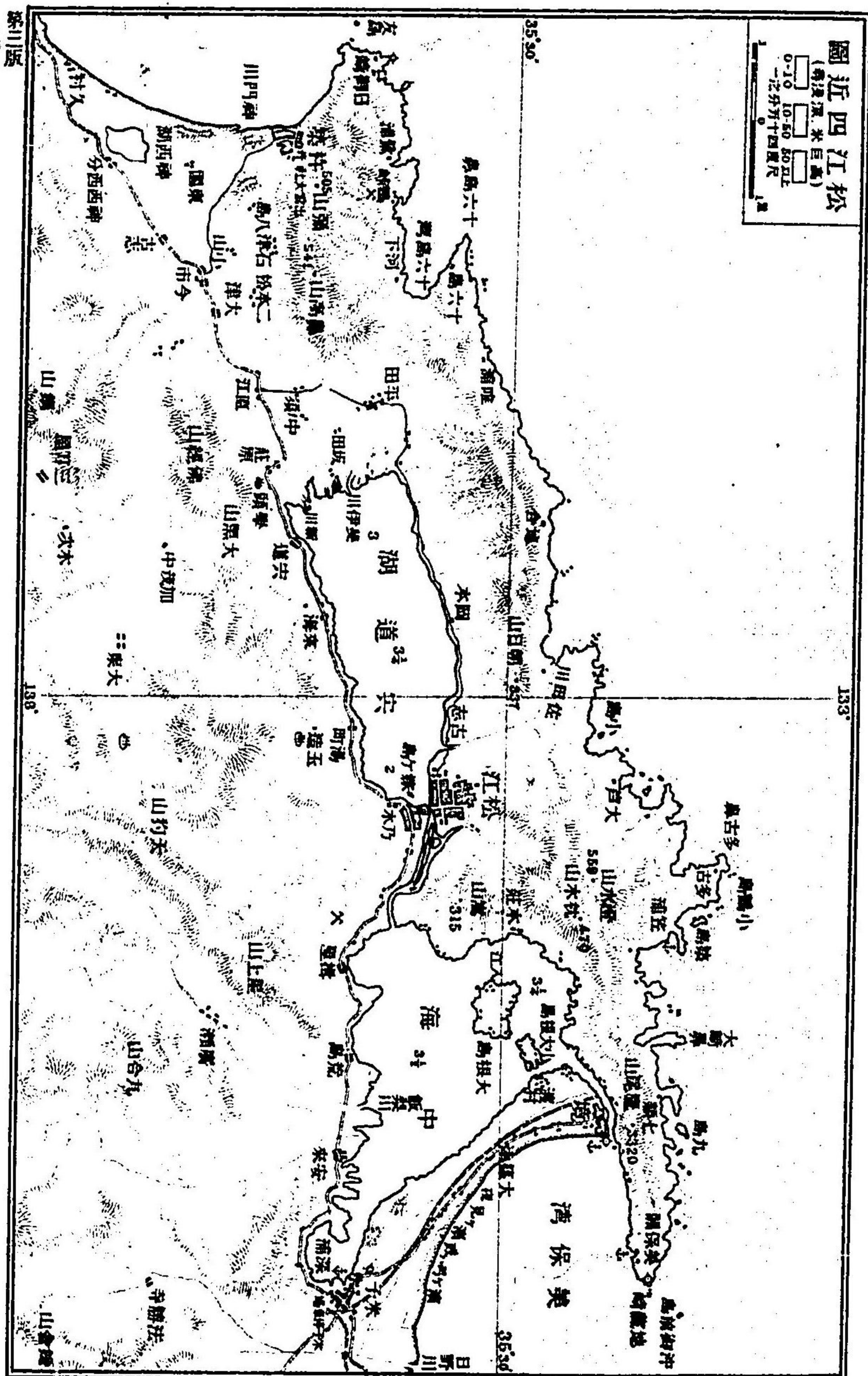
國の北部には宍道湖及び中の海の二大湖あり。共に宍道山脈の南に横はりて所謂宍道陥没地帯の一部分をなす。其の他簸川平野の西部には海岸に近く神西湖の小湖あり。

宍道湖(又意宇の湖、碧雲湖とも云ふ)は宍道陥没地帯の中部を占め、中國山脈に屬する諸山岳及宍道山脈の湖北區域によりて各、其の南北を限られ、西は簸川平原に接し、東は松江市以東の丘陵によりて中の海と相隔つ。湖形東西に長く、長さ十七軒、幅は凡そ六軒周圍約五十二軒にして面積凡そ八十四平方軒を領し、湖岸出入極めて少なく、東岸に近く嫁が島の小岩礁あり。湖水を涵養する河流の主なる者は斐伊川にして西岸より注ぎ、湖脚は東方にありて大橋川、天神川の二川により、其の水は東流して中の海と相通じ、又佐陀川によりて日本海と通ず。斐伊川は既に述べしが如く、昔時より土砂を流送すると夥だしく次第に湖底を淺くし又湖畔に沖積地を作りて湖面を縮小せしと少なからず。往時斐伊川の下流が西走して杵築灣に注ぎし時代に於ては本湖

中の海

の面積は頗る廣く、水深も亦大なりしが、東折して湖水に入るに及びては土砂の堆積甚だしく、河口に數多の三角洲を作りて年々湖面を狭ばめ、又排水其の宜しきを得ざるを以て湖畔に屢、水害の災あり、遂に佐陀川を決して、北方日本海に通ぜしめ、又松江市より天神川を穿ちて以て排水の便を謀りしも泥土細砂の堆積は次第に加はりて湖水漸く淺く、現今は僅かに狭き小汽船航路を餘すのみにして其の地の部分は全く大船を通ずる能はず。湖脚四近の地の如きは湖畔の新田漸く増加し、又低湖の際には廣大なる砂泥の干潟を生ず。かくて宍道湖は今日に於ても次第に縮小しつつあるなり。

●中の海は宍道窪地の東部を占むる一の澤湖にして、宍道湖の東方に位し、北は島根半島にて限られ、東は伯耆米子町附近より西北に延びたる一大砂嘴夜見濱半島によりて外海と隔てらるれども、島根半島と此砂嘴との間には中江瀬戸有りて外海と相通じ、従つて潮汐の作用によりて鹹水を混ゆ。湖の大いさ南北十軒、東西亦略之れに等しく面積凡そ百〇九平方軒に達す。此の湖亦宍道湖と同じく、水淺くして大船を出入すべからず。湖岸稍、出入に富み、



神西湖

海岸

東南部米子町に近き灣入を深浦といひ、こゝに佛島蒲鉾島松島等の小島嶼あり。又南岸飯梨川河口の突出部と其の西方にある意東鼻との間を袖師浦といひ、東方米子半島に沿へる所を錦浦といふ。湖の北西南岸は丘陵平地相交互して存すれども東岸は一帯に平低の沙濱なり。湖の北部には大根島及び小大根島の二島横はる島嶼の項参照。

神西湖は簸川平野の西南隅にありて海岸に近く砂丘によりて外海と隔てられたる湖なり。南地の長さ約二軒半、東西の幅一軒半にして、面積僅かに三平方軒半に過ぎず。此の湖もと稍大なりしも貞享三年指海川を開鑿して外海に疏通してより湖面漸く縮小し、湖畔に新田を得たること約三百八十町歩に及び、現今尙ほ陸地増加の傾向ありといふ。

海岸は日本海沿岸の一部なるを以て、之れが特性として概するに屈曲に乏しく従つて港灣甚だ少なし。

宍道山脈に屬する地體の北岸は概ね山急に海に迫り、絶壁をなせる所多くして平地少なく、海底も亦急に深くなりて、十尋乃至二十尋の等深線は海岸

島嶼

に近く相逼れり。湖北區域の北岸は最も好く此の性質を顯はす。されど佐陀川の注入する江角灣及び湖北區域の西岸にある十六島灣の灣頭には多少低平なる砂濱を有す。北山區域及び湖北區域の海岸は概して出入極めて少なく、江角灣十六島灣の外鷺浦及び日御崎の二小灣入あるに過ぎざれども、宍道山脈の東部即ち半島區域の海岸は小出入極めて多く、大に其の面目を異にするは、是れ此の地方には小紋岩の如き噴出岩の岩脈甚だ多く、此の部分は風浪の浸蝕作用に抵抗する大なるを以て、半島状をなし殘留せしに因るなり。

宍道山脈の地體を離れ、簸川平野の西岸を見るに、此の地方は出入全くなき低平なる砂濱にして、沿岸には海上より吹來する西風によりて作られたる一列の砂丘南北に相連なれり。之れを過ぎて更に南方赴けば、丘陵近く海に迫りて斷崖砂濱相錯綜し、海岸の屈曲亦極めて少なし。

本國の海岸には島嶼の著るしき者更に無し。宍道山脈地域の北海岸には岸に接して無數の小岩礁あり。これ岬角の先端怒濤に洗はれ分離して生ぜるものにして、其中稍大なるは島根半島北岸にある築島九島等とす。又中の海

石見國

熱院

湖の北部には大根島及び小大根島の二島あり。共に宍道陥没地帯を貫きこれに並行せる方向に沿うて噴出したる火山岩より成れるものにして、大根島は稍大きく面積五平方千米餘を占め、小大根島は又江島といひ其の東北にありて大いさ其の五分の二に過ぎず。大根島は不規則なる楕圓形をなし、東西の長徑凡そ三軒、南北の短徑凡そ二軒半、島の最高點は海拔僅かに三十米にして極め平夷なる丘陵をなす。是れ本島は流動性極めて強き斜長石玄武岩より成れるが故なり。島の東端波入村^{ウツリ}江には熔岩墜道あり、俗に之れを風穴と稱す。方向は略東西にして大小二孔あり、内部に於て僅かに相通ず。北にあるものは稍大きく長さ六十米、他は三十四米にして更に長さ十米の小枝を分岐す。墜道内には熔岩鐘乳石熔岩底鐘石もなく、又熔岩流動の有様を示す波紋状の皴壁も著るしからず。

石見國

石見は山陰道の最西部をなせる國にして、東は出雲國備後國と相接し、南

方は安藝周防の二國と境し、西は長門國と連なり、北方は全く日本海に臨む。地域西南より東北に長く延びて其の長さ百十軒に達し、海岸より内地に向つての幅は僅かに二十乃至三十五軒にして、面積約二千九百平方軒を有し、島根縣の所管とす。

中國山脈の脊梁は國の南境に沿うて西南より東北に走り、此の主軸より岐れたる數多の山岳丘巒は重疊起伏して國土の全部を充たし、殆んど其の間に平野と稱すべきものを存せず。斯くて石見全體の地勢は一の山地若しくは高臺狀をなし、垂直的の肢節甚だ乏しく、概して東南に隆く、西北の方日本海に向ひて次第に低夷せるを以て、河流は一般に東南より西北に向ふ。海岸の形勢も日本海一般の性質として出入極めて少なく、且つ低平なる廣野をなせる所殆んど之れを見ず。要するに本國の地勢は變化に乏しく、甚だ簡單なりといふべし。

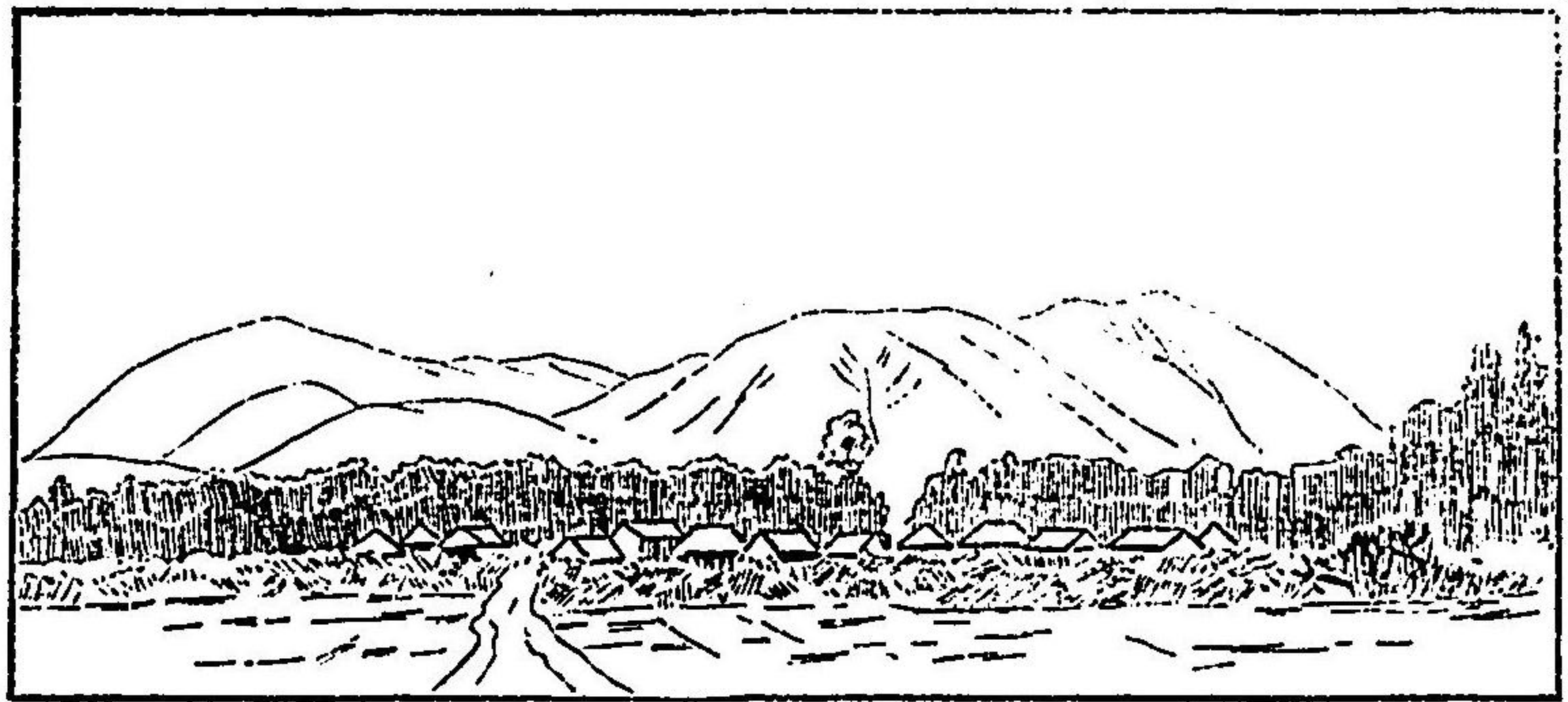
國の南境即ち周防安藝と境を交ゆる地方に連亘する山嶽は中國山脈の主軸をなす者にして主として花崗岩花崗質斑岩等より成り、東北より西南に蜿蜒

山岳
山岳南境の

其の他の山

して日本海と瀬戸内海との分水嶺をなし、海拔の高距平均千米内外を保ち、國內に於て最も高峻なるものに屬す。今之れ等の中主要なる峯嶽を東北より列擧すれば、石見安藝出雲の界には三國山(八百五十四米)聳立し、其西は江川の溪谷に絶たれて山勢一たび陵夷すとゆえども、再び隆起して龜谷峠(六百九十五米)となり、寒曳山(九百三十三米)三石山(八百六十二米)を起し、更に延びて九瀬山(八百八十米)阿佐山(千〇八十七米)高杉山(千〇二十八米)冠山(千〇十六米)雲月山(九百六十米)大佐山(千〇四米)の諸峯を隆起せしめ、これより彎曲して西方に向ひ、廣瀬川(高津川)支流の上流地にある岩倉山(千三百三十八米)大編谷山(千二百四十米)十方山(千二百三十米)五里山(千二百四十米)冠山、寂地山(千三百四十二米)等の諸峯に連亘し、これより脈は西南に延びて、高津川の上流地方に聳ゆる大岡山(八百九十米)大將陣山(千〇九十七米)の諸山となる。

更に國の南境地方を離れて國內に群起せる山岳を見るにこれ等は概ね中國山脈の餘波に屬し、主にも花崗岩花崗質斑岩及び古生層等より成れども所々に火山岩の噴出起り、海拔高距は概ね小にして五百乃至八百米を保ち稀れに



石見青野山遠望

千米に達する者あり。高津川以西に於ては、津和野町の西方にありて、石見長門の界に聳ゆる徳佐峯千〇二十四米及び東方にある青野山九百五十米等著るしき秀峯にして、尙ほ川の東方、美濃郡の北部海岸地方には鱈降峯三百七十一米打歌山烏帽子山等の丘陵あり。尙ほ東方に至れば美濃郡の東限に春日山九百二十米大鳥山五百餘米猿が谷山大鹿山千〇六十六米及び大鹿山の北に接して那賀郡に属する彌畝山千〇二十三米あり。又濱田町の南方には三階山三百五十七米狩倉山五百十六米南北に並列し、更に其の南には周布川の南涯をなして城山六百三十米漁山五百六十二米大麻山六百三十一米等東西に連なり、其の脈東に延きて笠松峠八百七十三米に至り、

江川以北の山岳

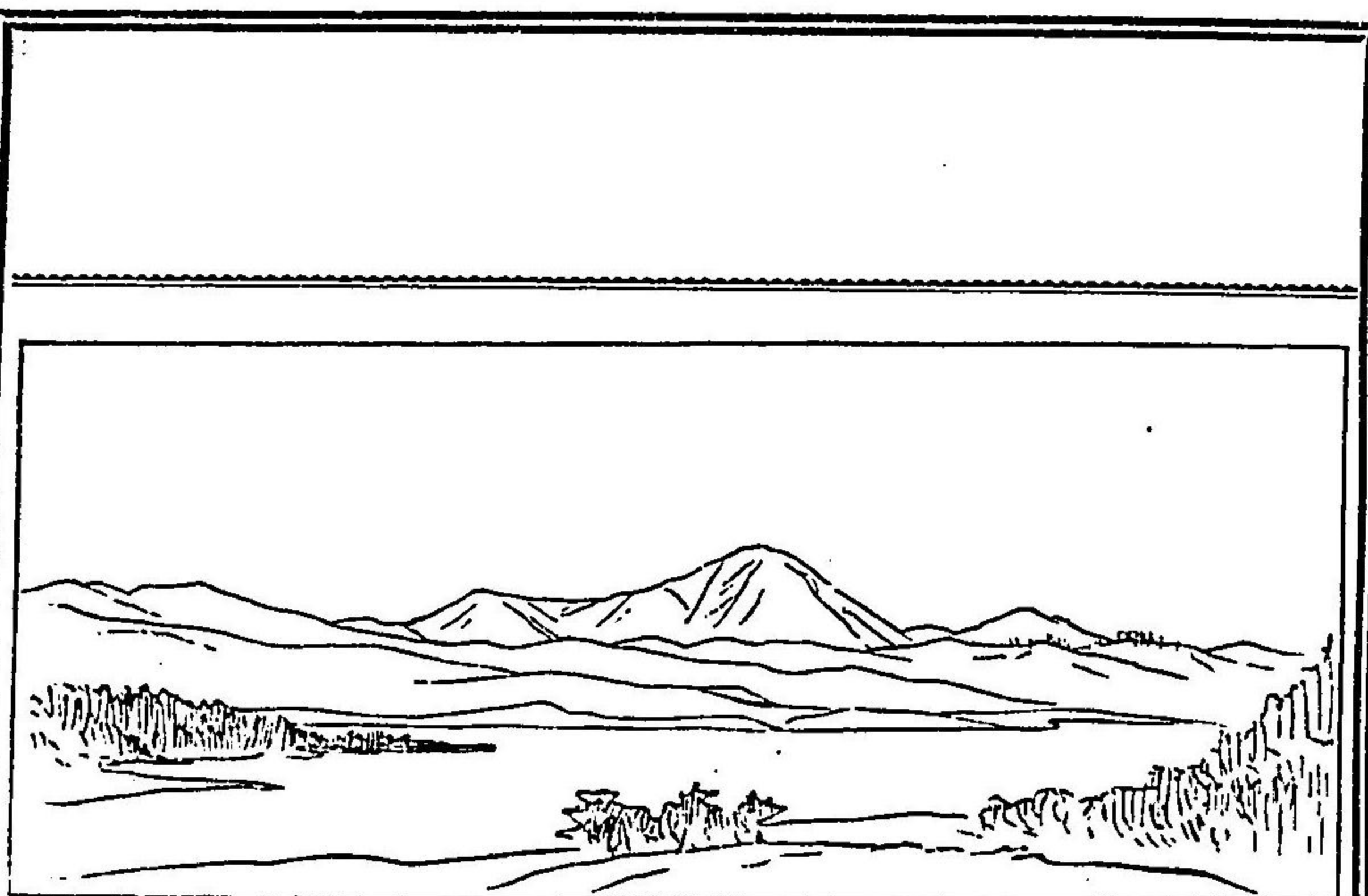
更に二子山五百六十三米に及び、東方には濱田川下府川跡市川等の流域地方に山崎山四百五十八米城山六百九十米權現山四百十四米弓張山五百八十七米、島星山三百八十五米板山五百二十三米等あり。之れより以東江川の南方にある邑智郡地方は土地漸く、高く原山九百四十七米冠山八百十四米其の他の諸秀峯相連なりて高峻の地勢を呈し、其の間には出羽矢上市木等の諸邑の附近に溪谷に沿へる小盆地を開けり。

江川以北即ち國の北部地方に於ては内地は花崗岩及び花崗岩質斑岩等の基盤の上に富士岩及流紋岩等の火山岩を被覆し、海岸地方には第三紀層の丘陵西南より東北に連なり、こゝに富士岩より成れる大江高山の一群聳立し其の南方即ち江川下流の北岸に臨みては花崗岩の一小山塊あり。内地に於て石見出雲備後の界なる三國山八百五十四米江川に臨める冠山等は中國山脈に属する者にして、其の北方にある三瓶山は白山火山脈に属する一大火山なりとす。三瓶山は東の方出雲の八重山伯耆の大山と相連なり、西の方石見の大江高山の火山群と相望み、白山火山脈に属する一秀峯にして、四國の花崗岩高臺

三瓶山

地より聳立し、山勢雄偉、石見出雲の二國に跨れども山體の大部分は石見國に屬す。山頂は男三瓶千二百二十七米、子三瓶八百六十米、孫三瓶八百七十米、日影山太平山八百十米、女三瓶九百五十米等の諸峯に分れ、之れ等は皆連接環旋して以て其中に噴火口の遺址たる一大窪地室の内を圍む。男三瓶は火口の北壁をなして最も高く頂上稍平夷に、子三瓶孫三瓶は西壁をなし、日影山太平山は東南壁に該當し、女三瓶は火口壁の東北部をなせり。室の内は其廣さ東西約千米南北凡そ千三百二十餘米にして、其の東南隅に一小池あり室の内池と稱す。又室の内の西部孫三瓶の麓に接する邊に一小區域の地草木色を變じ、禽蟲の死屍堆積せる所あり、是れ即ち鳥の地獄と稱する炭酸質噴氣孔にして、岩塊累積せる罅隙より炭酸瓦斯を洩出するもの、其の空氣に比して重きを以て地面に接して鬱積し、細禽小蟲餌を求めて此處に至るとき窒息して斃るゝに因り名づけられたるものとす。

三瓶火山の裾野は東麓及び西麓地方に最も好く發達し、其の西麓にある者を佐比賣野といふ、此處に一小池あり、浮沼池又浮布池といひ、中に一小島



山見三瓶石りと近附江松雲出

あり。此湖は白鳳年間三瓶火山噴出の際其噴出せし土砂灰礫が堆積して流水を堰止めしに因り生ぜし者なりといふ。尙ほ其北方なる裾野にも姫野池と稱する一小池あり。又火山の南側にある一寒村志學より少しく登りたる所には温泉の湧出ありて、之を導きて村落に致し以て操浴の用に供し、又西北麓小屋原にも炭酸質温泉あり。三瓶火山を構成する岩石は雲母頑火富士岩に屬し、外觀赤色なるものと淡黝色なるものとの二種あり。多孔質なるを以て霏爛の極表面凹凸を生じ、雅致あるものは世に三瓶石と稱せられ玩石家の珍重する所となる。熔岩流の露出は甚だ乏しけれども、輕石の播布は甚だ廣くして管に三瓶火山の山腹を被覆するのみに止まらず廣

く裾野の全面を被ひ、遠く邑智郡安濃及び出雲の簸川飯石二郡地方に及べり。
 三瓶火山は有史時代に於ける噴出の確證なく、現今に於ては温泉の湧出炭酸質噴氣孔の存在等が僅かに火山活動の餘勢を示すに過ぎざる消火山に屬す。されど南側の志學温泉はもと其の温度甚だ低くして殆んど入浴に供すべからざるものなしが、明治五年石見大地震の時より俄然温度を高め、今日に於ては泉源より導きて九百米の遠きに致すも尙ほ二三時間放冷するにあらざれば入浴に堪えざるに至り、或は鳥の地獄が近來著るしく炭酸瓦斯噴出の勢を減じ、且つ噴出面積も小となり、或は屢火山の鳴動を起す等多少の變化なきにあらず。

三瓶火山の西麓西北麓を擁して花崗岩より成れる丘陵あり、其の中稍高きものを鶴降山五百六十五米、稻荷山二百四十米及び旭山四百米等とす。

江川以北に於て海岸を縁取れる連嶺中、其の南部は英崗岩より成りて低き丘陵状をなし、江川河口の東に高仙山二百八米あり。中部以北は主もに第三紀層より成り、之れを貫きて噴出せる富士岩は大江高山群山を作る。此の群

平野

水系

山は三瓶山と共に白山火山脈に屬するものにして、低夷なる四圍の丘陵地より聳立し、大江高山八百〇八米に於て最も高く、其の北方に矢瀧城山六百六十九米、仙之山、山吹古城山等の諸峯並列し、西北に方りてはツヅラコ山五百〇三米あり。其の他第三紀層より成れる地方は概ね低夷なる丘陵をなし、著るしき秀峯は絶えて之れを見ず。

國內の地勢は既に述べしが如く、山巒重疊して國の全部に亘れるを以て平野と稱すべきものは殆んど之れなく、唯、河流の沿岸及び海岸の諸所に多少低平なる小沃野を開けるのみにして、特に記述すべきものなし。中に就き高津川下流に沿へる平野、濱田灣の沿岸、江川河口の南方にある津野津附近の海岸平野、安濃郡太田村附近のもの及び江川の支流なる出羽川の上流に沿へる出羽附近の盆地等稍著るしきものなれども何れも地域甚だ狹隘なり。

國の東南境上には中國山脈主軸が西南より東北に走り従つて此の地方は地盤最も高く、西北の方日本海に向ひ次第に低夷せるを以て、河流は何れも東南より西北に流れて日本海に注ぐを常とす。而して沿岸山多くして平地極め

三隅川

三隅川は美濃郡東北隅那賀郡東南隅の山間にある諸細溪を合し、西北に流れて三隅村を過ぎ湊浦に至り海に入る。長さ約三十軒あり。

周布川

周布川は源を那賀郡の東部國境にありて花崗質斑岩より成れる大佐山の西南溪谷に發し、始め東北流して波佐谷に至り、之れより西北に折れて種々の火成岩より成れる地方に狭深なる溪谷を作り彎曲蛇行して周布四近の冲積平野に出て海に入る。長さ僅かに三十軒、河底淺けれども周布以下は小舟を通じ得べし。

濱田川

濱田川は那賀郡中部にある火山岩の一秀峯城山の南に發源し、西流して山崎山の南を過ぎ、下來原に至り、これより西北に轉じて濱田町に至りて盡く。長さ凡そ十八軒、河口附近は僅かに舟楫の便あり。

下府川

下府川は城山の東南麓地方に發源し、北に流れて今市驛を過ぎ、城山の東北麓を繞り、屈曲迂鑿して西北に向ひ、下府村の沙濱に於て海に注ぐ。長さ二十餘軒に過ぎず。

跡市川

跡市川は結晶片岩より成れる弓張山の北麓に發し、西流して跡市村を過ぎ、

江川

有福村に至りて北に轉じ、敬川村附近の沙丘を貫きて海に朝す。長さ僅かに十二軒、水淺くして漕運の便に供すべからず。

更に東北に進めば江川の一大長流なり。

江川は又石見川ともいふ。中國地方第一の長流にして、其の上流を三次川といひ、安藝の東北部を流るゝ吉田川、備後の西北部にある櫃田川内田川及び三次川等が備後三次町附近の盆地に於て相合して成れるのになして、之より備後安藝の國境を流るゝと約十四軒、後西北に轉じて備後石見の國界をなすと凡そ十軒、此の間に於て左岸より出羽川を容る。石見國內に入りてより川は殆んど正北に向へども彎曲稍多く、且つ西岸の多くは斷崖をなし、或は急湍をなし、或は碧潭を作る。遂に三瓶山の南に至り、東方より來る熊見川を合し、濱原村に至り、俄かに屈折して西南に向ひ、左右兩岸より數多の細流を合して流勢稍緩となり、川本村を過ぎ、宇因原に至りて南方より來る矢上川を合す。之れより川は西方に向ひ、谷住郷に於て南方より八戸川を容れ、更に西北に轉じて右岸より波積本郷川を合し、高仙山の南麓を擁し、江津に

江川の支流

至りて海に入る。河流の全長凡そ百五十五軒、其の中本國に屬するもの凡そ七十軒とす。中國第一の巨浸にして、備後三次町以下河口に至る約九十五軒の間は最も舟楫の便に富み、艀船の來往識るが如く、水量多きときは尙ほ遠く舟を溯らしむべしといふ。されど河口は怒濤多く、且つ水深屢變じ、艀船の出入に困難なりとす。其の流路は山岳群起の間を穿回曲折せるを以て他の大河の如く沿岸に廣漠なる平野なけれども所々に沖積の沃地を控へ、田圃其の中に開け村落市邑各所に散在せるを見る。

江川の支流中本國內に於けるものにて其稍大なる者は出羽川、矢上川及び八戸川等とす。出羽川は石見安藝の界なる三石山附近に發し、東流して出羽村を過ぎ、約三十軒にして口羽村に至り、本流に合するものなり。矢上川は三石山の北方にある原山の北麓に發し、矢上村を過ぎ東北に向ひ、更に北に折れ、約十五軒の水路を有す。其上流には斷魚溪の奇勝ありて其名遠近に聞え、又矢上村附近は兩岸稍開け、土地低平にして一小盆地をなせり。八戸川は上流を市木川といひ、國境にある三石山、阿佐山等の麓に發源し、西北に流れ、

江川以北の細流

湖沼

市木村を過ぎ、八戸に至りて北に轉じ市山村を過ぎ本流に合す。長さ凡そ二十八軒あり。

江川以北國の北部にある諸川は亦何れも細流にして西北に流る。湯里川は矢瀧城山に發し、湯里村を過ぎ湯湊に於て海に入り長さ十軒に達せず。靜間川は三瓶山南麓の諸溪流及び浮沼池、又浮布池と稱すの水を合はせ、西流して川合に至り南方より來る忍原川を容れ、それより西北に轉じて土江に至り、東方三瓶山の北麓より來る三瓶川を合して後靜間に於て盡く長さ二十軒のみ。國內湖沼極めて少なく、唯二三の小沼池を有するに過ぎず。波根湖は國の北隅にあり、海に接せる潟湖にして周圍凡そ四軒、面積一平方軒半を領し、西北隅開いて海に通ずる所を鰐走といふ。三瓶火山の西麓には浮沼池あり。又浮布池ともいひ周圍約一軒半に過ぎざる小池にして、白鳳年間三瓶山破裂の際其の噴出せし砂石が堆積して流水を堰留せしによりて生ぜるものなりといふ、また池の北方三瓶火山の西北裾野にも姫野が池と稱する小池あり。尙ほ海岸に沿うて西南に赴けば江川河口の東方にある高仙山の東麓に菰澤池あ

海岸

り。周囲凡そ一軒半、其の大きい浮沼池と略相等しく池の東隣には長澤池あり。國の西部高津川河口に近くある 蟠龍湖は亦周圍一軒に過ぎざる小潟湖なり。

本國の海岸は概するに東北より西南に向ひ、出入屈曲極めて乏しく多くは山巒海に逼りて沿岸平地少く所に沙濱あれども港灣少なし。江川河口以北は概ね第三紀層の丘陵海に逼りて斷崖沙濱相亦互し、多少の屈曲ありと雖も港津と稱すべきは僅かは温泉津のみ。江川以南濱田に至る間も出入少く、峻峯沙濱相交はり、沙濱には所々に沙丘の發達せるを見る。濱田灣は本國第一の良灣にして灣口の北部には矢野島馬島瀬戸が島等の諸島散點せり。灣を出て、尙西南に進むも海岸の形勢は敢て北方と異なるなく、其だ單調を極め、岩角の突出せるものに白島鼻觀音崎魚待鼻等あり、魚待鼻以南遠田の濱に至るまでは概ね懸崖をなせども、遠田より小濱に至る間は平滑なる一帯の狭き沙濱にして、沙丘好く發達せり。小濱以西は海岸急に傾きて平沙の地なく、石見長門の國界に於て突出せる岬角を鑪崎といふ。

島嶼

本國の海岸には島嶼の大なるものなく、唯岬角の先端怒濤に洗はれて分離せる岩礁の島として存するあるのみ。其の稍大なるものを北方より擧ぐれば、遼摩郡宅野の西方に辛島表島あり、温泉津の西方に櫛島那賀郡淺利の東方に大島あり、又濱田灣口の北部には瀬戸が島馬島矢野島等點在し何れも岸邊陡峻多く附近海上の風光明媚なるにより小西湖と稱せられ、本國勝地の一に居る。尙ほ西南に至れば觀音崎の西北約十軒の洋上に高島の小孤島あり。

隱岐國

隱岐國は出雲國の北方、日本海の南部に於ける一群島を包括する者にして、其面積總て三百四十二平方軒餘(三十二平方里餘)を領し、島根縣に屬す。本群島は其の排列の状態によりて自ら島前及び島後の二部に分たる。島前は中の島西の島知夫里島の三大島と數多の小島嶼とより成りて群島の西南部を占め、島後は即ち島後と稱する一大島とこれに附屬せる夥多の小嶼とより成り、東北部に位置す。

隱岐國
總説

島前

島前を形造る三大島は鼎足の状をなして中の島は東に位し、西の島は西に、知夫里島は南に座し、其の間に一内海を抱く。此の内海は狭き海峡によりて外海を通じ、中、西の兩島間には中井口の海峡あり、西、知夫里間には赤瀬瀬戸、知夫里、中二島の間には大口海峡を挟む。

中の島

中の島は即ち海士郡の地にして、地形少しく南北に延び、面積約五十二平方軒半を有し、甚だしく水平的の肢節に富みて、海岸線の長さは約七十軒に達し其輪廓恰も狗見の前肢を擧げて嬉戯するものに似たり。其の右肢は東方に突出せる知々井崎にして、其れと頸部との間に一灣を擁して知々井の錨地を作り、左肢は西北に延びて其の先端に菱浦の錨地を抱けり。而して島の南方にある高田鼻及びキロが崎は即ち其の後肢に該當すべきものたり。垂直的の肢節は甚だ單簡にして、全島總て丘巒起伏の地たるに過ぎざれど、西部は概して高く、東方は次第に陵夷して低き丘陵地となり、従つて島の西側面は東面よりも比較的急斜せるの傾きあり。山岳の稍著るしきものは島の西北隅にある安答堂山(五百五十五米)及び東部にある金光山(二百三十四米)あるに過ぎず。

西の島

西の島は中の島の西に位し、東北より西南に長き彎形をなし、東方即ち内海に向つて其の凹側を有せり。本島も亦水平的の肢節多く其形稍彎曲せる丁字状をなす。島の中部に於ては浦郷灣南より北に深く凹入し、従つて島は此部に於ては著しく狭窄し、地峽の幅僅かに二百米に過ぎず。且つ此地峽の地は其の左右の地が富士岩より成れる山岳なるに反し極めて低平なる砂地なるを以て島は恰も此の點に於て二分せられたるの觀あり。浦郷灣内より島の西北海岸に出てんとする小舟は南方赤瀬瀬戸を迂回するの煩を避け、人力によりて直ちに此の陸地を越ゆるを常とし、此の地峽に船越の名あり。船越の西方は略々南北に延びたる半島にして、二百米内外の連嶺これが脊梁をなし、其の頂上は高低甚しからずして稍廣き平野を作り、東方即ち内浦に向つて比較的急に傾斜せり。此の半島の中部には横山越(二百二十四米)あり、西南の方三度より東北の方赤の江に通ずる山路に當る。船越の東方に於ては島の脊梁は西南西より東北東に走れる連嶺にして、北海岸に沿うて高峰山(四百四十六

知夫里島

米高く聳え、其東南に方りて南方別府灣頭の別府より北海岸の耳浦に通ずる松峰岬(百四十米あり)。高崎山の南方次第に陵夷したる山麓には西方浦郷灣頭の宮崎より東方別府に至る道路ありて、其の南方には一半島南に向つて内浦に突出し、此處に焼火山(五百二十五米の秀峯島前群島の略、中心をなして占坐せり)。

知夫里島は西の島の南方にありて赤灘瀬戸によりて相隔てられ、又中の島との間には大口瀬戸あり。西の島と共に知夫郡をなし、面積は二島を合して約七十一平方軒半を有し、其の本島に係るものは十四五平方軒に過ぎざるべし、島は東西に長く延び、北岸には出入極めて少なけれど、南岸には數多の半島岬灣を有せり。地勢は概して中の島に均しき丘陵地なれども、西部に於て最も高く此處に赤禿山(三百七十六米の屹立するありて、これより東方に至るに従ひ次第に低くなり、其の東端に於て一小半島南方に突出し獅子鼻の岬角を作れり)。

島前の諸島は何れも土地狭小にして従つて平野河流等の記すべきもの更に

島前諸島の海岸

島前の地形

無し。島前諸島の沿岸を見るに、西北に面して直ちに外海に接する所即ち西の島の西北岸、知夫里島の西の如きは何れも多くは險崖を以て海に臨めり。蓋し是れ冬期猛烈なる西北風の爲めに生ずる激浪怒濤は此の方面の海岸を浸蝕して、かゝる地形を作成したるものなりとす。沿海の小嶼其の數亦少からず。知夫里島の東岸に近き波嘉島、南岸に近き島津島神島、中の島の東北に方れる松島、其の北にある大森島等は稍大なるものにして、中の島の北方にある二股小森の兩島は中井口の門口を挟みて並立し最も著名なり。

島前諸島の地勢を通覽するに、稍地中海の火山島サントロン島に類似し上述の三大島は相並びて鼎足狀をなし、中に抱ける内海の中央部には焼火山屹立して従つて内海はY字形をなせり。内海には諸處に良港乏しからずして、焼火山北麓の西部に浦郷灣、東部に別府灣、中の島の西北海岸にある菱浦の如き即ち是れなり。島前諸島の地は其の大部分は輝石富士岩より成れるものにして、唯焼火山の南半は流紋岩より成り、又中の島には諸處に玄武岩の小露出あり。今焼火山の頂上に踞して四周の地勢を観察すれば三島は堤坡の如

島後

く此の山を圍繞し、内側即ち焼火山に向へる側面は急険にして焼岩の累層を認め得れども、外側は緩斜して丘陵地又は裾野状をなし、殊に西の島の横山越以南に於て其の状最も明瞭なる者あり。島前が牧場に乏しからずして、隠岐が畜産に名あるも亦此の地形與て力ある者と稱せざるべからず。蓋し島前の三大島は一の二重式火山の殘片たるに過ぎざる者にして、焼火山は火口丘、これを環擁せる三島は外輪山をなすものなり。此の一大火山は其始め外輪山の成りて後、風化水蝕の作用を受け歲月を経るの久しき、甚だしき崩壊をなし、舊火口は變じて現今の内海となり、其の後新たに迸發したる流紋岩は火口丘焼火山を作りたるものなり。されど目下火山の活動は全く絶滅し、加之外輪山たる三島の地勢も流紋岩玄武岩の噴出と風化水蝕の作用とにより、大に其の火山たるの特相を缺如せり。又日本後紀等の舊記によれば本島には屢々火光の擧るありて、闇夜海上に漂盪する船舶之れに依りて安全を得たること少なからずと、夫れ或は然らんか。

島後は島前諸島の東北約十二軒を隔て、ある一大島にして、周吉穩地二郡

島後の山岳

の地をなす。本島の沿岸は屈曲出入に乏しからざれば、毫も敢て一直線をなす所なしと雖も、北端の白島崎、東岸の黒島崎、西岸の福浦崎、那久崎及び南岸の西郷岬、蛸木の鼻の六地點を取りて角點の位置に充つるときは、本島の形狀は略六角形に近しといふを得べし。本島東西の幅凡そ十八軒、南北の長さ二十軒、面積約二百十三平方軒を領す。

島後の地勢を観察するに、其の沿岸屈曲の狀は略島前に似たれども、垂直的の肢節は稍これと異なりて數多の峰巒重疊群起し、其の最高峰を島の北部に偏在せる大峰山(六百六十六米とす。これより山嶺南に延び、三つ頭山時張山及び中山越等を経て西方に彎曲し、横尾山(五百六十八米となり、更に南方に延びて檀鏡山(四百九十米)を起して後は山勢次第に陵夷し、遂に本島最南部にある柄尾越附近に終る、又此の連嶺より離れて大峰山の西南に嶽山(三百八十一米)ありて重栖川溪谷の北に聳ゆ。更に本島の東部を觀れば、大峯山の東南に方り、北谷川の溪谷を隔て、葛尾山(五百二十五米)あり、之れより連嶺南方に亘り、鷲が岳(五百五十七米)大満寺山(六百四十六米)等を起す。これより南

に赴くに従ひ山勢次第に低く、遂に一旦西郷灣に終ると雖も其の南岸に於て再び隆起し、愛宕山(百七十七米)、飯野山(二百三十五米)及び赤畑山(百六十餘米)の小岳を生ず。此の連嶺の東方にも亦南北に走れる兵陵の連嶺ありて、北部には金橋山(二百六十六米)、南部には西郷灣の灣口に臨みて金峯山(二百〇六米)等の小峯あり。

之れを要するに、島後の地勢は島前に比して稍複雑なるを見る。即ち内地には峯巒起伏し、多くは鈍圓錐狀をなせども、又往々鋭尖なるものあり。西郷町の後方には多少の臺地を存し、又八尾川重栖川の沿岸には少許の平地を開けり。かく地貌の稍單純ならざるは地質の差異之れを然らしむるものにして、本島の基盤は片麻岩及び第三紀層より成れども之れを貫きて富士岩流紋岩及び玄武岩等の迸發相踵いて起り廣く基盤を被ひ、其の地質構造稍錯雜すればなり。彼の大満寺峯の如きは最後に噴出したる玄武岩より成り、其の熔岩は遙かに南方に流れて西郷町背後の臺地を作れり。されど其の判然たる噴火口を認めず。然れども本島に於ては最近の時に至るまで火山活動の勢猛烈

島後の水系

なりしとは、彼の方言馬蹄石の名ある大小不定の黒曜岩塊片を混ゆる火山噴出物が第三紀層を被ひ最上部を占めて廣く播布するによりて證すべし。

以上述べし山岳丘陵の趨勢によりて河流の分水嶺を考ふるに、北端白島崎に起り、大峯山三つ頭山時張山中山越横尾山を経て西北に彎曲し福浦崎に至る一線と、南端蛸木の鼻に始まり柄尾越より北して檀鏡山横尾山となり、之れより東北に折れて中山越時張山三つ頭山高尾山となり、更に東南に彎曲して鶯が峯大満寺山及び金橋山に至る一線を得べし。其の状恰かも「」字形をなし、本島河流の灌域自ら四區に分る。其の東南西北の兩區にある溪流は殆んど皆相集りて各一川となり灣に注ぐ。東南流して西郷灣に注ぐ八尾川、西北流して福浦に入る重栖川即ち是れなり。東北・西南兩區の水は分水嶺の主線より分れたる小分水嶺によりて數多の溪流に分る。西南流する檀鏡川宇多木川、北流する北谷川春日川の如き其の中稍大なるものなり。然れども本島の地域元來狹隘なるを以て、河流は皆細小なる溪流にして、隱岐國中第一の大川たる八尾川と雖も長さ僅に十五軒に過ぎず。唯、島前に比して稍川流たるの名稱

島後の海岸

を下し得べきもの多少之れあるなり。

島後の海岸は小なる屈曲出入甚だ多けれども、其中稍著るしきものは西の福浦灣、西南の郡萬灣、東南の西郷灣とし、就中西郷灣は安全の錨地に於て、北海要港の一なりとす。海岸一般の形勢は多くは險崖を以て水に接し、夥多の岩礁岸に近く散在せり。而して其の岬角近傍に於て殊に多きを見るは是れ激烈なる風浪の作用により浸蝕分離せられたるものたるが故なり。津戸村の沿岸、白島崎の近傍の如きは其の最も顯著なるものとし、何れも皆風景の絶佳を以て聞ゆ。

島後の池沼

島後には池沼の大なる者なけれども、唯西郷灣の東岸津井村の地に於て金峯山の東麓、立石崎の西方にある雌池及び雄池は池畔に馬蹄石黒曜岩を産するを以て名あり。雌池は西方に、雄池は東方に小丘を挟んで並列し、甲は周圍五百十米、乙は七百十米に過ぎざる小池なり。此の兩池東西北の三方は丘岡を繞らし、南方は低き沙地によりて海と隔てらる。蓋しこれ往時は海と相通じて灣をなせしもの、波浪の作用にて漂積せる土砂の爲めに外海と隔絶せ

竹島

られたるものとす。其の他西海岸にある油井村の南方に油井池、檀鏡山の南麓に成澤の池と稱する小池あり。

隠岐群島の西北海上約八十五哩を距て、一孤島あり、竹島といふ。從來何れの國に屬するや不明なりしが明治三十八年二月二日以降公然日本の版圖に入り、島根縣所屬隠岐島司の所管となれり。本島は北緯三十七度十四分、東經百三十一度五十五分に位し、又他計甚麼或は舩羅島ともいふ。島は一つの狭き水道長さ約三百三十米幅凡そ百米、深さ凡そ五尋を距て、東西に相對峙せる二個の主島と其の附近に碁布散列せる數個の小岩礁とより成る。これ等の岩礁は概ね扁平にして上部僅かに水上に顯出するに過ぎず。主島は全く巖、たる岩石にして、海風常に全面を吹き荒み、島上一の樹木なく、僅かに雜草の生ぜるを見るのみ。沿岸は全く斷崖絶壁にして殆んど攀登すべからず、所々に奇形の洞窟ありて海豹群の棲所となれり。島上飲料水更に無く、從つて人の住居に適せず。唯々毎年四五月頃より七月に至るまで海豹多く此處に群集するを以て漁者の屢々行いて此の附近に出獵するあるのみ。島の附近は海

深しと雖も其の位置函館に向つて日本海を航行する船舶の航路に當るを以て極めて危険なりといふ。本島は西曆千八百四十九年フランス船リアンクール號 (Lincoln) の發見に係り、其の稱呼を船名にとりてリアンコート岩と稱し、其の後千八百五十五年イギリス軍艦ホルネット號 (Honet) はこれをホルネット列島と名づけたるとあり。

第二章 海洋並に海岸線

本地方の海岸の狀態は、前章地形の下に論じたるが如く、南北兩面に於て著るしく異なるを見る。即北半面日本海に面せる海岸に於ては、極めて單調にして、唯島根半島ありて其の中に宍道湖中の海を擁するを見るの外、著るしき肢節なきに反し、南半面即瀬戸内海岸に於ては、岬灣の出入極めて多く、無數の島嶼海面に基布して、肢節の多きと九州の北部と共に、本邦稀に見る處なるのみならず、煙波穩なる内海に向へるを以て、地形の複雑なるは自然に人文の發展を促して、人文上の肢節にも又甚だ富めるを見る。然して

概説

日本海方面にありては、海面廣濶にして深度亦大に、十尋の等深線は直に汀線に逼り、少しく沖に出づれば急に其深さを増加すれども、瀬戸内海にありては岬角半島島嶼によりて、海面は灘と稱する數箇の海區に分たれ、ペンク敦の所謂灘式の特色を現はし、其深度も極めて小にして、大部分は二十尋を超ゆるとなく、唯稍深き所は、潮流の急なる海峽の部分に横はるを見るのみ。又此瀬戸内の海面は、昔より重要な交通線路をなし、沿海の民は海事に堪能にして海運よく開け水産も亦頗る發達せり。加ふるに其海面には大小幾多の島嶼基布羅列し、海岸には長汀曲浦斷崖絶壁と相連なり、白沙青松之を點綴して、風光の明媚なると本邦海岸中多く見ざるの地方なるを以て、海外航路の船舶も特に途を此海に取りて其風光を樂まんとするもの少なからず。

一 瀬戸内海岸

瀬戸内海岸は前卷近畿の部に於て、其東方の一部播磨の海岸を述べ、筆を赤穂灣に擱きたりき。されば本篇に於て述べんとする部分は、赤穂灣以西の

海面の

播磨灘

海岸及海面にして、瀬戸内海の北半大部を占め、之を第一區播磨灘及備讃海峽第二區水島灘及備後灘第三區藝豫海峽及安藝灘第四區廣島灣第五區周防灘及下關海峽の四區に分つとを得べし。

播磨灘 播磨灘は瀬戸内海の東部を占る廣き灘にして、其北部には家島西島の諸島相列なり、小豆島と相呼應して、海面を自ら二部に分つ。東南部は大にして且開濶に、西北部は播磨備前の海岸に沿ひて東西に長く横はり又島嶼あり。然して其海岸は極めて複雑なる肢節を造り、播磨に於ては其東部は平滑なる沙濱をなせども、西半は瀬戸内海の特徴を現はして、岬灣出入し赤穂灣其西端をなすとは、既に之を前卷近畿の部に述べたり。今赤穂灣を出て、備前に入れば、其海岸に片上灣と稱する極て狭き、峽灣灣入し、鹿久島其東に横はりて、本土と相對し其間の海峽は赤穂片上兩灣間の一水路をなせり。片上灣は其灣口に長島頭島横はりて、非常に複雑なる灣形をなし、其四周は急に傾斜せる山を以て擁せらるれども、其の深さは甚だ小なり、片上灣を出て、西方に進めば、リアス式の小灣出入し、やがて尻海浦なる一灣を得るな

り。此灣は東方に開口せる淺き灣にして、僅に小和船の碇泊に堪ゆるのみ。尻海灣と一半島を隔て、横るは牛窓の港にして、前島黒島其口を擁し、灣内には沙洲發達すれども、前島と牛窓半島との間に挟まれる海峽の部分は、稍深くして安全なる錨地を造り、古來瀬戸内沿岸を通ずる和船の爲に、重要な一港をなしたるのみならず、又漁港の性質を帯びて、附近水産業の一小中心をなせり。之より西に進めば、播磨灘の將に盡きんとする邊に、兒島半島の斗出するありて、其中に大なる同名の一灣を抱く。此灣は狹長なる海峽によりて、播磨灘と相通ぜり。今此海峽に沿ひて灘より灣に入れば、左舷には花崗岩より成れる山岳性の半島横はり、右舷には中國地方に於ては比較的廣き沖積層平原發達せり。是れ東西兩大川の造りたる者に外ならず。即灘より海峽を西に進めば、幾くもなくして東大川の此處に開口せるを見るべく、尙進むと里許にして、再び西大川の口に會すべし。此河口邊は即中國の大都會なる岡山市の外港の横れる所にして、所謂三幡港と稱するは即是なり、之より西大川を溯れば、始めて市に達するとを得るなり。更に西すれば水面俄に

開けて此處に所謂兒島灣を作る。兒島灣は其形略圓形をなし、其水極めて淺く、僅に小舟の往來に堪ゆるのみ。其沿岸には低平なる沖積地發達して、洲渚沼澤相連なり、近時人工を加へて此處に新耕地を造るに至れり。就中藤田組の埋立工事は、其規模最も大なる者とす。兒島灣を出て、半島の南岸を跡つぐれば所謂備讃海峽に入る。備讃海峽は播磨灘と水島灘及備後灘との間に横はれる海區にして、其幅狭く主として花崗岩より成れる數多の島嶼は、狭き海面に、點々散在せり。其北岸兒島半島の沿岸は、平行ならずして且つ出入に富み、直島井島荒神島等大小幾多の島嶼散在して、半島との間に一灣を造る、之を宇野灣といふ。兒島灣は水深小にして、瀬戸内航路に遠きを以て、近時此灣に築港工事を行ひ、又山陽鐵道を此地に延長して、岡山市の咽喉港たらしめんとするの計畫あり。兒島半島の南端澁川よりは、海底電線起り、中國と四國との間に於ける、最狭海區を横斷して、讃岐の乃生岬に達す。兒島半島の西南端に至れば、味野灣の灣入するありて、其沿岸には平沙相連なれるを以て、鹽田此處に發達し、野崎氏の所有に係る者は其規模最大なり。更

水島灘及備後

に進んで半島の西南角に至れば、櫃石島其前面に横はりて、海峽を造り、其沿岸に下津井の一小港あり、近海漁業の一市場をなす。下津井港を出づれば海面稍、開けて一灘を造る、水島灘是なり。

水島灘及備後灘

諸島相連なる。此島は總て花崗岩より成れる群島にして、備讃海峽の西端にある與島より、西方に亘れる一列島を稱する者なり。之を東方より數ふれば、與島鹽飽本島廣島佐柳島眞鍋島北木島白石島大高島にして西北に長く連なりて、遂に中國の海岸近く横はれる神島に及ぶ。此等の列島と、本土との間に開ける海面は、即水島灘なり。通常瀬戸内の汽船航路は、此列島の外側に沿ひ即與島より沖の洲の北方を経て高見島と佐柳島との間を通ず。此間の海面は之を鹽飽の瀬戸といふ。鹽飽瀬戸より西々南に進めば左舷に讃岐一大岬角なる三崎を望みて、之より再び廣濶なる一大海區に入る、之を稱して備後灘と云ふ。

今水島灘沿岸につきて觀察せんに。下津井の瀬戸より海岸に沿ひて西すれば、

水島灘の北部に當り、河邊川の三角洲發達して、近海極めて淺く、其一部に玉島の港あり。之より西々南に進めば、鹽飽列島の北端にある神島と、本土との間に通ずる、極めて狭き海峡狹瀬戸を過ぎて備後灘の正北隅に出づべし。此處に笠岡灣の灣入あり、所謂笠岡の港は其東北隅に位す。又笠岡灣の西方即蘆田川の沖積層平原には、福山なる一都會あり。

東方より瀬戸内海を航行する船舶は通常西南に向ひて、伊豫の來島海峡を通ずれども、別に備後灘に於て此航路に分れ、西微北に進みて中國の沿岸に向ふ航路あり。此等の船舶は所謂三原の瀬戸を通過するものにして、來島海峡を通ずるものに比すれば、航程長けれども、潮流微弱なるの利益あるを以て、屢、此の航路を避む海客尠ならず。今備後灘の東端三崎の沖に於て、南航路に分れ此航路を西微北に向へば、回轉白色毎二十秒毎に一閃光を放てる、百貫島の燈臺の下を過ぎりて、備後灘の西北に位する布刈の瀬戸に入り、次ぎて三原の瀬戸に入るなり。

藝豫海峡及安藝灘

所謂藝豫海峡と稱せらる、海區は、三原の瀬戸

藝豫海峡及安

と來島海峡との間に横はれる海面にして、東は備後灘に西は安藝灘に隣りす。

其間には因島生口島佐木島大三島伯方島大島大崎上島大崎下島等を始とし、大小無數の島嶼密接して横はる。勿論此等の諸島は分列せる地塊を作れるものにして、其相互の間には複雑せる幾多の水道を通ず。其南端にあるは即來島の瀬戸にして、中央にあるを伯方の瀬戸と呼び、北端に通ずる者は即布刈三原の瀬戸なり。今布刈の瀬戸に入れば、左舷に因島の大島を望み、右舷に向島を見る、因島の北角大須岬には小燈臺の輝くありて、此狭き水路を警戒し、又島内には船渠造船所の設あり。向島は岩子島と相並びて横はり、本土との間に狹長なる海峡ありて、有名なる尾道の瀬戸を作り、其北岸に瀬戸内海の一要津なる尾道の市街あり、又近海漁業の一中心となす。(第七圖甲) 漲潮は二海里半の速度を以て此海峡を東に流る此海峡を東すれば、松永灣なる淺灣ありて、鹽田此處に發達し、西すれば沼田河口に近く三原港の横はるあり、三原港を出て、瀬戸を南に向ひ、次第に西南に偏して進めば、左舷に小佐木

島高根島右舷に大久野島大崎上島等の岬角上に輝ける燈臺、其航路を指示して、遂に安藝海に出つるを得べし。此航路によりて安藝海に出づるとなく、三原より更に安藝海岸に沿ひて跡づくれば、海岸は平衍の地に乏しく、山岳丘陵海に臨み、而も其間には出入頗る多く、小港津に乏しからず。即忠海竹原三津内海川尻の港津あり、此等海岸の前面には又大小の島嶼あり、即大崎上島大崎下島豊島上蒲刈島下蒲刈島等の大島は、數多の小嶼を伴ひて、自ら列島を形成し、本土との間に一海面を劃せり。下蒲刈島は此等列島の西端にありて、最も本土と接近し、其間に猫瀬戸の海峡を作る、極めて狭き海峡なるも其水底は潮流の爲めに削磨せられて其深き處は六十尋に及べり。此海峡を出づれば、安藝海の一隅に廣灣なる一小灣あり、海底電線は灣の南角より發して安藝灘を横ぎり伊豫の柳原に通ず、それより吾戸瀬戸を通過すれば、即廣島灣に入るなり。

廣島灣

廣島灣の東部には、奇形をなせる二個の大島横はる。此二大島は共に著るしく肢節に富み、其の半島部には特異の名稱を付せり。即北にあ

吳港

る大島は三半島部より成りて此半島部に江田島西能美島東能美島の名あり。南にある大島は軀幹の部を倉梯島と云ひ。北に斗出せる半島部を瀬戸島と呼べり。此島はもと極めて狭き地峽によりて本土と連結したるものなりしも、治承年中平清盛之を開墾し、隠戸の瀬戸を開きて島となしたるものなり。今此狭き吾戸の瀬戸を過ぎて、北に進めは吳灣に入る。吳灣は西江田島を以て擁せられ、南は瀬戸島によりて圍まれたる一灣にして、灣の東岸本土の半島部をなせる處に吳の大軍港あり。吳港を出て江田島を左舷に、金輪島を舷頭に望み、西西北に向ひて進めば、やがて宇品の港に達す。宇品港は宇品島の東部にある港にして、始め此島は全く海中に孤立せるものなりしも、築港に際し、廣島市を流るゝ太田川の搬出する土砂を避る爲に、廣島市の南方に新地を作り、それより石垣を築きて、宇品島を連結し、島の東方を劃して、宇品港となしたるものなり。此港は明治貳拾七八年戰役に際し、兵站基點として、俄に其價值を高め、其重大なる價值は更に明治三十七八年戰役に際して之を繰返したりき。是を以て戰時に當りては運送船の集まる者頗る多く煤

嚴島

煙天日を蔽ふの壯觀を呈すれども、内地の貿易なく商港としては大なる價値なきを以て、平時には内海航路の小汽船の寄泊する者あるに過ぎず。然れども中國第一の大都會たる廣島市の前港たるを以て其價値決して尠なからず。廣島灣の北隅には、太田川の大三角洲横はり、近海極めて淺くして、新陸地は次第に南方に發達しつゝあり。其後方に延展せる平野は即此如くして成生せる太田川の沖積層平原にして、其中央に廣島市あり。宇品港を西に出づれば似島あり。其檢疫所は設備頗る完備せり。尙西すれば海岸近く、嚴島の一島横はる。此島は本土との間に狭き海峡を扼し、其海峡に面して島の北面に、嚴島神社あり。風光明媚日本三景の一に列なる。山陽鐵道は幅狭き、沿海平原を縫ふて、本島の對岸を通じ、其一驛宮島と本島との間には、絶えず小汽船の往復するあり。此海峡の西南部は特に大野の瀬戸といふ。夫より以南は海面稍開けて、唯小嶼の散點するを見るのみ、其中柱島稍はる。廣島灣の南端には大島なる一大島横はりて、伊豫灘との境を劃す。大島は瀬戸内海に於ける有數の大島にして、東西に長く横はり、其東部は極めて長く東方に延びた

伊豫灘

周防灘

れとも、西部は膨大して特に屋代島の名あり。大島の東には尙情島津和地島怒和島二神島中島等の諸島相連りて、廣島灣を伊豫灘より分つ。大島の西端と周防の東南端との間に通する極めて狭き海峡は之を大畑の瀬戸と稱し、其最狭部は半海里にも充たずして、其附近には暗礁多く、海底峻悪なるのみならず、潮流亦急にして、航海者の注意を要すべき地なり。

伊豫灘周防灘及馬關海峡

宮島より大畑の瀬戸を通じて南に出づれば、左舷に大島、右舷には周防の東南端をなせる熊毛半島の長く斗出せるを望む。此熊毛半島に沿ひて南に下れば、西南角近く長島の横はるありて熊毛半島との間に上の關海峡を挟む、海峡の西岸長島の岸には、上の關の港市あり、東岸熊毛半島の尖端には室津の港市ありて相對せり。此の海峡は極めて狭くして小船の外通し難しと雖も、上關室津の兩港は瀬戸内の港津として古來其の名高し。上關海峡を入れれば、半島と長島との間に抱かれて、一小灣を造る。水深く且底質泥土にして、最良の避泊地をなす。(第八圖)灣の西口は佐合の瀬戸と呼ぶ。之を出て、右舷に半島を望み、左舷に叶島の岩礁を避け

て、正南に進めば、長島祝島の間なる花粟の瀬戸を過ぎて、開潤なる伊豫灘に出づべく、又佐合の瀬戸より正西に進めば、周防灘に出づべし。周防灘は周防の南岸と、豊前の國東半島以西の海岸によりて抱かれたる、一大海區にして瀬戸内海中最も開潤なるもの一なり、灘の中部には島嶼の見るべきものなく、小島僅に海岸に沿ふて散布するあるのみ。然れども灘の通有性として水深甚だ小に、深き所にて三十尋を超ゆること稀なり。今周防の北岸を西に跡つぐれば、佐合の瀬戸を出て、西北に進み室積の港に至る、此港は赤石岬西北より西南に廻り鉤状をなして、斗出し、其内に包みたる愛らしき一港にして、赤石崎は海中の小島が砂洲によりて本土と連結したるものなり。これより尙砂濱を辿りて西北に進めば、島田川の河口あり、此川の下流は一度膨大すれども、吐口に至れば、沙洲兩岸より發育し來りて、再び狭窄し奇形を呈せり。島田河口と室積港との間の海濱より、海底電線起りて、周防灘を横ぎり、伊豫に達す。島田川の河口より西に進めば、海岸近く二個の大島横はる東にあるを笠戸島といひ、西にあるを大島といふ。此二島は殆んど陸

地と連らんとする程、極めて狭き水道によりて本土と隔てらる、即笠戸島は其北端に對する陸地より砂洲の斗出するものありて、將に本土と連結せんとし、大島は細き運河によりて僅に本陸と分離し居るに過ぎず。此二大島の間には肢節に富める一灣を形成し、笠戸浦と名づく、水深く碇泊に便にして、周防灘に於ける一大良避泊地たり。更に此灣と大島を隔て、其西北隣に徳山灣あり、此灣は東に大島を扣へ、西に黒髮島大津島の如き細長き島嶼を圍らして、其間に包み込まれたる良灣なるを以て、風浪穏なるのみならず、灣内水深くして大汽船を泊するに足る。是れを以て一時は大阪商船會社と内海航路を競争したる共榮社と名くる一汽船會社は、其本據を此地に置きたりき。されば今尙周防灘に於ける一要害なるを失はずして、其東北岸に發達せる徳山港市は、周防の一要害をなし、今は海軍の練炭製造所も置かれて、大汽船の出入すると稀ならず。徳山灣の西に隣り黒髮島を隔てたる一灣を福川灣といふ、又一港市をなし、和船の來泊するもの多く、漁船又群集し、海岸には鹽田發達す。これより海岸を西に進めば、暫時狭き沿岸平野を見れども、忽

にして山岳丘陵海に迫り來りて、其間二三の小灣あり、四郎灣富海等即之なり何れも和船の寄泊地なり。漸く進めば三田尻灣に至る、此港の背後には佐波川下流の沖積平原を扣へ防府の市街此處に發達す、三田尻灣は徳山灣に比し規模甚小にして、小汽船の外來泊するもの多からず。然れども瀬戸内通の汽船は絶えず出入して、地方的一要港たるを失はず。佐波河口に面して、海灣ありと雖も言ふに足らず、灣岸には中、關大海等の小寄泊地あり。要するに此附近の海岸には幾多の孤島ありしも、此等の孤島は佐波川榎野川などの築き成せる沖積層平原によりて連続せられ、今は全たく海岸に近き丘陵もしくは岬角となりて、其間に多くの小灣灣を作るに至りしなり。此附近の海岸に於て垂直水階節のよく發達せるを見るは、職として如上の理によるものなりとす。殊に丸山岬の如きは、山勢頗る急峻にして、近海航海者の好目標をなし。小港灣の岸には鹽田相連る。榎野川一名小郡川と稱し、其下流に沿ひ小郡の町あり、中國街道及山陽鐵道より、山口町に入る分岐點をなす。小郡は一見内地にあるが如く見ゆれども、榎野川を溯りて到達し得べきを以て、

一の港をなすものと云ふ得べし。榎野河口より西すれば、水深次第に小となりて、汀線に沿ひて淺瀬遠く發達し、海岸を去ると二三海里の沖に於て漸く三尋にも達せざる所あり。海岸の地又丘陵平野參差して相交はれり。本山岬は此附近の著しき岬角にして、絶壁をなして海に終る。本山岬を廻りて北すれば小野田の埠頭あり、有名なるメモント會社の煙突高く聳え多くの小汽船其岸に沿ひて投錨す。之より正西に進めば下、關海峽に入る。

下、關海峽は中國と九州との間にある一狹水道にして瀬戸内海の咽喉をなし極めて形勝の地位を占む。今内海より進みて海峽を通過せんか、先航海者の目に映するものは九州の北角をなせる艦岬なり、此岬は海峽の東口の南角を擁せるものにして、海面より急に聳立し、山腹には燈臺ありて廻轉紅白色を與ふ瀬戸内航海者の爲に極めて重要な指導者たり。周防の海岸は後に丘陵連り、沙濱之を縁取りて、其間に豊浦の市街あり。沿海には淺洲發達して、豊浦の前面には千珠滿珠の小島横はる、それより西に向ひ次ぎて西南に偏して進めば兩岸次第に迫り來りて、其間に幾多の洲及暗礁相連るを以て小燈臺

を其上に設けて、頻りに其危険を警む。海峡の最狭き所は九州の門司岬と長門の壇の浦との間に於て、其幅僅に六百米に過ぎず、即早鞆の瀬戸是なり、早鞆の瀬戸は潮流極めて急にして、門司岬附近に於ては大潮時に於て其速度一時間約七海里以上の速度を有し、殊に其東の部分に於ては湍潮を起す、小潮時と雖も尙三海里乃至四海里の急流をなし、船の潮流に乗りて、駛走する状態頗る壯快なり、然して漲溢の來るや、西流は高潮の起る前二時四十分が始まり東流は高潮の後五時二十分に起るを常とす、されば其流るゝ時間は西流五時二十分間にして東流六時四十分間の長きに及ぶ。此瀬戸を通過すれば、海面稍廣がりて、其西北岸には下關の市街連り、東南岸には門司の港市發達して、其間に港を造る、下關は山陽鐵道の終點、門司は九州鐵道の起點なるを以て兩者を連絡する小汽船は絶えず往來して止まざるのみならず殊に門司は其背後の地方に豊富なる炭田を有するを以て、石炭積載の爲に船掛りする大船巨船少からず、加ふるに此海峡は内海の咽喉を扼し内外航海の要衝に當るを以て、船足の繁さと本邦稀に見る處なりとす、然れども近來門司の發達に

伴ひ、下關の繁榮昔日の如くに進歩せざるとは後章人文を説くの條下に述べたるが如し。下關海峡の西に横はれる大島は之を彦島といひ、陸續きの如き觀あり、此島と中國との間は極めて狭き小瀬戸海峡にして小船を通ずるに過ぎざるを以て船船は多く彦島と豊前との間に挾める大瀬戸の海峡を通ず。今下關を外海に向ひて發すれば右舷に與次兵衛島巖柳島等の岩礁小嶼を望みて、大瀬戸を西南に向ひて進み、やがて航路を北に轉じ、彦島の西に沿ひ、六連島を左舷に望みて日本海に出づるなり。彦島の西方の海は非常に淺くして、甚だ狭き航路を作るに過ぎず。六連島の上には燈臺ありて不動白色の燈光は十五海里を照し東口の鱸岬と共に下關海峡の門戸をなす。

二 日本海海岸

長門・石見の海岸 下關海峡を出て、日本海に入れば、此海區を響灘と稱し、西南方九州の沖に開ける玄海灘に連る、響灘の沿岸は、海岸線南北に走り、其間に大なる出入を見ざれども、丘陵屢、海に迫りて幾個の小港を造

日本海海岸
長門石見の
海岸

り、其間に平坦なる沙濱横はり、漁村農邑點々之を綴る。今此等の小出入を南方より數ふれば、小瀬戸の海峡を出て暫くにして村崎鼻の突出あり、其東南に安岡の小灣を擁し灣岸には小防波堤を築き小船の繫泊に便にせり、それより北に進めば、幾何もなくして網代岬の南方に斗出するあり、其東に吉見灣を扼す。網代岬の北には佛岬目岬相接し、目岬の北には吉母と稱する愛らしき小灣あり、和船は好んで此處に碇泊せり。之より以北は丘陵直に海に迫りて峭壁をなし其の著しきものを觀音岬といふ、其西方に横はる一島を蓋井島と稱し全島山勝ちにして巍峨海中に聳立す。島の西南部に峙てる高峰を金比羅山と名づけ、其東麓小港を形成し防波堤を設け漁船の碇泊に便せり。更に本土に返れば、觀音岬の北方遙に神田崎の斗出するありて、其間奥行狭き弓形の一灣を形成し、漁船の繫泊するものあり、灣の南方には男女の二島より成れる厚島ありて附近に小嶼散在す。神田崎より更に海岸を北に進めば、丘陵直に海に迫り海岸屢出入して本場鼻に達す。本場鼻の前面に横はるもの之を角島と稱し、東北西南に延びたる一島にして、其兩端に丘陵横はり中央

は狭く且低し、島と本土との間は極めて淺くして海士ヶ瀬(第九圖)と稱し、砂礫の礁脈海底に横はるを以て深き所に於て僅に一尋、辛うじて小舟を通ずるに過ぎず、此暗礁の上には鳩島と稱する一小島あり、其南側は對岸の陸地と相對して、其間に一灣を抱き其島に近き處は、東風及北風に遮りて一好泊地をなせり、角島の西南夢岬の上には花崗岩にて造れる壯大なる第一等燈台聳立す、回轉白色毎十秒時毎に一閃光を放ち晴天の夜十八湮の外より之を望見し得べし。此附近の海路は航海者の爲に、注意を要する處にして、角島の西北四湮の海上に潮捲と稱する地あり海底に岩礁ありて少しく風浪ある時は、潮流其上に激して、激浪を造る。角島より東に進めば長門の西端に於ける一良灣に入る、即ち油谷灣之なり、油谷灣は其灣口を西に開きて深く東に灣入す、灣の南方に斗出するものを折紙の鼻といひ、其北方を擁するもの之を油谷半島となす。此半島は孤立せる山塊より成り、極めて狭き砂洲によりて陸地と連る、其東側にある一港を大浦といふ、油谷灣は其内部に進むに従ひ、砂濱相連り水深次第に減ずれども、獨り大浦港は油谷半島其西を擁して、能

く諸風を防ぐべく、水深大に且底質泥にして、錨の抓搔に適するを以て、主要なる錨地をなす。又此灣岸には鹽田漁村相連り、阿川河原浦懸淵等の村落相接す。油谷灣を出て、東北に向へば、川尻岬の突出あり、近海捕鯨の業盛にして、紀伊の能野肥前の五島と共に並び稱せらる。川尻岬を東に向へば、海岸の出入再び頻繁となり、海岸に近く青海島なる奇形の一島横はる、此島に擁せられて、數個の灣入あり、島の西北角と本土の今崎との間に灣入するもの之を深川灣といふ、北方に向ひて開ける圓形の灣にして、其真徑二五呎水深亦小ならざれども、北風に向ひ全く開けるのみならず、其東隣に一層好良なる、瀬戸崎の港あるを以て、其發達せず。瀬戸崎灣は、北方全く青海島によりて圍まれ、東方には大島笹島の横はるありて、其灣口を扼し、海水深く灣入し、灣内更に小灣を造り、甚形勝の地形を占む。所謂瀬戸岬港は、其西隅にある小灣を稱するものにして、灣の西岸に瀬戸岬の港市あり、此町は沙濱上にあり、極めて狭き水道を隔て、青海島と相對し、西隣深川灣との境を劃す。故に此町は東方瀬戸岬港に面すれども、背面直に深川灣に接するもの

なり。瀬戸岬港を出て、東に向へば、幾何もなくして阿武河口に萩の城市あり、市街は阿武川三角洲上の沖積平原にありて、其北方に笠山の半島斗出す、半島の西南海面は即ち萩灣にして近海には島嶼多く海岸には小半島相接す。此等の小半島は元來海岸に近き島嶼なりしも、今に砂洲によりて陸地と連結せるものにして、之が爲に萩灣の岸に幾多の複雑なる出入を成せり。笠山半島は此の成因によりて成れる半島の著しき例にして、笠山と稱する小火山の極めて狭き地峡により本土と連結したる者なり、笠山は愛らしき圓錐形の小峰にして、頂上に淺き噴火口の跡を存す、笠山の名は之によりて起りたる者なり。其他灣岸に狐島中の台城山の小半島相接す、何れも前者と其成因を同らし海に面しては絶壁をなせども、陸地との間には狭く低き砂洲の發育するありて半島をなし其の名は今尙島と稱せらるゝなり。中江の臺と城山との間には、鶴江の臺なるものあり、未だ全く陸地と連結せられざる一島にして、極めて狭き水路によりて本土と相隔つ。斯の如く灣岸には半島多く出入するを以て其間に數箇の小灣を造る、笠山半島と狐島との間を小島浦といひ、中の

臺と鶴の臺との間を中小島の浦と呼ぶ、何れも船舶の繫泊に適す。又萩灣の岸は甚淺けれども、少しく沖に出づれば十尋に達し大船を繫泊すべし。萩灣を出て、東北に進めば、砂洲發育して島嶼を連ね、半島を形成すると、萩灣岸に於て見たるが如く、大井河口の附近に其適例を見る、又近海には大島、植島、肥島、羽島等散布せり。之より大島と陸地との間の海峡を進めば、海岸絶壁多く其岬角をなせるものには、沖の猿モドロ岬等の名あり、更に東すれば、海岸には砂洲、岩角相交錯し、海面には岩礁、砂洲屢現はれて、東北に金井岬の斗出を望む。金井岬を東に廻れば須佐灣を得、此灣は甚だ大ならず、灣口には天神島と稱する小嶼、岩礁の一群島ありて、灣は之より東方に灣入する約一里に過ぎざれども、灣岸には絶壁、沙濱、岩礁、島嶼相錯し、其間に幾多の小灣を造る、即北には大櫛灣、福灣あり、南には須佐港、煙瀨ありて、日本海沿岸の主要なる港灣をなし、海岸航路の汽船常に碇泊す、須佐灣の東には高山山名と稱する圓錐形の山峯を頂ける同名の半島、嶮屈し、其の峭壁をなせる岩角には御岬、高山岬等の名あり。此の半島は其の形態の特色により日本海岸を航す

る海客の好目標をなし又其前面には七島の小群島散在す。半島の東には海水又灣入して江崎港を作る、此港は内外二部に分れ、外灣は北に向ひて開けたれども、内灣は西南隅に細長く灣入して、其南端海岸に江崎の港市横はる、然れども此灣は甚だ狹隘なるを以て、小船を容るゝに足るのみ。江崎外灣の東北面を擁するものを、宇生ヶ岬といふ。宇生ヶ岬及其東方の海岸には削壁相連りて遂に雄渾なる鐘岬となり長門右見此處に境す、これより石見に入れば、海岸の險なること次第に減じ、後方には丘陵起伏すれども、海岸は平滑なる沙濱延展す、これ石見の西部を灌漑し來る高津川の放瀉する所なり。高津河口附近は元來既記地方の如く、海水山谷の間に入りて複雑なる灣入をなしたるものなりしも、次第に土砂の沈積によりて平原に化成したるものなり。高津は其下流に横はる小港にして、平野の一隅には益田の一都會あり、此小坦地より東北に進めば、丘陵直に海に迫りて所々に絶壁を作り、其間に漁村の點綴するを見る、尙進めば幾もなくして濱田に達すべし。此附近の海岸は灣入して幅廣き灣を作り、其西南隅には長濱あり、東北には濱田の良港を有

す。長濱は沙濱に沿ひて、長き集落を成せども、甚般賑ならず、長濱の前面には馬島矢野島瀬戸ヶ濱島等の島嶼散在し、濱田の前面には鶴島横はる、瀬戸ヶ島と陸岸との間は、和船の爲に好良なる避泊地をなし、鶴島の附近には多くの汽船投錨す。斯の如く濱田の港は好良なる泊地をなすのみならず、風景亦佳なり。濱田より東北の海岸は断崖沙濱相參錯し、やがて中國第一の大河なる江川の口に達す。江川は山陰の山地を穿ち、峽流を造りつゝ、流下し來れども、河口は川幅廣く、門洲發達して、波浪之に激し、舟行頗不便なり、然れども和船の川に入りて假泊するもの少からず。河岸の小都邑を江津町といふ、もとの郷田にして海岸の一大驛をなす。それより海岸は再び絶壁をなし又沙濱をはさみて、其間に極めて小さリアス式の港を作る、温泉津は其主要なる一港にして小汽船碇泊し又温泉の湧出を以て知らる。海岸に波根湖と稱する潟湖あり、極めて狭き口を以て海と通ず、此口は湖と海との間に發育せる第三紀層が、波浪の爲に浸蝕せられて、生じたるものにして、海岸には第三紀層の削れるが如き断崖聳立し、海面には奇形の岩柱特立して、孤松其

出雲の海岸

上に立ちて、附近海岸の一勝區をなす。傍に波根と稱する一都會あり。

出雲・伯耆・因幡及隱岐の海岸

紀丘陵直に海に追れども、幾何もなくして杵築平野の海岸に出づ。杵築平野は既に地形の章にて述べたるが如く、宍道山脈と本陸とを分つ一大窪地の西部をなせる平原にして、其海岸は甚だ平滑、沙丘よく發達し、其中に一大潟湖あり葦菜湖と云ふ。此砂丘の上には桃を栽培し、春風胎蕩の時は來り遊ぶもの少からず、杵築の市街は其北端にありて、宍道山脈直に其背後に峙つ、宍道山脈は本陸と並行して殆ど東西に走れる孤立の山脈にして、西側に急斜し海岸には絶壁を作り、内側には宍道湖を抱く。杵築より海岸に沿ふて進めば、宍道山脈の西端をなせる日ノ岬の突出するありて、一大燈台其尖端に輝く。毎二十秒毎に一閃光を放てる速閃燈にして晴天光達二十一海里に及ぶ、日ノ岬の東には海水灣入し宇龍浦なる一小港あり、それより東は海岸の小出入甚多く鷲灣最名ありて、沿海航路の小汽船來泊するものあり、これと小半島を距つる一灣、之を十六島灣といふ、灣は東西に長く稍大なれども、港口

西に開くを以て良港と云ふべからず、其北の突角を十六島鼻といふ。これより海岸多く絶壁をなし、稍平なる處を選びて、漁村の點々散在するを見るのみ、暗礁亦少からず。此附近は山勢頗る急にして、分水線は中央部より著しく海岸に偏在し、海底亦之に應じて急斜し、十尋の等深線は殆ど汀線に接觸して走り、汀線を去ると一海里餘にして五十尋の線に達す。江角浦は此海岸に於ける大灣にして、西に開けると十六島灣の如し、江角浦と安道湖との間は佐陀川と稱する川ありて相連絡す、此川は稍深くして小汽船の交通に堪ふべし、江角浦の西北角を生洲鼻といふ、之より東方一帯岬角小灣出入して、小規模の錨地少からざれども、後方は直に山にして陸上の交通可ならざるを以て假泊地たるに過ぎず、此の小灣中稍名あるものを御津浦加賀浦とす、後者は複雑なる灣入をなして桂島等の小島其中に横はる。更に東すれば那波灣の灣入ありて灣内更に小灣に分れ那波浦多古浦等の名あり。多古浦を擁する岬角は之を多古鼻と云ひ山陰の最北點を印す。此岬角を廻れば築島海岸近く横はり、血和崎長く突出して其内に笠浦を抱く、灣の南隅千酌の漁村より海

底電線起りて、隠岐の奈須浦を過ぎ、西郷港に至る。之より半島の東端地蔵岬に至るまでは、海岸の出入犬牙の如く、其中に七類灣あり好錨地をなす地蔵岬は島根半島の最東端にして一大燈台其上に聳ゆ、毎三十秒毎に一閃光を放つ回轉燈にして晴天の夜二十三海里の沖より之を望むべし。

地藏岬を西に廻れば、美保關港を得、前面伯耆より斗出せる一大砂嘴は即夜見濱弓濱にして、其外面は砂嘴に特有なる大圓孤を畫き、其尖端島根半島と相對して、此處に美保關の良泊地を作る。半島と砂嘴との間は極めて狭き中江の瀬戸をなせども、裕に大汽船を通ずるに足る。その南岸には境の港あり。(第十三圖) 山陰に於ける最主要なる商港をなす、その入口砂嘴の尖端を、御台場の鼻といふ、白色不動の燈台あり、晴天光達六海里に及ぶ。夜見濱の内側にある海面は即ち中海の潟湖にして、深き所僅に四尋に過ぎず、中央に大根、小大根の二島あり、共に玄武岩より成れる扁平の島嶼なり、中海より更に東南に向ひて灣入せる部分を、深浦と名づけ米子の港市其岸に發達す、中海の沿岸は夜見濱を除くの外、多くは丘陵相連れども、獨り飯梨川意宇川

の河口に於て小沖積層平野の發展するを見る、中海と宍道湖との間には松江川ありて、小汽船を通ずべし、松江の市街は此川に跨る。宍道湖は宍道山脈と内陸との間に於ける、一大陥落地にして杵築の平野其西に發展し斐伊川は大三角洲を作りて此處に注ぐ、此湖は元來尙西に延びて海と連りしも、斐伊川の齧せる土砂の沈積によりて杵築の平野を形成し、漸次縮少して今日に至りしものなり、現今南北の幅三五海里東西の長さ八五海里を計り、最深部も僅に三尋半を超えず。

更に轉じて夜見濱の外側を南に進めば、日野川の河口あり、其東には大山の裾野海岸に逼りて、爲に海岸は一大圓弧を畫き、その一端に御來屋の港あり。元弘の昔、後醍醐天皇の隠岐より御船を寄せられし所にして夙に其名を知らる、其一突角を御來屋岬と稱す、平滑なる沙濱の斗出に過ぎず、それより天神河口に至るまでは、美しき砂濱及之に沿ひて發達せる砂丘相連る、天神河口の東南に東郷池あり、一種の潟湖にして、沙濱の發達により、次第に其面積を縮少す。東岸に温泉湧出し松崎の一邑あり、此池は橋津川によりて排

水し河口に橋津の港市あり。

伯耆因幡の境には短けれど鋭きコケが鼻の岬角突出して海岸の單調を破り其東、因幡に入れば海岸の沙濱に沿ひ青谷の小驛ありて長尾鼻の岬角更に其東を擁す、之より丘陵砂濱相次て來り遂に加露川河口附近の海岸に出づ、一帶の砂丘蜿蜒走ること大凡四里餘、加露川は正に其中央に口を開けり、河口の西北に當り鳥ヶ島其他の小岬ありて稍風浪を防ぎ大形の船は港外に泊し小船は川に入りて泊し、加露港の市街其岸に起れり、彼の長大なる砂丘は又其内側に潟湖を造り即ち西には湖山池なる大なる水滯を作り東には多鯨池、湯山池相列なれり、砂濱の盡くる所よりは小出入再び繁くして岩崖に富める岬角半島は小灣と交互して列なり其の沙濱には港津漁村の發達して浦富濱阪は其稍大なるものなり、而して因幡、但馬の境には山岳急に海に臨みて但馬の西端に斗出せる餘部岬に連なる。

隠岐の海岸に就きては前章地形の項に悉くせるを以て爰に之を贅せず。

三 海流及び潮

中國近海を流るゝ海流には對馬海流あり、此海流は屢に第五卷北陸の章に於て述べたるが如く、本邦近海の最も重要なる日本海流、即ち黒潮の一支にして、九州の南方に於て其本流に分れ朝鮮海峡を経て日本海に入り中國の北岸に沿ひ一時間約二海里の速度を以て流るゝものなり、水路部の報ずる所によれば此海流は夏季には角島附近にて殊に著るしき速度を以て北方に流れ、海岸より短距離の處に於て烈しき激湍を起し天候悪しき時は波浪極めて荒ると云ふ、之より海流は方向を轉じ長門の高山岬に向ひ北東に進み、海岸を距る二海里の處にありてよく之を感ず、若し其潮流と相合する所には必ず激湍を起し之によりて海流の走路は明に指示するを得べし、高山岬の沖より日の岬に至る間は尙ほ北東に向ひ海岸より多少の距離を保ちて流れ、日の岬より隱岐列島に至る間は東に向ひ南西風の日は大に其速度を増加す、中國の北岸は此暖流の爲めに冬季の溫度を緩和ならしむ、又之より蒸發す

る水蒸氣は、冬季大陸より吹き來る寒風のために送られて、山陰地方に降雪を與へ其量北越に如かざるも、三四月の頃に於て陰陽分水嶺は其峠の街道に於てすら猶殘雪を見る所あるなり。

潮汐

瀬戸内海に於ける潮汐の進退は日本海岸に於けると著るしく異れり、瀬戸内海に於ては潮浪は紀伊水道と豊後水道の二海峡より入り來り、其時刻は一定の標準時を以て述べれば、紀伊水道には六時頃現はれ鳴戸、明石の兩海の兩海峡に進み豊後水道にては七時半に佐賀關に入る、而して其東より來るものは播磨灘を通過して備讃海峡の粟島に至り、又佐賀關に入るものは一は西北に、一は東に偏し、後者は九時に伊豫灘を、十時に安藝灘を過ぎ此處に瀬戸内海の最大潮昇たる十二尺の高サを示し、十一時に備後灘、十二時に至りて粟島に至り前者に會す、又佐賀關より西北に進むものは八尺乃至十尺の潮昇をなす、九時三十八分下關海峡に逼まり十時之を通過す、海峡の最も狭き所、即ち門司崎附近にて、落潮流、即ち東流は高潮後五時二十分に始まり六時四十分連流し、漲潮流即ち西流は高潮前二時四十分始まり五時

二十分間連流す、其潮流極めて急激にして其最大速度は一時間七乃至八海里に及び海客の最も戒むる所なり、而して響灘に出づれば九州の北岸に沿ひて來れる潮浪と合し、中國の北西岸即ち石見以西の地に於ては十時二十分乃至十二時に現はれ其潮浪五尺三寸乃至三尺五寸にして、之より次第に東進するに従ひ出雲以東にては一尺を出入す、而して潮流は角島附近に於て漲潮流約八時間にして北東に流れ、落潮流は約四時間にして南西に流る、又川尻御埼より高山岬に至る沿海は海岸を距る四五海里以外の處と見島近傍は東方のみに流れ、高山岬以東に常に岸に沿ふて東に進み、時として反流を生ずることあれば天候變化の前兆となると云ふ。

今水路部の測定に基き、中國沿岸各地に於ける高潮時及び大潮升、小潮升及び小潮差を示さば左の如し。

地名	朔望高潮	大潮升	小潮升	小潮差
小豆島福田灣	十時十五分	五 $\frac{1}{2}$ 呎	三呎	二 $\frac{1}{2}$ 呎
牛窓港岡山港	十時十五分	六呎	四 $\frac{1}{2}$ 呎	二 $\frac{1}{2}$ 呎

三原灣	十時三十七分	十一呎	五呎	
上ノ關	九時三十分	十呎	四 $\frac{1}{2}$ 呎	
下ノ關海峡 <small>鱸崎</small>	九時五分	十四呎	八 $\frac{3}{4}$ 呎	三 $\frac{1}{2}$ 呎
下ノ關市街海岸中央	九時十二分	八 $\frac{1}{2}$ 呎	五 $\frac{1}{2}$ 呎	二 $\frac{1}{2}$ 呎
油谷灣大浦	十時二十五分	三 $\frac{3}{4}$ 呎	二呎	
江崎港	十一時四十七分	二 $\frac{1}{4}$ 呎	一 $\frac{1}{4}$ 呎	
濱田港	〇時十八分	一 $\frac{3}{4}$ 呎	一呎	一 $\frac{1}{4}$ 呎
境港	二時	一呎	$\frac{3}{4}$ 呎	
西郷港	二時四分	一 $\frac{1}{4}$ 呎	$\frac{3}{4}$ 呎	

瀬戸内海の潮流につきては尙ほ第七卷四國の條に於て之を評説する所あるべし。

第三章 地質

一 汎論

中國地質の特色

日本南嶺の裏面を成す中國地方地質の特色は、花崗岩類が其地體構造上に極めて要用なる位置を占むるにあり。次に中國地方地質の特色と云ふべきは、其の正式の始原代の岩石を見出だす能はざること之なり。周防國熊毛半島の四近には、片麻岩様の岩石の露出するあるも、是は明かに、塊状岩たる花崗岩が、壓力變性によりて片狀を呈するに至りし者にして、必ずしも之を以て始原代に屬する片麻岩類と認むる能はざるを以て、吾人は之を花崗岩類中に編入し、本書附する所の地質圖にも亦花崗岩として之を着色せり。又中國山脈の北邊及び周防地方には、從來晶質剝岩として區別せられたる地域あるも、是れ亦壓力變性を被れる千枚岩及び角閃剝岩の類たるに過ぎざるを以て、之

古生層

中生層

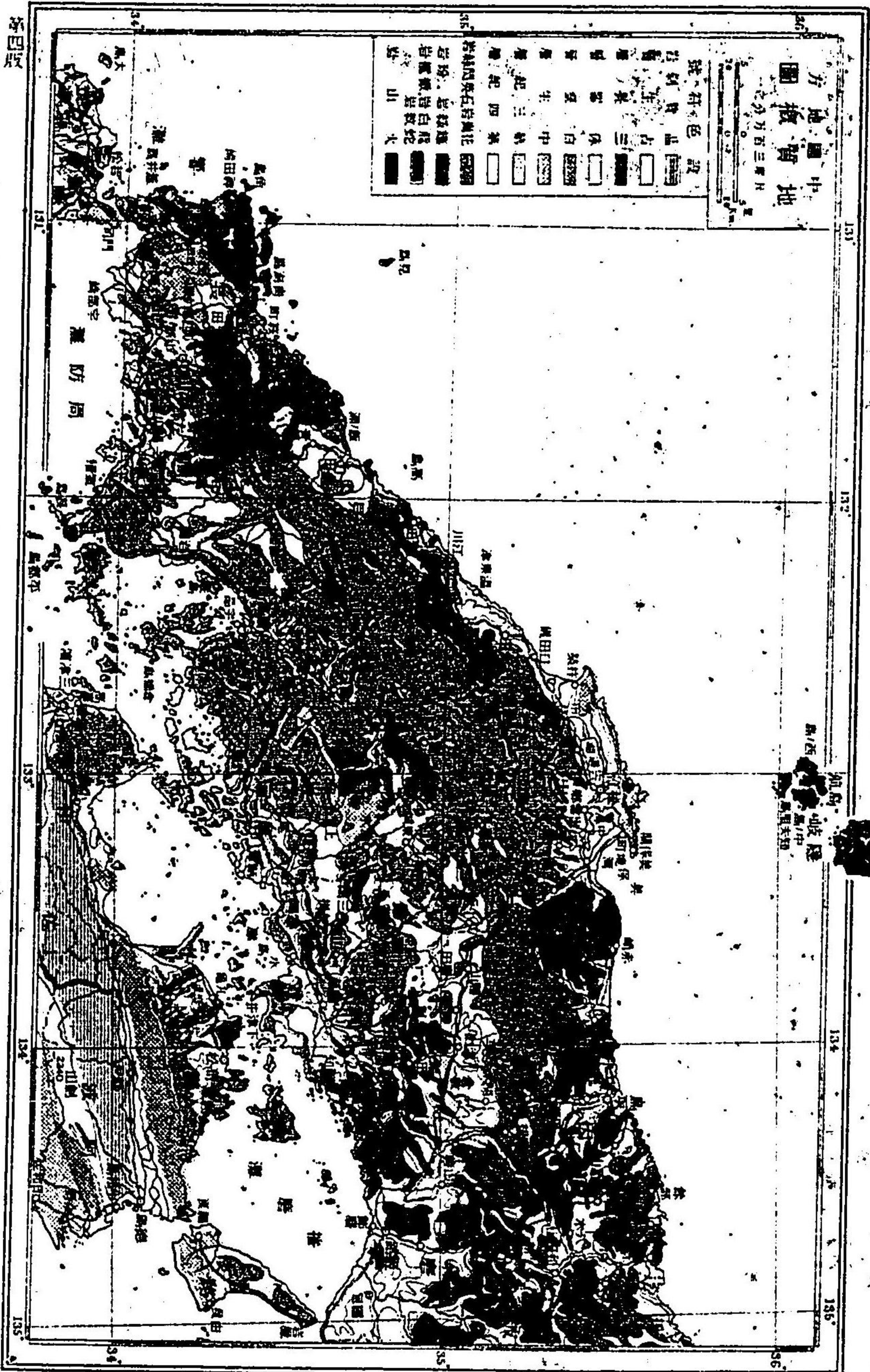
第三紀層

を古生層下部即ち御荷鉢系中に入れたり。古生層上中部は、花崗岩を始めとし、其他の噴出岩の間に小區域を爲して現はれ、普通の碎屑岩中殊に輝綠凝灰岩及び凝灰質粘板岩は厚層を爲して出て、岡山の北西の古生層區域、並に周防秋吉臺に於て見るが如く、紡錘蟲・シユワゲリナ・腕足介類等を含む謂はゆる紡錘蟲石灰岩は厚層を成して出て、秋吉臺は石灰岩地方の特色たるカルストなる地貌をなせるを見る。中生成は其の發育の面積に於て他地方に比して必ずしも狭少ならざると同時に、備中殘羽にはシウドモノチヌを含む三疊系あり、長門山野井四近には、ヂクチオフィルム等の植物化石を出だすレリチツク層あり、長門の東部及び西南部にはアンモン介を産する赤間關硯石統ありて、日本の中生層中極めて重要なる位置を占む。第三紀層は其の發育せる面積に於て必ずしも廣大ならず、其出だす所の化石に於て必ずしも學術上特別の價値を有するものあらず、中生層の種々學術上肝要なる事實に富むに比して、甚だ物足らぬ心地するも、彼の出雲八束郡湯町と布志名の間の新道より、タコブネ Argonatha の化石を發見したるを、曾てアンモン介と誤認し、従つて此

第四紀層

地方の岩層の一部を白堊系に屬すべきものと做し、宍道統の名を以て呼ばれたることあるは、本邦地質學發達の歴史上一顧すべきの價値ある者か。唯、彼の島根半島に於てセクオイヤ等を出だせる美保關附近の第三紀層は、果して單に其の附近に限らるゝ者なるか、或は謂はゆる宍道山脈の全體迄及ぶものなるかは、將來の研究を待つて後に知るべきの事ならんか。第四紀古層が或は第三紀の丘陵を被覆して其の邊緣に現はれ、或は斷崖を爲して大河の河畔に發達し、第四紀新層が河水の堆積作用によりて河流の流域地を形成し、或は海水の造成に係りて海濱の低地若くは砂丘を構成することは、前數卷に於て述べたる所と異なることなし。但し伯耆夜見ヶ濱及び出雲宍道湖附近の第四紀層の桑滄の變は、已に地形の部に於て之を述べたれば茲には之を説かず。眼を轉して火成岩の本地方に於ける頒布を見るに、其の最も廣潤なる面積を占め従つて其の最も重要な位置を占むるものは花崗岩と爲さるべからず。花崗岩は單に本地域内のみに於て最も廣く分布せらるゝ火成岩なるのみならず、花崗岩の此の如き廣き頒布を見るは、北日本に於ても、亦其の他の

中國の火成岩
花崗岩



第四版

本に於ても、未だ曾て之を見る能はざる所なり。本地域に於ける花崗岩の類布此くの如く廣大なるを以て、其の岩種と岩質とは千差萬別にして決して一定せず、従つて又其の噴出せし時期も一代に非ずして、交々起りしを知るに足るなり。周防に於ては古生層に接觸變質を與へて、古生層をして晶質剝岩の外觀を呈するに至らしめしものあり、長門の西部に於ては、或は中生層を貫きて往々中生層岩石の破片を捕捉し、或は中生層に接觸變質を生せしむるあり、蓋井島に於ては、岩の大小の團塊を全く花崗岩中に抱有し、其の噴出の確かに珩岩噴出の以後にあるとを表示せるあり。是等は孰れも花崗岩噴出の年代を考ふるに好資料たらざるはなし。然れども花崗岩の始原代に屬するものは、未だ之を本地域に於て發見する能はず。是れ本編に於て其の屢片麻岩狀を呈するものあるに拘らず、之れを始原代に屬する片麻岩とせずして、普通の花崗岩となしたる所以なり。次に本地域に於ける花崗岩は殊に純良にして良好の建築石材として古來より有名なることも、本地域の花崗岩を記するに當りては看過すべからざるの事實なり。備前犬島産の如きは、犬島石の

富士岩

名を以て早とに建築家間に噴々の好評を博し、皇城御造營の用材に供せられ、又大阪築港の工事に専ら用ゐられたるが如き、以て其の一斑を知るに足るべきなり。又中國に有名なる砂鐵も、其の原料は直接若くは間接に之れを花崗岩殊に其の粗粒なるものに仰ぐものなり。

玄武岩

本地域に於ける富士岩は、其の大山三瓶山等に於て見るが如く、頑火石を含む種類の割合に饒多なるを以て、其の特色とせざるべからず。本地方著名の火山は概ね此の種類の岩石より成るもの多く、東北關東中部等に於て其の多量の噴出を見たりし我が邦普通の輝石富士岩の如きは、割合に少きに拘らず、頑火富士岩の多く迸發せるは本地方の火山岩の研究上蓋し大に注意すべきものならんか。殊に玄武岩の噴出の多くして山陰地方によく發達せるが如き之を一の岩石區域と目すべく中國地方の一特性と云ふべきなり。殊に此の火山岩が圓錐形の火山をなすものと共に、臺狀を爲せる者の甚だ多きは、他地方に於て全く見るべからざるの事なり。加之玄武岩の分解に歸する土壤が磷酸の含量割合に少量なるに拘らず、地味極めて肥沃なるが如きも、本地方

古生層下部

の地質に關して特筆すべきもの一ならんか。今前卷の例により各地質系統に就き、其の梗概を左に述べべし。

二 古生大統

周防國山口附近に約東西の方向を取り、廣く露出する古生層下部、及び石見國濱田附近に略、北東より南西の方向を取り個々の岩塊となり擴布せるものは、其の岩石學上の性質、四國の品質剝岩系の上部を構成するものに酷似するの外観を呈するも、之れを紀伊半島に能く發達せる秩父古生層下部に比較し、且つ鈴木博士に従へば、周防國都濃郡に於て花崗岩迸發の爲め變質して空晶石を生せるの事實あるにより、此の岩層は正に秩父古生層下部に屬するものとなせり。

此の秩父古生層下部は、主として暗綠色緻密の輝岩、黝黑色を呈し絹絲光澤を帯ぶる石墨千枚岩、淡黝色若くは黄灰色を帯び、或は黝色の地に石墨千枚岩の碎片を雜へて黒斑を呈する長石千枚岩、及び白色若くは淡黝色の石灰

輝岩

岩より成り花崗岩流紋岩輝石富士岩等の火成岩により所々に貫通せらる。
輝岩は板状又は片状に剝け、主として褐色の輝石より成るも、其の多くは
變化して纖維状のウラル石緑泥石綠隴石等となり、時としては長石若くは石
英粒を交へ、謂はゆる凝灰質輝岩に屬し、石墨千枚岩と互層して全岩層の最
下部を占む。此の岩石は時としては晶質剝岩系中の綠泥剝岩に酷似し、往々
にして之れを區別する能はざるものあること、中部の三河地方に於けると異
なることなし。

石墨千枚岩

石墨千枚岩は薄板又は紙片状に彎曲して剝け、關東地方に於て見るが如き
岩面斑點を有するもの少ければ、一見石墨質の粘板岩に似たる外觀を呈す。
主として粒状の石英及び長石、粉末状の石墨、鱗片状の絹雲母より成り、少
しく綠色を呈するものは、綠泥石を混ず。岩體往々石英の薄層を介在し、又
石英脈を以て貫通せらる。其の風化せしものは黝白色若くは黝綠色を呈し、
滑石質を帯べり。全岩層の大部分を占む。

長石千枚岩

長石千枚岩は主として石英正斜の兩長石絹雲母及び綠泥石より成り、時と

石灰岩

してデルコンを交へ、就中長石を多しとし、殊に石見國折居の海岸に産する
ものは、大形の長石及び石英の晶子を中心として、其の周邊に長石石英等の
晶子輻射状に射出して奇觀を呈す。紙片或は厚板状に剝け易き岩石にして、
外觀四國の晶質剝岩中に出づる大崩壊片麻岩に類し、又硬砂岩の横壓力を受
け剝岩状を呈する者に似たり。石見國三隅川の上流地なる古和附近に於ては、
石墨千枚岩と層々相累なりて薄層を爲すも、其の他多くの場合に於ては厚層
を爲して出で、全岩層の上部に發達するを常とす。

此の岩石の風化靈爛せし者は砂粒状を呈し、黄黝色を帯び、絹雲母を散點
し、多少風化せる花崗質砂岩の外觀を呈す。

石灰岩は扁豆状を爲して石墨千枚岩中に介在し、晶質にして白色若くは淡
黝色を帯ぶ。石見國黒澤に露出するものは綠泥石を含み、綠色を帯び片状を
呈す。探掘して石灰燒製の原料に供する所少からず。

其の他石見國高津の西一里なる南田の路傍に石英千枚岩あり、高津河畔な
る角井に於ける石墨千枚岩は、剝状構造著るしからずして、石墨を減し石英

構造

を増し、砂岩状を呈す。

全岩層の走向及び傾斜は地方により多少其の趣きを異にし、石見にありて北の方日本海に臨む所は、三十度乃至七十度の角度を以て北西に傾き、三隅川の上流地方を構成するものは、花崗岩に近接する所は北西より南東に亘る層向を有し、南西に傾斜するも、花崗岩塊を遠かるに従ひ漸次層向を北東より南西に轉じ、北西に斜下す。岩層は數、玢岩、輝綠岩、閃綠岩若しくは石英斑岩又は石英粗面岩等の岩脈を以て貫通せられ、石見の海岸西村の路傍に於ては、岩床状を爲す玢岩及び岩脈を爲す輝綠岩能く露出し、益田町住吉神社の山麓に於ては石英千枚岩、石英粗面岩の岩脈によりて貫通せらるゝあり、其の西二里許なる松原附近に於ては石英斑岩に貫かれて著るしく岩質を變化せるあり。

備中・備後・美作の古生層

備中備後美作の諸地方に於て、或は花崗岩石英斑岩に接し、或は閃綠岩を以て貫かれたる古生層は、陸地を距ること餘り遠からざる深海底に沈澱堆積したるものにして、主として粘板岩及び輝綠凝灰岩の厚き累層より成り、其

安藝の古生層

の上層に往々薄き石灰岩及び硅岩を介在し、稀れに硬砂岩を其の間に挿む。粘板岩は緻密にして剝げ易く、往々凝灰質の岩片を雜へ角礫質粘板岩となることあり。輝綠凝灰岩は石灰質或は硅質を帶び往々其の間に輝綠玢岩の岩床を夾み、上部石炭紀に屬する厚き石灰岩層によりて被覆せらる。此の石灰岩は紡錘蟲或はシユワグリナ等の有孔蟲及び腕足類并に海百合の化石を含有し、其の厚さ二百米餘に達す。

以上古生層は關東山塊を構成するものと多少其の趣きを異にし、其の上下孰れに屬すべきや之れを知る能はざるも、多少秩父古生層下部の上層に似たる概なきに非ず。加之、屢噴出岩の迸發の爲に錯雜せる構造を有し、且つ接觸變質を起して粘板岩は暗褐色のホルンフェルスとなり、輝綠凝灰岩は輻射狀の輝石を生じて一種の輝綠岩構造を呈し、石灰岩は著しく粒状を呈し、柘榴石及びザラ石の接觸變物を生ぜり。

安藝國廣島市の北太田河畔の地に於いて花崗岩塊に包まれ、西南廣く周防國の中央に連亘する秩父古生層は、粘板岩及び角岩、若しくは硅岩又は硬砂岩

石見江ノ川
沿岸の古生
層

の累層より成り、往々にして石灰岩を其の間に介在せり。粘板岩には數種の區別ありて、其の太田河畔久地宮野等の地に露出するが如き濃綠色を帯び、往々硅岩と共に彎曲して剝岩狀を爲すものは石墨長石綠泥質物等より成り、多量の綠泥質物を混する者は輝綠凝灰岩に類し、津波田ノ尻等に露出するが如き暗褐色を帯び、石英脈を抱き、薄板に剝げ易きものは、褐色の黒雲母を雜ふ。石見江ノ川の沿岸長良の地に露出する者は、黒色を帯び厚薄の板狀に割れ、粘土は一部滑石様のものに變ぜり。角岩は主として硅質物より成る緻密の堅岩にして俗に之を燧石と稱し、下村より産するものは石墨を混じて暗黝色又は黒色を帯び、田ノ尻より産するものは少量の綠泥質物を雜へ白色斑緑を呈し、下村より産するものは黒色の地に淡紅色の縞目を有す。角岩の多少結晶質の明かなるものを硅岩と稱し、粘板岩と互層して諸處に露出す。硬砂岩は暗綠色若くは黝色の緻密乃至細粒狀の岩石にして、下山久地等に在るものは石英及び長石に雲母を雜へ花崗質となり、上田に在るものは更に綠簾石を混ぜり。石灰岩は平野に露出する者は少量の石墨を混じ、暗黝色を帯び、

古生層の接
觸變質

石灰燒製の原料となり、作木に在るものは雪白色を帯び、所謂糖狀石灰岩に屬し、中河内にあるものは多量の炭酸苦土を含み、白雲質石灰岩に屬す。石見國に在りて諸種の火成岩を以て貫かれ、古生層下部と斷層を以て界するものは、其の岩石の種類に於ては前記せる者と大差なく、たゞ笹ヶ谷銅山附近にある硬砂岩は、長石石英及び雲母より成りて花崗質砂岩となり、日原にあるものは暗綠色を呈して綠泥質物を混し、野口に露出するものは粘板岩の破片を雜へて斑點を有し、鹿足郡中木屋大木間に於ては、硬砂岩小形の扁豆狀を爲し、靈爛せる粘板岩中に突起し、恰も礫岩の礫子の如き有様を呈し、笹ヶ谷銅山附近に産する紅褐色の角岩は、不完全なる輻射蟲の化石を含有し、津和野吉賀兩河の落合に近き枕瀬の路傍に絶壁を爲して露出するものは、黝綠色を帯び大形の板狀に割れ、介殼狀の斷口を有し、赤岩に産するものは粉末狀の酸化鐵を混じ、赤褐色を帯び、白色の石英脈を通じ、板狀に剝げるを見るの差あるのみ。秩父古生層上中部を構成する粘板岩及び石灰岩が、花崗岩及び石英斑岩の

古生層の上
部の構造

如き火成岩と接觸して其の質を變じ、或は接觸礦物を生ぜるは、中國地方に於て隨處其の例に乏しからず。即ち石見國波田附近の粘板岩が、橢圓形を爲して露出せる花崗岩の岩株によりて貫通せられ、褐色雲母を生じて雲母剝岩となるが如き、又備前國津窪郡、備後國青品郡に露出せる粘板岩が、花崗岩の爲に變質せられて褐色の雲母ホルンフェルスとなり、輝綠凝灰岩が輻射狀の輝石を生じ、輝綠岩に似たる構造を生ずるに至りしが如き、或は備中國阿哲郡正田村に於ける石灰岩が、石英斑岩と接觸して粒狀となり、さらに其の中に柘榴石及びザラ石を生ずるが如き、又石見國越原銅山に於ける石灰岩が、花崗斑岩と接觸して、粒狀となり、俗にキクヂと稱する角閃石を生ぜるが如き、殊に其の著るしきものなり。

以上諸地に散見する秩父古生層上中部の走向は、秩父古生層下部と同じく中國山脈全體の趨勢に従ひ、概ね東西にして南北に起伏し個々の向斜層及び背斜層を作るも、其の諸種の火成岩に貫かれし所は、多少層向の變化するを見るに難からず。鈴木博士に據れば、長門石見の國境に接する所にありて、

三疊系
長門山野井
の三疊系

花崗岩富士岩流紋岩等に貫かれたる所の層向は、南西より北東に亘り、之を東に距れば東西に折れ、更に南東に轉じ、層向略弓形を爲して彎曲するも、吉賀川以東或は津和野川に接する所は、再び南西より北東の層向を取り、波田の花崗岩株に貫かる、所は、其の岩株を繞りて西北西より東東南に亘れり。

三 中生層 附御坂層

●●●●● 三疊系 長門國厚狹郡山野井地方の石炭を含む層は、三疊系中のレーチック層に屬し、北は侏羅紀層を以て被覆せられ、南は第三紀層を其上に戴き、主として砂岩粘板岩及び泥板岩の厚層より成り、其の他其の下部に於ては輝綠凝灰岩及び無燧炭を含み、上部に於ては褐炭を含む。層向は略東西にして、傾斜は北部に急に南部に緩に、時に六十度に達することあり。化石は山野井より植生に至る路傍の下部輝綠凝灰岩を含む所より發見せられ、凡て四帶あり。其最下層は黄黝色を帯ぶる粘土質砂岩にして此の中よりヂクチオフェルトシヤボニクム *Dictyophyllum japonicum* の多數を出だす。次の層は淡黝色の粘板

質砂岩にして風化すれば黄色を帯ぶ。此の層よりして種々の化石を出だす。上部の二層は單にヂクチオンキルト *Dictyophyllum japonicum* の碎片を出だすに過ぎず。此の岩層より出づたる化石は次の如し。

Cladophlebis nebbensis Brongt.

C. yamanoiensis Yok.

Dictyophyllum Nathorsti Zeiller.

D. japonicum Yok.

D. Koehbei Yok.

Podocarpites lanceolatus var. *gemma*, var. *minor*, var. *Eichwaldi*, var. *intermedia*.

Baiera paucipartela Nath.

Spiropteris sp.

Pinus sp.

Nilssonia Inouyei Yok.

以上ヂクチオンキルト、ナトホルムステイ *Dictyophyllum Nathorsti* はフランス領東

備中成羽の
三疊層

京のレーチック層に出て、クラドフレビス、ネムンシス *Cladophlebis nebbensis* はヨーロッパ及びフランス領東京等のレーチック層中に発見せられ、バイエラ、バンシバルラ *Baiera paucipartela* はスエーデンのレーチック層より産する者なり。化石は一般に保存極めて良好なるも、之れを包含する岩石脆きを以て大塊を得ること容易ならず。

三疊紀の標準化石たるプシユドモノチス、オコチカ *Pseudomonotis oeholica* を多量に産するを以て有名なる備中成羽附近の三疊層は、最下部に礫岩あり、其の上に整合的に植物化石を含む泥板岩被覆し、更に其の上を細粒の砂岩被覆す。而して三疊紀の標準化石たるプシユドモノチス、オコチカは實に此の砂岩中より出づるなり。其の化石を多く産するは、成羽町の北一里餘宇福地（宇福地）小字深帆（深帆）と稱する所にして、其の化石の種類は次の如し。

Pseudomonotis oeholica Keyserl.

Natica sp.

Cladophlebis sp.

Sagenopteris sp.

Arthrophyopsis? sp.

Podozamites lanceolatus Eichwaldi Hr.

Niissonia sp.

以上砂岩及び泥板岩の累層は、上に玢岩質凝灰岩を戴き、此の凝灰岩中には紡錘蟲石灰岩礫を含有する凝灰質礫岩及び礫岩質石灰岩を介在す。

以上三疊層は或は幾多の小玢岩脈を通じ、或は玢岩石英斑岩花崗岩等の火成岩を以て貫かれ、層向傾斜の如きも地方に由り多少異なるを免れず。領家に於ては東々北の層向を有し、北に急斜し、成羽町附近の地に在りては東南の層向を有し、西南に緩斜す。而して領家に於ては砂岩は之を貫通する花崗岩の爲に接觸變質を起し、黒雲母を發生し、深澤の東に於ては、石英斑岩は砂岩及び泥板岩を貫通し、之れを變質せしむ。

侏羅系(赤間關硯石統) 赤間關硯石統とは巨智部博士に由りて命名せられしものにして、其の後山野井に於ける植物化石の發見により、其の一部はレ

侏羅系赤間關硯石統

「チツク」統に屬するものなることを明にするに至り、其の下部のアンモン介を含む層を以て侏羅系に屬する硯石統と呼ぶに至れり。

赤間關硯石統は廣大なる面積を有し、長門の南部より九州の筑豊二國に跨る。地層は長門の東部厚狹郡及び美禰部に於ては略東西の層向を有し、北方に傾斜するも、西南方に至るに従ひて南西に變し北西に傾き、山野井の「レ」チツク層を被覆す。岩層の下部は黒乃至黝色の泥板岩、白乃至黝色の砂岩及び古生層の硅岩砂岩粘板岩及び晶質剝岩の礫より成る礫岩より成り、上部は砂岩及び泥板岩の外に凝灰岩及角礫岩を夾み、時に結晶質の石灰岩を含むことあり。凝灰岩は青乃至紫色を呈し、普通赤間關硯或は單に硯として廣く硯石に製せられ、本地方に於ける有用なる岩石なり。其の之を採取するの地は厚狹郡平沼田及び森廣附近にして、其の紫と稱するは紫色にして質悪く普通小學校等に用ゐ、青とは綠色を帯び、質前者に同じきも産出少く、紫金石とは深紫色を呈し、壁緻にして其の質前者より宜しく、縞石とは紫綠色の者縞を爲し、甚だ美にして赤間關硯として世に愛玩せらるるもの是れなり。

侏羅のアメンモ

アンモン介は豊浦郡田部の北一里半、西中山村吉田河畔に沿へる、下部の砂岩及び泥板岩の累層中より出づ。其の横山博士の鑑定せるもの次の如し。

1. *Hildoceras chrysanthenum* Yok.
2. *Hildoceras densicostatum* Yok.
3. *Hildoceras Inouyei* Yok.
4. *Gymnoceras* (?) *Okudai* Yok.
5. *Harpoceras* sp.
6. *Harpoceras* sp.
7. *Celoceras subfulvatum* Yok.
8. *Dactyloceras helianthoides* Yok.

此の外エゴセラス *Aegoceras* に似たる大アンモン介、及びミッルス *Mytilus* に似たる二枚介の印像ありて鑑定すべからず。之れをヨーロッパのものに比較するにリアス即ち黒侏羅系、殊に其の上部に属する者の如し。

其の他長門國伊佐の南にある砂岩及び泥板岩の累層中より *Asplenium*, *Podo-*

其の他の中生
層
出雲山脈の地
質年代

zanties lanceolatus?, *Nilssonia*, *Pinus*等の植物化石を出だす。尙ほ豊浦郡吉母濱に産する砂岩及び泥板岩中には夥多の介化石あり、多くは印像にして識別すべからざるも、中にはシヅク *Schizodus* (二疊) 又はミオンオリア *Myophoria* (三疊) に似たるものあり。又巨智部博士に據れば、吉母濱には、侏羅に属するシレナを其の上部に産し、蕨木峠の南小野の舊石炭試掘坑には、植物化石の甚だ不完全に保存せらるるものを産し、左の二種を識別し得るに過ぎず。

Nilssonia sp.

Asplenium Roesserti Presl.

岡田理學士は此の舊坑より東北約一里七日市村の内に於て數種の植物化石を發見し、之れを侏羅系と認定したり。

其の他の中生層

出雲國出雲山脈の地體は大塚博士及び山上學士に従へは多く中生層より成り、岩石は暗色の泥板岩、淡色の細粒砂岩、珩岩質凝灰岩より成り、時に礫岩を交ゆ。所々に珩岩脈の爲に貫通せられ、地層甚だ錯雜するも、略東西の層向を有し、傾斜は亦起伏して一定せざるも多くは北

方に傾き、其の角度は三十度内外なるを常とす。岩脈は玢岩脈の外に、鶴峠より杵築に至る時に、輝緑岩及び閃緑岩脈の之れを貫通するあり。鶴峠の南には粒状富士岩脈の之れを貫通するあり、片句手結には閃緑岩脈の之れを貫通するあり。此等は本累層の層向及び傾斜をして錯雜ならしめたる重なる原因の一ならんか。

大山圖幅を調査せる大塚博士は、本岩層を以て白堊系の一部に屬するものとなし、三瓶圖幅を調査せる山上學士も亦此の説に賛同し同様に宍道山脈を構成する累層を以て中生層と爲し、本書に挿入せる地質圖亦兩學者に従ひ中生層と爲したるも、編者佐藤が明治三十五年夏期親しく島根半島を踏査し、雲津よりしてコルピキユラ *Coriophila* sp. サリックス *Salix* sp. フナグス *Fagus* sp. を發見し、佐井の石切場よりしてサリックス *Salix* sp. を發見し、美保關より燈臺に至る路傍よりしてセクオイア *Sequoia* sp. を得たるの事實、并に此の半島を構成する凝灰質砂岩及凝灰質泥板岩の東北地方の第三紀を構成する岩石に酷似せる事實よりして、編者は此の半島の大部分は、第三紀層に屬することを信ず

ものなり。

尙ほ島根半島の第三紀層なるべき有力なる證は、木戸學士が同地方よりアセノ *Acer* (槭) の一種を發見せることにして、此の植物は現今知る所に由れば、其の紀元は第三紀にありて、未だ曾て之れを白堊紀層中より發見したることなきなり。然れども宍道山脈を構成する地層全體が悉く第三紀層に屬すべきや、或は島根半島の白堊紀とせられたる地層の一部か、第三紀層に屬するに止まるやは、尙ほ將來の研究を待たざるべからず。

御坂層

御坂層 中國地方にも亦御坂層の名を以て區分せらる地域ありて、備後甲奴郡四近に可なりに廣く面積を占め、安藝乃美及び志路附近に個々の岩塊を爲して數ヶ所に現出す。之を構成する主要の岩石は、砂岩泥板岩礫岩凝灰岩及び角礫岩にして、備後に於ては上部は凝灰岩及び泥板岩の互層より成り下部は泥板岩及び砂岩の累層より成る。砂岩は安藝勝田峠附近に見るが如く堅硬なる淡灰色乃至暗灰色の岩盤にして長石石英綠泥質物の碎片、硅石質又は凝灰質物を以て固く膠結せられ、泥板岩は灰綠色暗灰色又は黒色を帯び、

全佐々井附近に見るが如き堅硬にして脆く方塊に碎け易きものあり、或は横山銅山附近に在るが如く薄板に剝げ、古生代のアデノール板岩に類するものあり、又は高田郡井原の地に緑灰色縞目を呈する變質凝灰岩と累層して存在する者の如き、褐色を帯び粒状の石英及び褐色の雲母より成り、剝岩状を呈する者あり。礫岩にも種々ありて、備後世羅郡中村に於ては、泥板岩又は凝灰岩と累層し、硅岩硬砂岩及び粘板岩等の凡て古生層に屬する岩盤の礫を以て成り、全郡雲通より産するものは、稜角ある硅岩の礫より成り寧ろ角礫岩に屬せり。凝灰岩は多くは變質して、角岩又は剝岩に類し、其の乃美井原等に露はるものは、緑色灰色の縞目を有する堅緻の岩石なり。角礫岩は多く珩岩の碎片より成り、其の原質の珩岩より來るを示せり。尙ほ甲奴郡福井及び階見の地には薄き石灰岩層を挿めり。

御坂層は花崗岩珩岩石英斑岩及流紋岩によりて貫通せられ、砂岩泥板岩等は接觸變質せるもの少からず。例へば備後神石郡小畑より井關に至る間に角礫岩質凝灰岩及泥板岩が石英斑岩の爲に變質し、堅硬なる板岩となるが如し。

新生大統

第三系

其他全郡高蓋近傍及び高蓋より甲奴郡上下の地に至る間には、砂岩及び泥板岩の花崗岩及び珩岩によりて變質せられたるあり。甲奴郡田房附近には凝灰岩の珩岩の爲に變質せられたるあり。又御坂層中には屢々珩岩床を介在し、神石郡小畑及び井關、甲奴郡田房及び領家に於ては、岩は角礫凝灰岩に移化する。

四 新生大統

第三系 宍道畔湖に發育せる第三紀層は凝灰質泥板岩砂岩及び礫岩より成り、宍道凹地の北部に露出するものは、主として凝灰質泥板岩より成り、砂岩を其の間に介在し、東西の走向を有し、概ね北方に傾斜し、其の南方に露出するものは主として凝灰質砂岩より成り、其他泥板岩及び礫岩あり。礫岩は殊に來海の東なる林に於て泥板岩と累層を爲して露出し、北八十度東の走向を有し、南方に緩斜す。化石は北部區域に於ては發見する能はざるも南部區域内に於て發見せるもの次の如し。

Purpura sp. 八東郡學頭
Cyprina sp. 同
Peecten sp. 同
 尚ほ宍道湖南の沿岸に來海石と稱して盛に採掘せらるゝ凝灰質砂岩中よりは數種の鮫齒化石を産す。

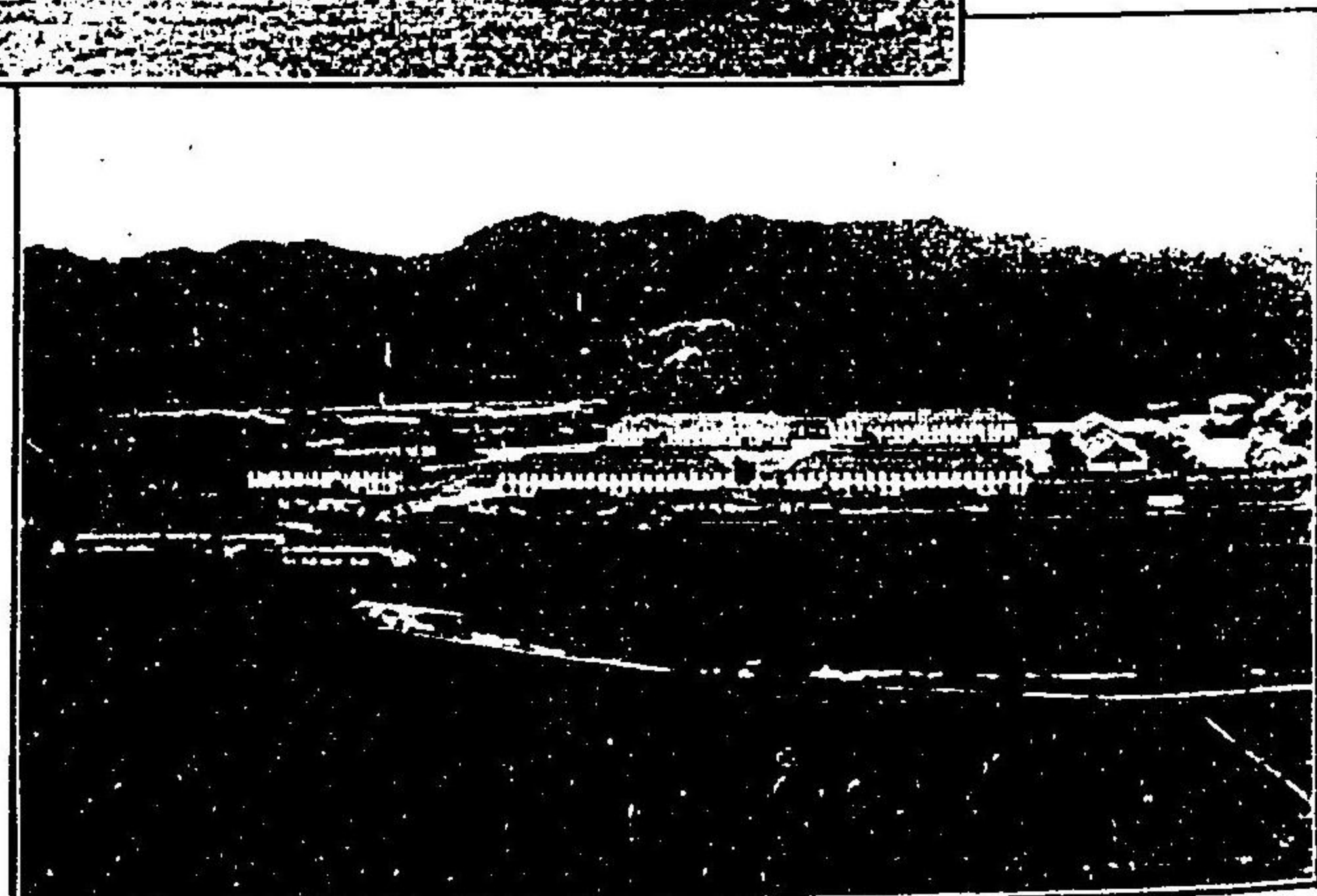
出雲國太原郡の北部より、八東能義二郡にかけて丘陵起伏せる地方を構成せる第三紀層は、主として凝灰岩より成り、所に由り凝灰質泥板岩及び砂岩を夾雜す。松江市の東北に屹立する嵩山、和久羅山及び舊意宇太原兩郡の境界に聳ゆる熊野山等其の高點たり。凝灰岩の下部は砂岩及び泥板岩の互層よ成り、此の中に炭層を挿む所あり、布志名附近の砂岩及び泥板岩中より産する化石の識別し得べきもの次の如し。

- | | |
|--------------------|---------------------|
| <i>Peecten</i> sp. | <i>Panopaea</i> sp. |
| <i>Nucula</i> sp. | <i>Mytilus</i> sp. |
| <i>Cardium</i> sp. | <i>Tellina</i> sp. |

應 縣 根 島 (甲)

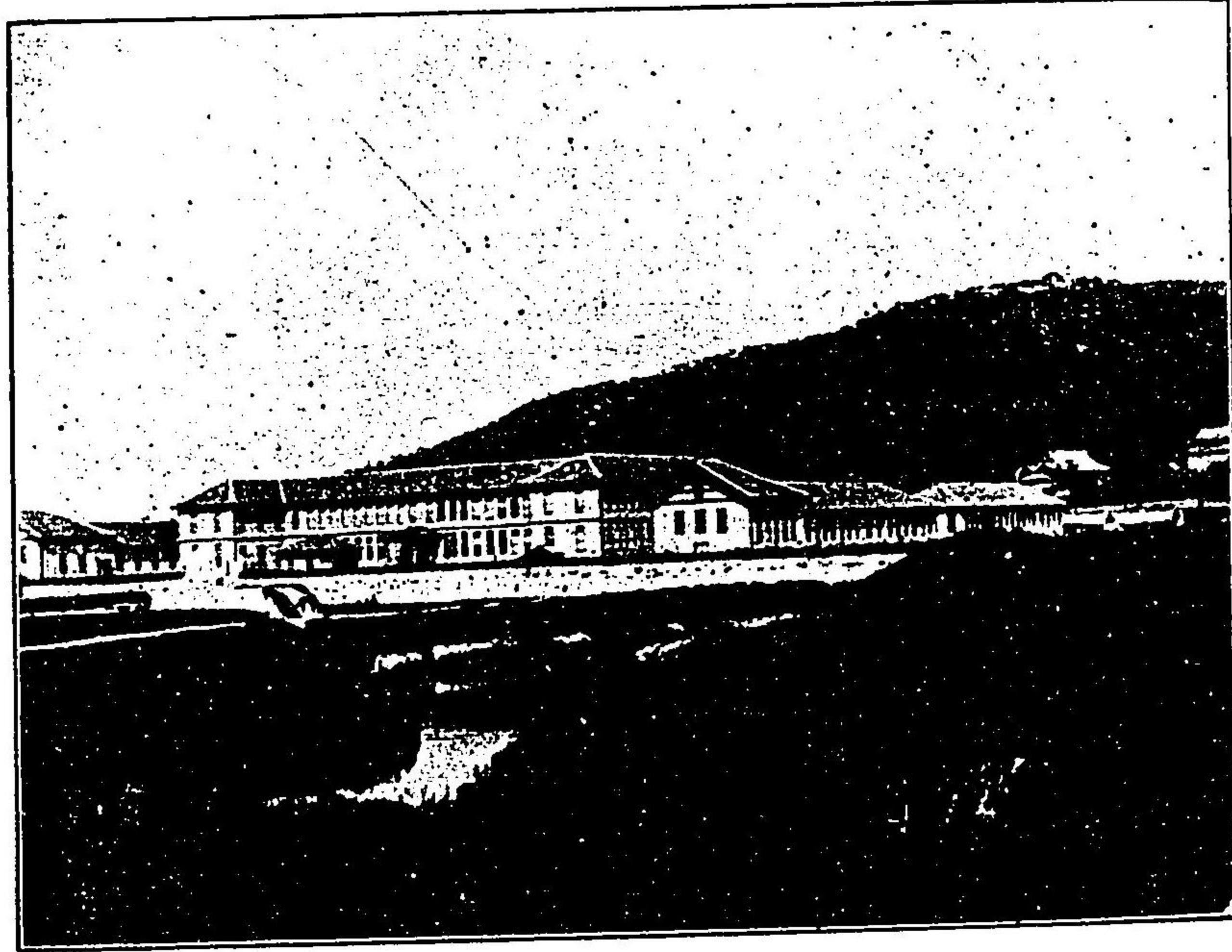


(乙) 廣 島 縣 應

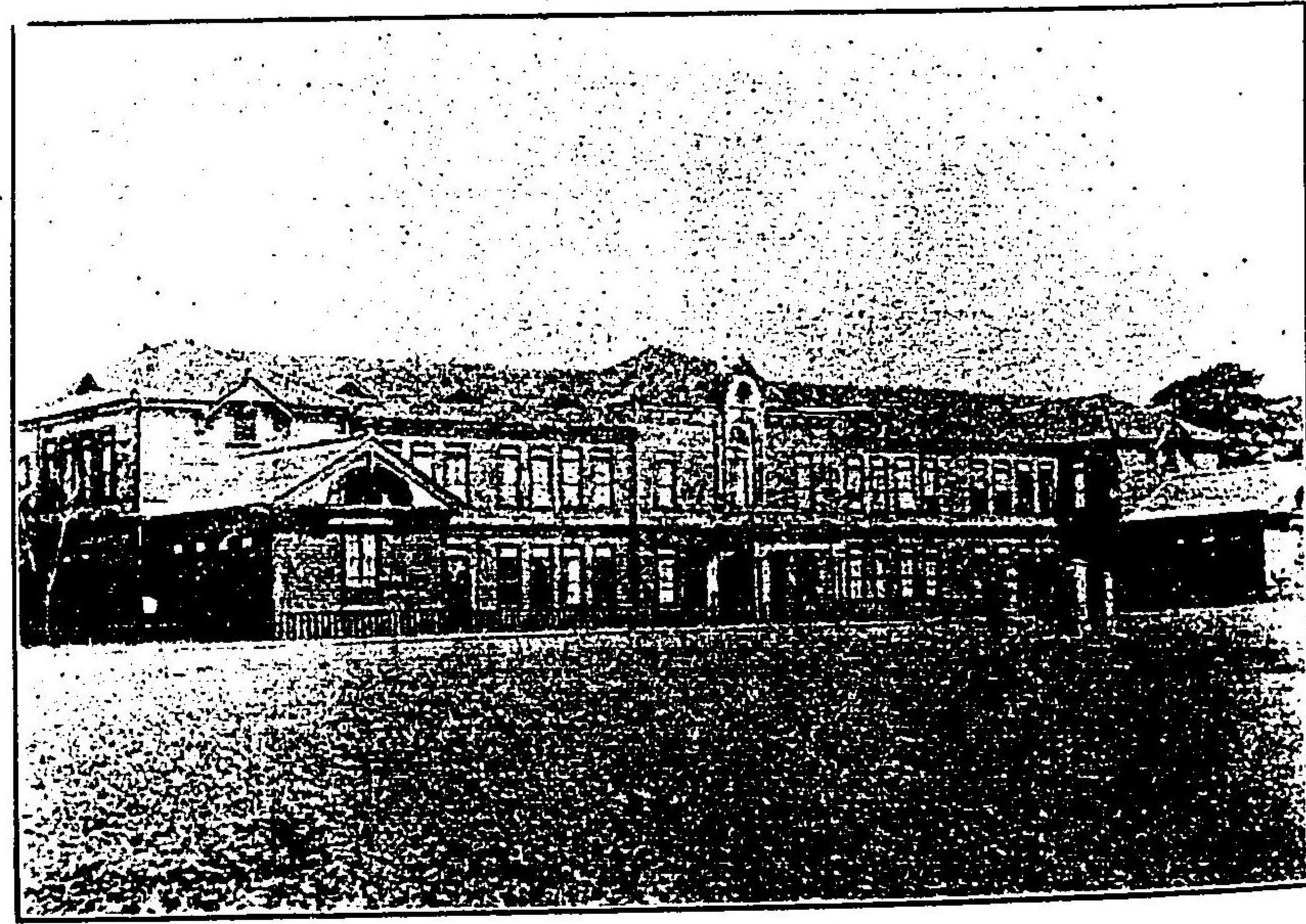


替 兵 田 濱 (丙)

校學等高六第山岡市山岡(甲)

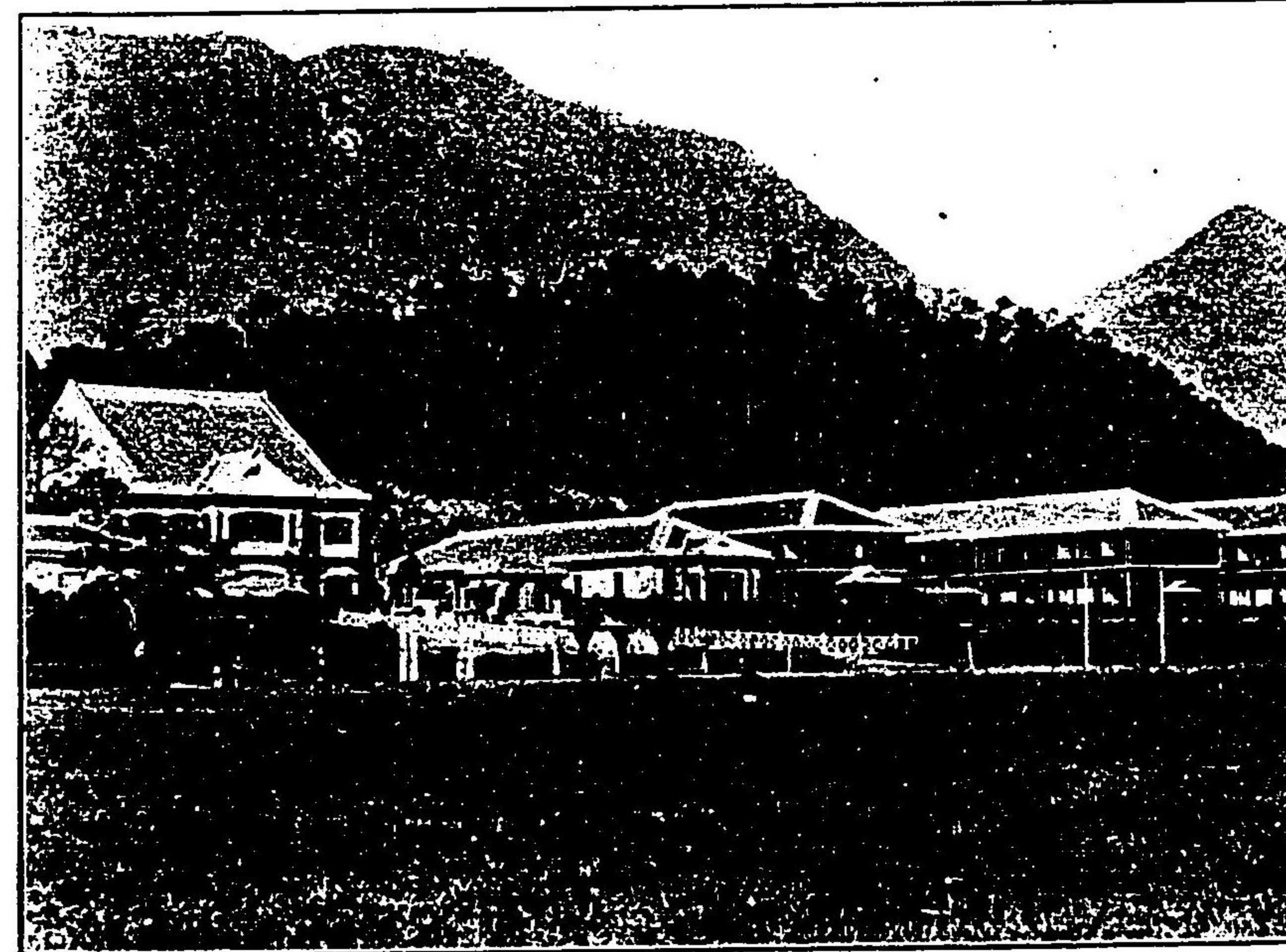
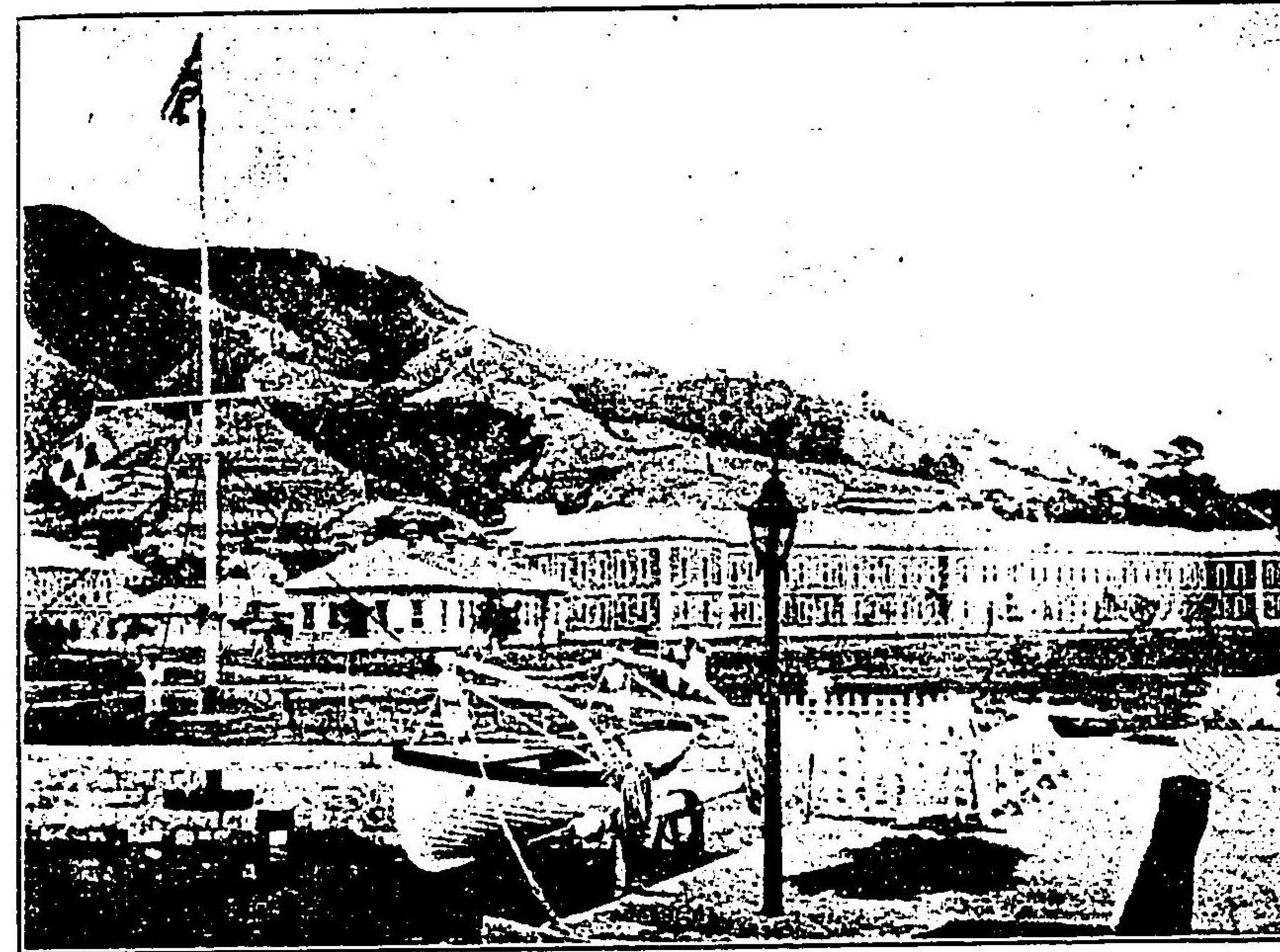


(第十九圖)



校學範師常琴市江松縣根島(乙)

校學兵平海島田江藝安(甲)



校學業商等高口山(乙)

(第十八圖)

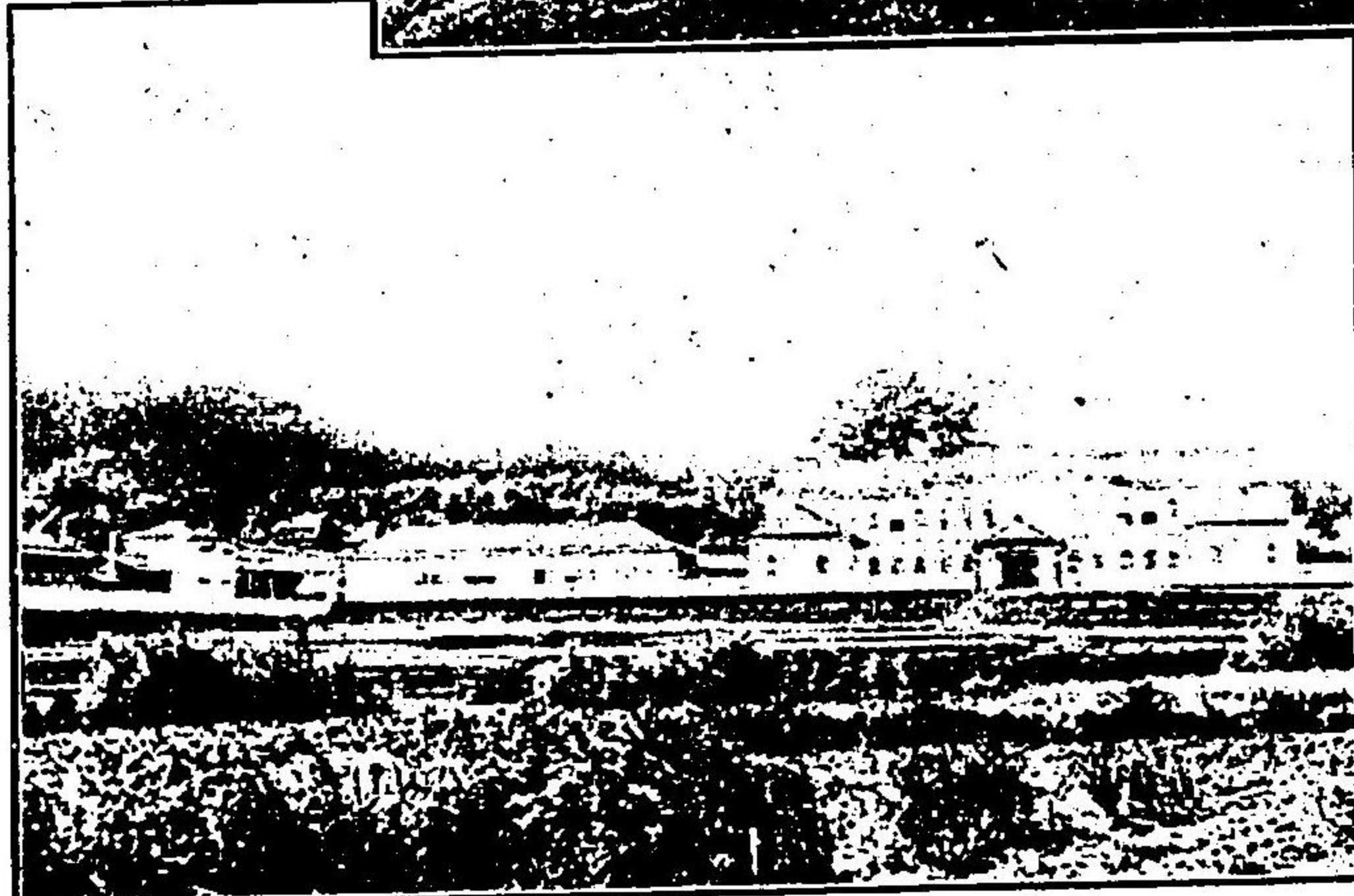
校學中町子米各伯(甲)



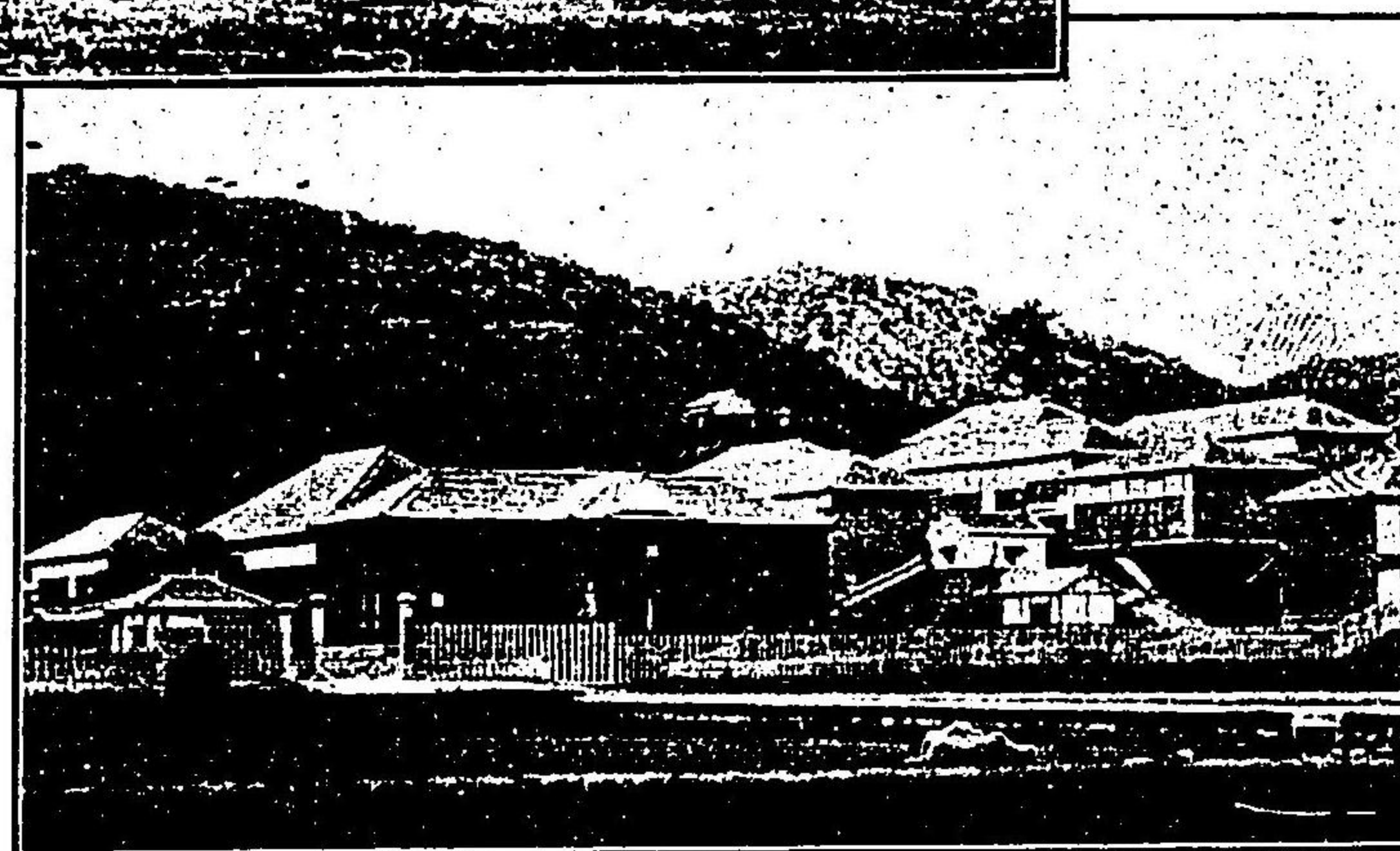
校學中山岡立縣市山岡(甲)



(乙) 島根縣農林學校(松江市附近)



(乙) 同上、關西中學校



(第二十一圖)



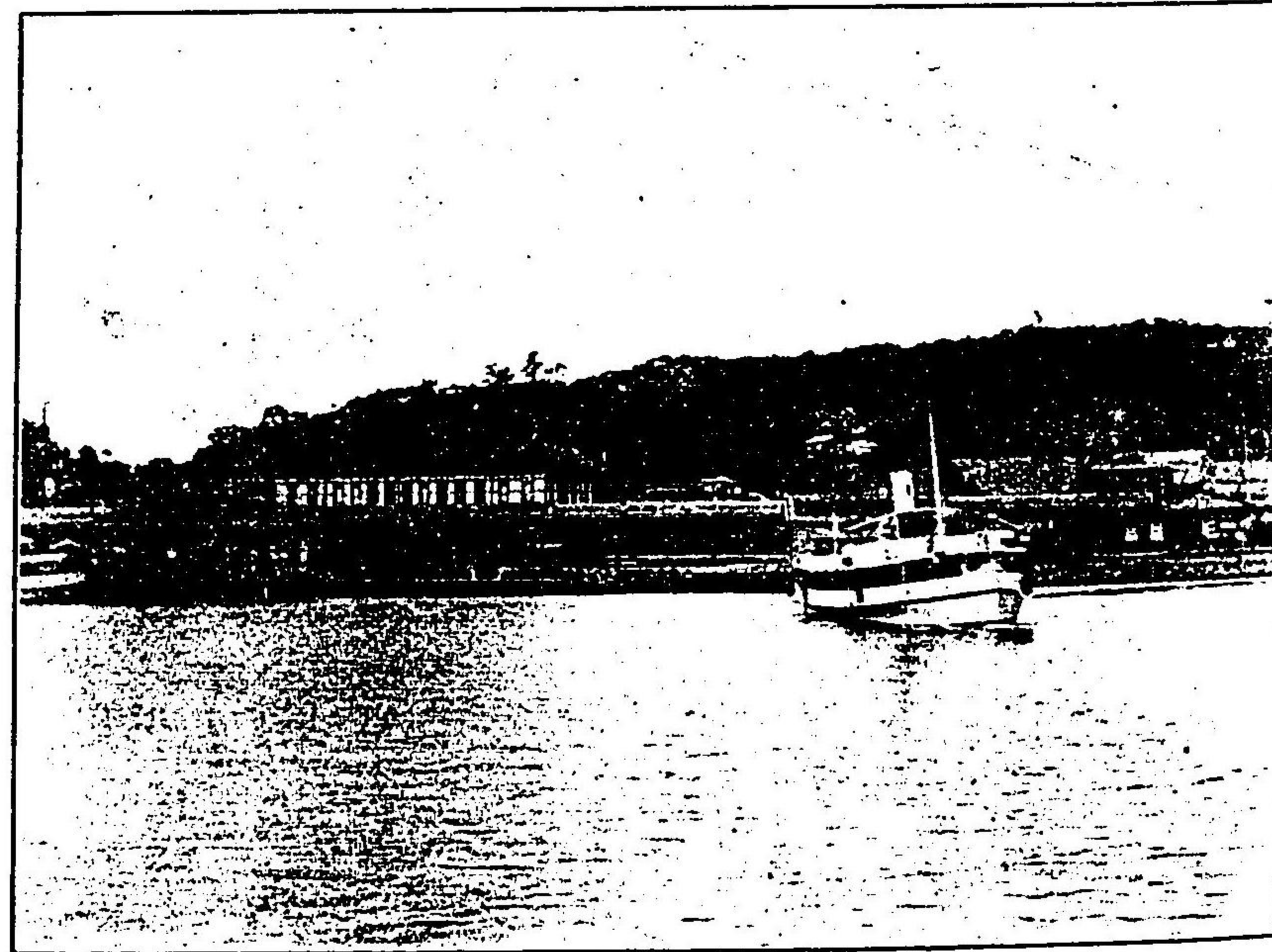
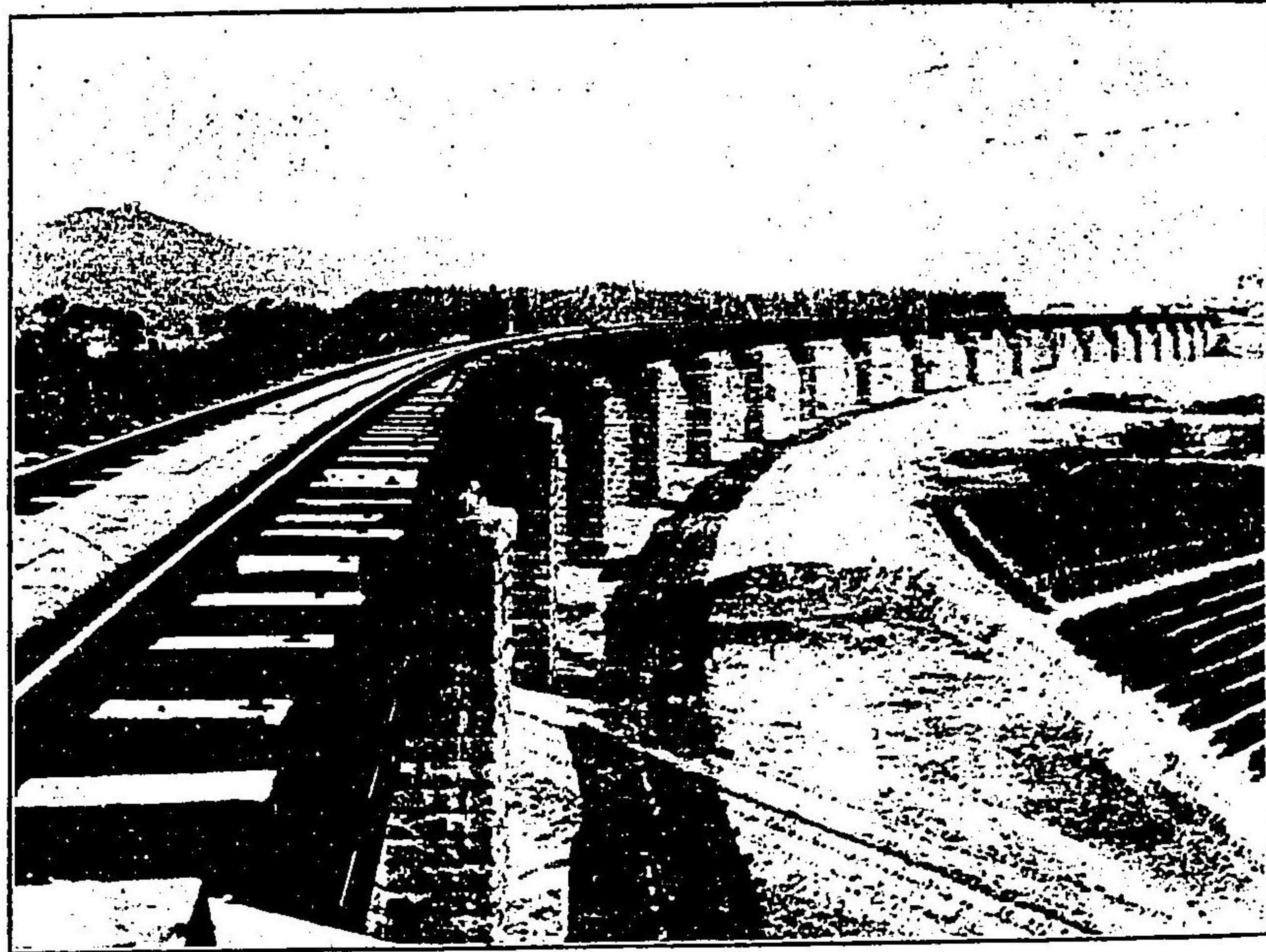
校學女等高田濱見石(丙)

(第二十二圖)



校學中江松雲出(丙)

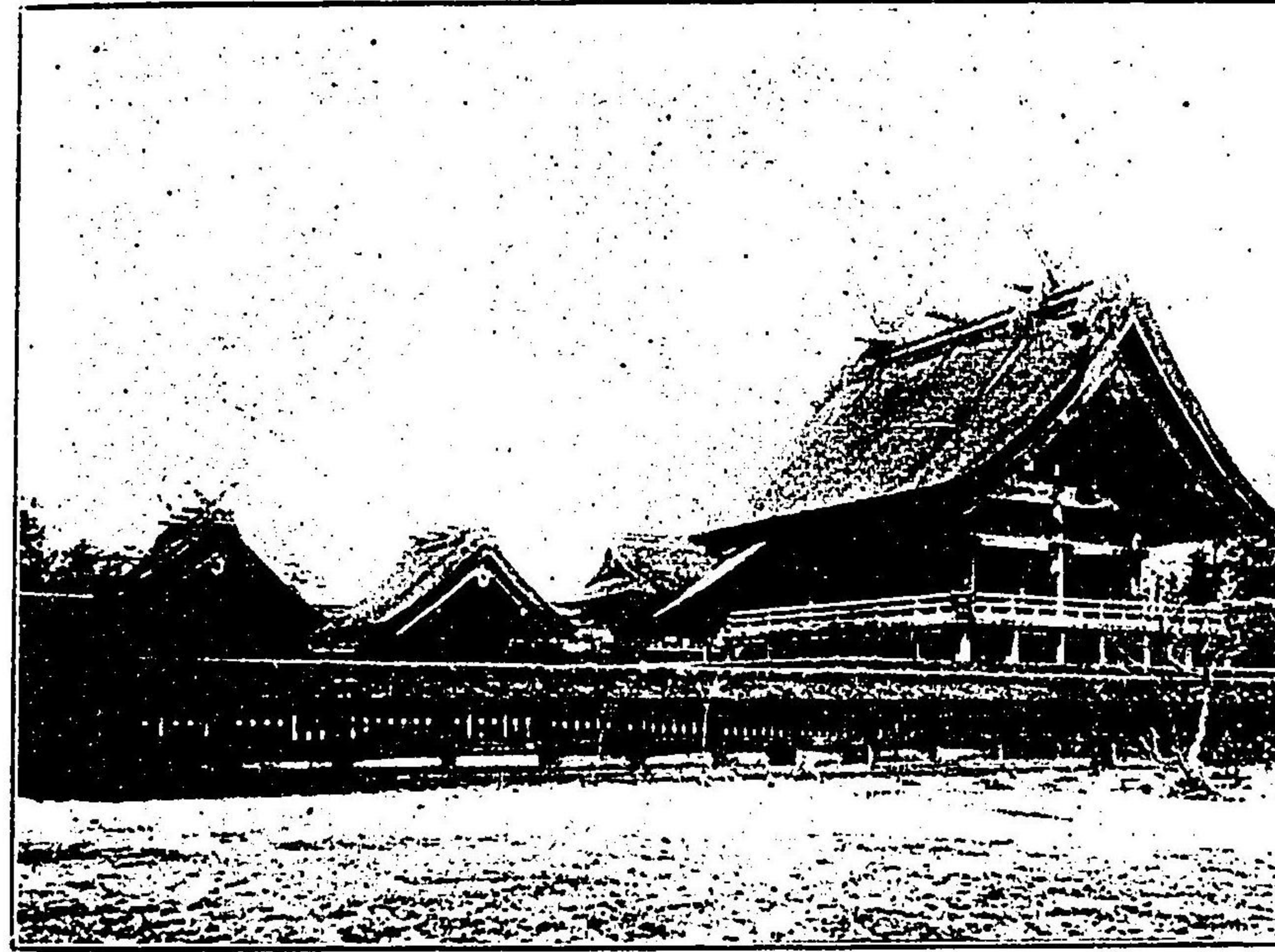
橋 鐵川井吉前備 (甲)



船汽結連門關關の下門長 (乙)

(第二十三圖)

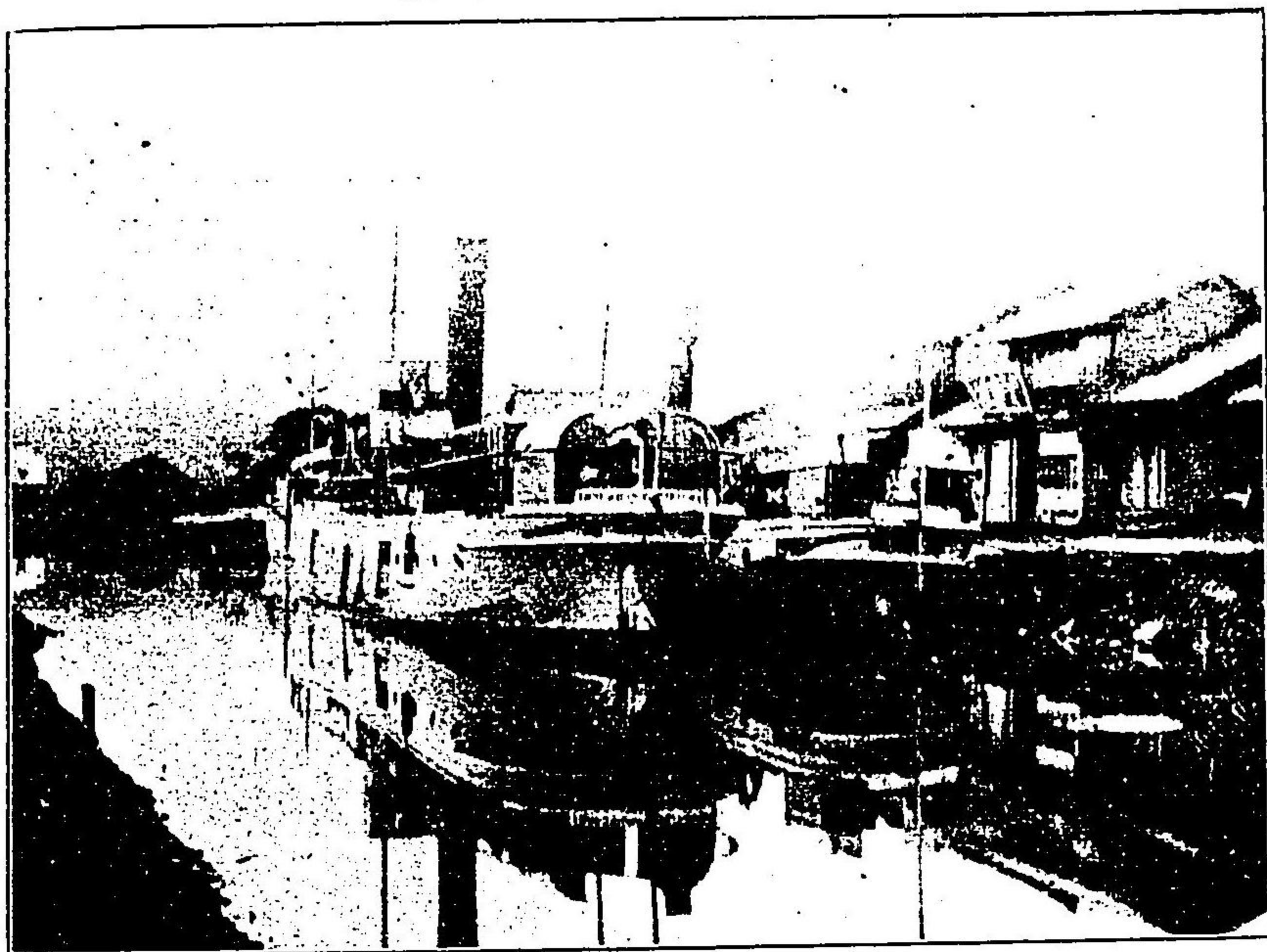
社大築杵雲出 (甲)



院本教社大上同 (乙)

(第二十二圖)

頭埠原庄國雲出(甲)



(第二十四圖)

畔河橋大市江松雲出(乙)

出雲石見の
日本海沿岸
の第三紀層

Solen sp. *Dentalium* sp.
Oliva sp. *Dolium* sp.
Natica sp. *Serpula* (?)

其の他不完全なる腹足類及棘皮動物に屬するスボタンキデの化石を産す。出雲石見の日本海沿岸に露出する第三紀層は、亦凝灰岩砂岩泥板岩及び礫岩より成り、略北六十度東の層向を有し、二十度内外の角度を以て北西に傾斜す。化石は簸川郡多岐の海岸に絶壁を爲して露出せる砂岩中より鮫類の *Carcharodon* sp. の齒及び *Dentalium*, *Solen*, *Venus*, *Tellina*, *Nucula*, *Nassa*, *Aren*, *Fusus* 等の介類を發見し、邇摩郡宅野にては小字コロに露出する砂岩中より *Pecten*, *Tellina*, *Dentalium*, *Cerithium* 等の介類化石を出だす。尙ほ宅野より仁萬に至る路傍より木葉化石を出だすと雖も、保存不完全にして殆んど之れを識別する能はず。層順は山上學士に據れば、上部は凝灰質泥板岩と浮石を夾雜せる凝灰質砂岩との互層より成り、後者には往々にして彼の岩木に似たるの褐炭層を夾むも厚さ一二寸を超ゆる者なし。下部は泥板岩及び砂岩の累層より成り、簸

内地の第三紀層

川郡小田の海岸には石炭層を夾むと云ふ。

其の他第三紀層は河川上流の沿岸にして海拔六百乃至七百米の高處に存するものあり。備後國新市附近に於ける者の如きは即ち是れにして、其の新市の南方河岸に露出せるものに就て之を驗するに、主として砂岩と泥板岩との累層より成り、内に褐炭の薄層を夾み北十五度東の走向を有し、十五度の角度を以て略南東に傾斜す。尙ほ玄武岩は岩床を爲して其の上を被覆せり。

美作津山町附近に露出せる第三紀層は概ね凝灰質泥板岩より成り、不完全なる植物化石を其の内に埋藏す。

因幡國八束智頭兩河流の間に夾まる船岡以西の地に發育する第三紀層は、其の區域廣大ならずと雖も、木葉化石を産するを以て重要な區域とす。蓋し三谷及び郷原の間に柏峽と稱する地ありて其の砂岩及び泥板岩中より多量の木葉化石を産す。横山博士の鑑識に由れば、其の名稱次の如し。

- Ficus* cf. *tilinefolia* A. Br.
- Ficus* sp.

Pterocarya cf. *denticulata* O. Weber.

Salix sp.

Acer sp. (*Probably new*)

是れに由りて之れを觀れば此の累層は中新統に屬する者の如し。

美作の中央盆地には最新統に屬する地層の廣大の面積を占むるあり、主として凝灰質の礫岩砂岩泥板岩より成り、勝田郡池ヶ原に露出する礫岩よりは *Turritella*, *Venus*, *Ostrea* 等の介殼化石を出だす。

津山町の南津山川に沿ふたる大谷横山等よりは第三紀に屬する流紋岩質凝灰岩を採掘して建築石材に供す。

備後比婆郡庄原附近に發育する第三紀層は、下部は礫岩を夾雜する砂岩より成り、其の間に牡蠣の多量を含み、上部は泥板岩質砂岩より成り、次の介殼化石を埋藏す。

- Tellina* sp.
- Maclura* (?)
- Cerithium* sp.
- Olivya* sp.

備後庄原附近の第三紀層

以上の累層は上部に泥板岩の厚層を載き、其の中に有孔蟲の化石を埋藏す。一般に障害を受くること少く、略西に緩斜するもの多し。其の化石の保存の宜しからざるが爲め、精密の地質年代を定むる能はざるも、蓋し最新統に屬するものならんか。

庄原町の東北、西城町の北に當り、西城川の河底に露出する第三紀層中よりは、庄原町に産するものと同様の介殼化石を出だし、且つ一枚の薄き炭層を其の間に夾む。

第三紀層は又備後比婆郡東城町より、二本松峠を経て、備中阿哲郡八鳥神代の低地に露出し、砂岩層に往々薄き炭層を夾み、八鳥及び新見町に介殼化石を産す。

三次町附近の溪流の沿岸に丘阜を爲して重疊せるものは、概ね礫岩、砂岩及び泥板岩より成り、三次の南東三里なる三良坂の地に於て、珩岩を以て取り圍まれたるものは、其の間に褐炭の薄層を夾み、三良坂の北に於ては南東に二十度傾斜し、其の南に於ては北方に傾斜し、以て一個の向斜層を形成せり。

三次町附近の第三紀層

和知川溪谷の第三紀層

糸井より南島敷に亘り、花崗質斑岩の上に坐するものは、糸井に於て泥板岩内に粗悪の石炭を産し、南島敷の道路に露出する泥板岩中には有孔蟲の化石を出だし、鈴木博士に従へば其の最も多く産するものは

1. *Nodosaria raphanistrum* Linne.

2. *Dentalina* sp.

の二種なり。糸井に在ては十五度乃至二十度の角度を以て南東若くは南西に傾斜し、南島敷に在ては略十五度の角度を以て北方へ傾く。

和知川の溪谷に沿ひ、花崗質斑岩と珩岩とより成る山岳間に横はる第三紀層は、前者と同じく砂岩、泥板岩及び礫岩より成り、十度乃至十五度の角度を以て多く北東に傾き、往々にして第四紀古層の砂礫層を其上に載す。門田川の河畔に露出する砂岩中には多量の介殼化石を埋藏するも、一般に保存良好ならずして、其の種属の多少識別し得るものは次の五種に過ぎず。

1. *Mastra* sp.

2. *Tellina* sp.

- 3. *Cyclina* sp.
- 4. *Arca* sp.
- 5. *Ostrea* sp.

中に就き大形の牡蠣介甚だ多し。傾斜は多く南方にして、十五度の角度を有す。

三次及宮内間の道路に沿ひ、山頂嶮ならざる花崗質斑岩の凹處に堆積せる第三紀層は、砂岩泥板岩及び礫岩の累層の上に、曾て三瓶山噴火の際噴出せし浮石層を其の上部に載せ、宮内大月間に於ては地層相向ひて傾斜し、一の向斜層を造り、其の内に粗悪なる石炭と介殼化石とを埋藏し、西入君より西河内に亘るものは、其の上表に浮石層の外に新成の砂礫層を載き、又一個の向斜層を形成せり。

布野川の溪谷に沿ひ、花崗質斑岩の山側に、東西相分れて露出する第三紀層は砂岩及び泥板岩の互層より成り、十度内外の角度を以て西側に於ては東に傾き、東側に於ては西に傾き、其の内に牡蠣介の化石を含有せり。

布野川溪谷の第三紀層

濱田附近の第三紀層

石見濱田附近に當り、種々の火山岩に接し發育する第三紀層は、原料を主として火山岩の碎片に仰ぎたる結果として概ね凝灰岩類に屬し、細粉の固結せしものは凝灰岩となりて紫緑灰等の雜色を帯び、碎片の粗なるものは凝灰質砂岩となり、一層粗大なるものは凝灰質角礫岩となり、層狀の富士岩を介み、二十度乃至三十度の角度を以て北方に傾斜せり。

高津川の河口に近き益田町附近の第三紀層は、上部は灰白色の砂岩と、灰乃至黒色の泥板岩との互層より成り、下部は凝結力弱き礫岩と砂岩との互層より成り、西北西より東北東に走り、五度乃至十五度の角度を以て北方又は南方に傾き、緩慢なる背斜及び向斜層を形成するも、中央の遠田の地において玄武岩脈を以て貫通せらるゝ所より北に進み、海岸近き所に至れば、地層は褶曲錯雜して傾斜は三十度内外となり其の方向一定せず。大草村字ヒバラの砂岩と互層する黒灰色緻密の泥板岩中よりはヘクテン *Pecken* sp.、リダ *Leda* sp.等の化石を産し、上吉田附近よりは雙子葉の木葉化石を産出するも、孰れも保存不完全にして其の種屬を識別し得るもの稀なり。

益田町附近の第三紀層

隠岐の第三紀

隠岐列島の諸地方に小區域を爲して點々散在し、砂岩、泥板岩、角礫岩の累層より成る第三紀層は、時に不完全なる植物化石を埋藏し、往々にして粗悪なる褐炭の薄層を夾む。西郷町の東飯田の地に露出するものは主として凝灰質泥板岩より成り、北四十五度東の層向を有し、南東に四十五度傾斜す。其の内より數々雙子葉植物の不完全なる印像を發見するも、其の種屬は之れを識別する能はざるもの多し。津井の北方に露出するものは油臭を放つものあり。西郷町の西に露出する黒色の泥板岩中には不純なる褐炭の薄層を挿み、都万灣の北釜屋の附近に露出するものは、凝灰岩と浮石質砂岩との累層より成り、粗鬆にして礫を交ゆる砂其の上を被覆す、其の層向は北二十度東にして北西に傾斜せり。島後の西海岸藏田附近に露出するものは、下部に砂岩及び泥板岩あり、上部に凝灰岩、角礫岩及び砂岩あり、之れを被覆するに、黒曜石を交ゆる火山噴出物を以てす。角礫岩中には時に玉髓の生成するを見ることあり。西方に突出する龍ヶ岬の斷崖には、階段狀の斷層の存在するを見る。島後の中央に位する中山越に露出するものは、主として凝灰質泥板岩及び凝灰質角

長門豊浦郡
北海岸の第三紀層

礫岩より成り、昨の南方には一個の向斜層を形成せり。其の西方都万灣に露出するもの内には、カルピヌス *Carpinus* に酷似する植物化石を含有す。島後の東北海岸、布施の北方字トノウラに流紋岩と接し一小區域を爲して露出せるものは、黒色堅緻一見古層の觀を呈する砂質泥板岩より成り、中に不完全なる植物化石を埋藏す。此の泥板岩は往々にして方解石及び石英の細脈を生じ、又水晶の小結晶を得ることあり。

以上隠岐列島の第三紀層は、其の含有する所の化石不完全なるが爲め、精密なる地質年代を知る能はずと雖も、蓋し中新統に屬する者の如し。

長門豊浦郡の西北海岸大浦阿川及び島戸附近には、淡灰色にして流紋岩の碎片に富み、關東地方の野州産の角礫凝灰岩に似たるものあり。島戸和久及び波原には綠色又は綠色にして多く玄武岩又は富士岩の破片を含み、相州東部の釜戸石に似たるものあり。而して波原に於てはオストリア *Ostrea*、ヘクテ *Peckia* 等の介殼化石を産出し、肥中の沿岸及び此の地と相對する金子島よりは次の如き介殼化石を出だすも、保存良好ならず。

料となるものあり。

美作英田郡の中央に露出せる第四紀古層は、往古山間の湖沼の地に沈積したるものにして、特に粘土層の厚く發達せるを見る。

石見波根湖附近に發育せるものは、浮石及び火山砂より成り、層理屢著しからずして、陸上に堆積したるものと區別する能はず。大森附近に於て第三紀層を不整合に被覆するものは、砂及び砂利層より成り、層位全く平坦なり。

江川河口附近の第四紀古層の第四紀古層粘土の應用

江川の河口に近き那賀郡郷田の地に於て花崗岩を被覆するものは、厚さ二十米に達し、中國地方に發育せる第四紀古層中最も厚きものの一なり。此の第四紀古層は鈴木博士に従へば、砂層及び礫層の間に粘土の三層を介在し、上層は砂層の間に凡そ四米の厚さを爲して褐鐵鏽を雜へ褐黄色を帯び、中層は砂礫層の間に介りて壹尺内外の泥炭を下方に抱き、厚さ三米乃至四米ありて、下層は礫層と全岩層の基礎を爲す花崗岩との間に介在して厚さ僅に一米内外なり。以上三層の粘土は孰れも花崗岩の碎耗物より成り、粘着力に富み成形の工に適し、瓦磚又は粗陶器の原料に使用せらるゝを以て所在之れを採

掘して其の用に供せり。即ち其の長澤宇龜谷に在て富士岩上を被覆するものは、厚さ十五米に達し、其の半は礫より成り、粘土層内には泥炭を介み、下部五尺の所瓦磚の用に供せられ、高田に花崗斑岩上を被ひ斷崖を爲して露出せるものは、上部は厚さ壹米内外の腐蝕質壤土より成り、下は四米内外の粘土より成り、此の粘土亦瓦磚の原料に用ひられ、三田川に沿ひ花崗岩の山麓に延長せるものは、礫層の下方に往々一米内外の粘土を含み、瓦磚の原料となり、上根の臺地に在て花崗岩上に累積するものは、上部は二乃至五米の赤褐色を帯べる埴埴質砂土より成り、下部は三乃至五米の砂礫層より成りて、屢褐鐵鏽を其の間に介在す。其の他美濃郡の海岸に近き下遠田の附近に發育するものは、第三紀層の丘岡を被ひ、厚さ七乃至八米に達し、上部は赤褐色の埴埴質砂土より成り、下部は瓦磚の原料に適する粘土及び礫層より成り、喜阿彌の地より海岸に沿ひ、戸田宮田等を経て小濱に至り、専ら花崗岩上に堆積沈澱するものは厚さ十米以上の斷崖を爲し砂礫粘土の累層より成る。

長門瀧部村附近に於ては、中生層岩の分解に由て生せる、第四紀古層の粘

第四紀新層

土は、採掘して瀧部陶器の原料に供せられ、其の字中畑より産するは白土、市庭より生ずるは黄土、大庭より生ずるは桃紅黄土、中原より産するは黄土なり。又綾羅木川流域の地なる富任附近に於ては、砂利及び砂と互層せる緻密なる粘土を産し、此の粘土は下の關水道水源池の漏泄を防ぐに用ひたり。

第四紀古層に屬する粘土は、又陶磁器製造の原料として利用せらるゝ所少からず。即ち備前特産の伊部焼は其原料を伊部香登本礮上の諸地に資り、又邑久郡須惠及び土師は上古の製陶地にして、地名に其の來歴を留め、同郡蟲明も亦製陶地にして、其の原料は之れを鶴海の粘土に仰ぐ。但し此の鶴海産の粘土は或は流紋岩の分解に由て生じたる第四紀新層のものなるやも知るべからず。

第四紀新層は現今の海岸に連り、低平の砂地若くは海抜十數米の砂丘を形成し、或は河畔に接する低地を成して發育す。前者は陸地の緩慢なる隆起作用と、海水の爲に漂蕩せられたる土砂の堆積とにより生じたるを以て海成層に屬し、伯耆の夜見ヶ濱半島、出雲の神門平原の如き其の著しきものにして、

火成岩

深成岩

花崗岩

花崗岩の種類

後者は間斷なき河流の浸蝕作用と運搬作用とにより、山崖を削り谷側を浸し流送し來れる砂礫泥土を下流の隨所に沈積し、又現に沈積しつゝあるものなれば河成層に屬し、出雲飯梨川・美作加茂川・備前西大川・備前中川・邊川等の沿岸流域に低濕なる地面を爲すものは是れなり。

神門平原、夜見ヶ濱等の桑滄の變に就ては、地形の部に詳述したれば之れを略す。

五 火成岩

(イ) 深成岩

花崗岩 本岩は中國山脈に沿ひ東西の方向に存在したる弱點を破り、古生層及び中生層を貫きて迸發したるものにして、中國地方の火成岩としては、其の分布區域の廣大なる點に於て、中國砂鐵の母岩たる點に於て、又其の建築石材の上等なる者として極めて重要な位置を占むるものなり。其の鑛物成分上よりしては角閃花崗岩・閃雲花崗岩・黑雲母花崗岩及び白雲母花崗岩の四と

花崗斑岩

爲すを得べく、石理上よりしては中粒状粗粒状及び斑岩状の三と爲すことを得べく、此等數種の間には判然たる境界を劃する能はずして、互に甲種よりして乙種に移り變はり、乙種よりして丙種に移り變はる場合極めて多きことは、前數卷に就て反覆之れを述べたる所と異なるものなし。尙ほ其の非常の横壓力を受けたる者は片岩理を呈し、謂ははる花崗片麻岩となり、粗晶となりて散點する長石は屈折し、或は其の周邊に粒状の石英を生ずるが如き現象も諸所に於て散見する所にして、此等は場合によりては、片麻岩の名稱を以て呼ばるゝことあるも、今は凡て之れを花崗岩中に編入し、地質圖に於ても、同一の設色を以て之を現はせり。

白色若くは肉紅色の地に黒紋を雜へ、主として正長石石英及び黒雲母より成り、更に副成分として燐灰石ナルコンの微晶及び磁鐵礦若くはチタン鐵礦を含む黒雲母花崗岩は、其の組織寧ろ粗粒なるもの多くして細粒状のもの少く、往々にして斑状を呈し、石英及び長石は斑晶となりて同様の礦物成分より成る石基中に散點し、謂はゆる花崗斑岩に移化するものあり。黒雲母花崗

半花崗岩

岩中に更に角閃石を加ふれば閃雲花崗岩となり、黒雲母減して角閃石増加すれば角閃花崗岩と成る。而して實際は閃雲花崗岩を多しとす。

以上數種の花崗岩の外、中國地方に於て小岩脈を爲して花崗岩を貫通し、或は其の一局部を形成するものに半花崗岩ハーフグランド文理花崗岩及び石英斑岩あり。半花崗岩は細粒若くは緻密の、多くは肉紅色を帶ぶる堅岩にして、主として正長石斜長石及び石英より成り、岩體龜裂に富み、厚板或は方塊に割るゝを常とす。此の半花崗岩が小岩脈を爲して黒雲母花崗岩を貫通するものは、安藝安佐郡勝木、山縣郡大朝等にあり。其の黒雲母花崗岩の一局部を爲すものは、可部峠の南なる横川、又は備後三次郡布野の北なる横谷にあり、文理花崗岩は、石英と長石と殆ど同時に成生したる結果として、此の兩晶互に相抱擁し、其の形象古代のヘブリウ文字に似たるを以て此の名あり。其の安藝黒川にありては、黒雲母花崗岩を貫通して現はれ、那賀郡淺井に在りては、第三紀層に覆はれて現出す。

花崗岩は以上述べが如く、其の礦物成分上并に其の石理上、種々の種類

花崗岩噴出の時代

文理花崗岩

あれば、其の迸發の時期の如きも決して一時代に非るや論を埃たざるなり。其の美作北條郡西山附近の古生層に屬する硬砂岩に接觸變質を與へて其の中に絹雲母を生ぜしめ、備中阿哲郡馬塚に於て、古生層の石灰岩をして糖狀理を呈せしめ、且つ其の内に柘榴石の細品を發生せしめ、或は甲奴郡粟田に於けるが如く古生代に現出したる橄欖岩に由りて貫通せられしが如きは、花崗岩の迸發は古生代にありしを知るに足るべく、又長門豊浦郡狗留山の西南小串川棚室津浦の海岸、并に蓋井島の東南部を構成するもの、及び長府より井田に至り、有富より住吉に至る區域を占むるものは、兩ながら中生層を貫き、又往々にして中生層に屬する岩石の破片を抱有し、并に形山室津上及び黒井の地に在りては、中生層に接觸變質を與ふるの事實は、花崗岩の迸發は、此の地方の中生層より新期なるを知るに足るべし。

花崗斑岩は、花崗岩の一部次第に斑狀を呈して、遂に移化したるものあることは已に述べたるが如くなるが、山縣郡壬生、高田郡羽佐竹間に於ても其の實例を見るを得べく、此の如き場合に於ては、花崗岩と花崗斑岩との間に

花崗斑岩
山の時期
花崗岩と斑
岩と

年代の差異を認むる能はざるは固よりの事なるも、邑智郡銅ヶ丸嶺山地方に於ては、花崗岩が花崗斑岩を貫通せるの事實を目撃するを得べく、此の場合に於ては花崗斑岩は花崗岩より新しきを知るに足るに足るべく、即ち花崗斑岩の迸發の時期も亦花崗岩と同じく、數次ありしを知るに足るべし。

蓋井島の東南部を構成する花崗岩中には、其の玢岩と接觸する所に於て、玢岩の大小の圓塊を全く抱懷するものあり。其の玢岩塊の最大なるものは、直徑十尺に至るものありて、即ち花崗岩の噴出は正に玢岩より新らしき確證を示せり。巨智部博士は此の兩岩の相接する所を薄片と爲し、之れを顯微鏡下に照らせしに、花崗岩の主成分たる石英長石及び雲母は、此の接觸點に於て漸次細粒となり、又は碎片となりて、時に或は玢岩中の斜長石及び角閃石を捕捉して之を抱有し、之れに反して玢岩は此の接觸點に於て多少熔融せられたる者の如く、又極めて緻密の外皮を形成したるを見たり。

因幡美作の國界なる黒尾峠に露出する花崗岩に就ては、特に一言を費すの價値あり。巨智部博士に據れば、此の峠に於ては、暗綠色の角閃花崗岩を抱

黒尾峠の花
崗岩

花崗岩の集塊岩歟

花崗岩の吸水量

懐せる花崗岩大小の巖塊、他一種の花崗岩體中に混同したると恰も火山集塊岩中に現はるゝ状態に彷彿たる者ありと。深成岩たる花崗岩の一部も亦火山岩に於けるが如く、碎屑岩を構成するとある歟。記して以て後日の研究を待つ。中國地方の花崗岩、殊に其の粗粒なるものは比較的に吸水量多きが如し。大塚博士に據れば、岡山圖幅内の花崗岩の一尺立方約二十貫目の重量あるものに於て、三百目餘の吸水重量あるものありと。是れ其の比較的迅速に分解霉爛する所以歟。此の如く分解霉爛したる土砂中には副成分たる磁鐵礦の多量を含み、中國地方に特有なる謂はゆる山砂鐵の本を爲す。

閃綠岩類
閃綠岩の種

閃綠岩 中國地方に露出する閃綠岩は、其の鑛物成分の點より云へば、普通の閃綠岩の外に石英を多く含む所の石英閃綠岩、輝石を混するの輝石閃綠岩、石英及び黒雲母を雜ゆる英雲閃綠岩あり。現出の状態より云へば、或は花崗岩又は古生層を貫き脈状を爲すもの、花崗岩又は花崗斑岩内に團塊を爲して現はるるもの、或は大小の岩株を爲して出づるものとの區別あり。石理上より云へば、粒状完品質にして花崗岩状なるあり、片状著しく發達するこ

閃綠岩脈

とあり、或は多少の石基を抱きて玢岩状となり、謂はゆる安綠岩 *Andendiorite* となるものの區別あり、片状の石理を有するものは、多少岩脈の状を爲して、約東北より西南の趨勢を取り長形の露出を爲す、彼の播磨佐用郡高倉山附近より、備前和氣郡日笠川附近に達するものは其の著しきものなり。此の長露頂を爲す閃綠岩は、部分によりて石理及び成分を異にし、或は花崗岩状なるあり、或は片岩状なるあり、或は異剝石を雜へて斑糲岩に移化するあり、輝石を加へて輝石閃綠岩となるあり。概ね黒色又は濃綠色を帯び、時に多少の雲母を含有す。美作勝田郡棚原の鐵鑛床の東西に長く蔓延するものの母岩も亦此の種に屬す。

閃綠岩の岩脈を爲して現はるゝものは、其區域は自ら狭少なるを免れざるも、其場所は決して尠からず。安藝の片廻山の南麓に現はるゝものは、主成分たる角閃石及び斜長石の外に、石英又は輝石の雙品を雜ゆる白色黒紋の鑛岩にして、各鑛物間に少量の石基を抱き、閃綠玢岩又は安綠岩に近づく。又那賀郡和の地に於て、輝岩を通じて露出するものは、角閃石の稍大なる柱

閃綠岩株

閃綠岩の團塊

狀の結晶は、柢木狀を呈する斜長石及び石英と共に、微晶質の石英中に散點せり。又双三郡下作木に於ても、片廻山麓のものと同様なる濃き胡麻鹽色の堅岩か、粘板岩角岩及び砂岩の累層より成る古生層を貫通せり。其の他石見の日本海岸に近き折居の銅山内にては、細粒狀濃綠色の閃綠岩、千枚岩を通じて現はれ、深析の坂路には、斜長石及び其の一部分は綠簾石に化せる角閃石の外に少量の石英を含み、片理を呈する閃綠岩、粘板岩を貫きて現はる。

閃綠岩の岩株を爲して現はるゝは、石見鹿足郡胡摩嶽の南麓に、砂岩及び粘板岩の累層を通ずるもの、川登の地に、古生層と流紋岩との境界に突出するもの等にして、前者は斜長石及び角閃石の外に、單斜輝石を雜へ磁鐵礦を混じ、細粒乃至中粒にして黒綠色を帯び、後者は以上の成分に加ふるに更に少量の石英を以てし、共に輝石閃綠岩に屬す。

閃綠岩の花崗岩又は花崗斑岩内に團塊を爲して現はれ、山陰地方にてア＝メと稱する砂鐵の母岩を爲すものは、或は石英を加へて石英閃綠岩となり、或は更に雲黑母を加へて英雲閃綠岩となり、或は輝石を雜へて輝石閃綠岩と

なる。其の石見那賀郡敬川やががに現はるゝものは、石英閃綠岩に屬し、中粒狀にして胡麻鹽色を帯び、針長石及び石英は互に相抱擁して、謂はゆる文理を呈し、副成分としては磁鐵礦、磷灰石、ジルコン等を含み、其の三次町に近き高谷山の山骨を構成するものは、同種の岩石にして中粒黒綠を帯び、多量の磁鐵礦を含む。其の他那賀郡波佐の地にありて花崗岩内に存する、中粒黒色にして角閃石の雙晶を含み、磷灰石の針晶を有するもの、郷田に近き加久志の地に露はれ、中粒にして灰綠色を帯び、斜長石及び石英の兩晶互に相抱擁して文理を呈する者亦石英閃綠岩に屬す。那賀郡有福温泉場附近にある者は、英雲閃綠岩に屬し、中粒黒色の岩石にして往々にして斜方輝石を含み、寒曳に山の山骨を爲すものは輝石閃綠岩に屬し、高田郡有富の山間にあるものは更黒雲母を加へ、孰れも斑縞岩に近似す。

閃綠岩の流紋岩中に存在し團塊を爲すものは、長門鈴野川に出て、中粒にして胡麻鹽色を帯び、石英及び半ば分解せる黒雲母を加へて英雲閃綠岩に屬し、其の輝石富士岩脈によりて貫通せらるる所に銅鑛床を生ず。

其の他美作久米西條郡山手鑛山附近より、西に谷水の地を経て備前津高郡本宮山に連なり閃緑岩の露出あり。又赤坂郡廣戸村、備中小田郡龍王山、真庭郡大野呂山及び備後甲奴郡粟田の地に小區域を爲して閃緑岩の露出あり。其の大野呂山粟田のものは、主として角閃石及び斜長石より成り、正式の閃緑岩なるも、山手鑛山附近北庄廣戸及び龍王山の者は、往々石英若くは黒雲母を加へ、英雲閃緑岩又は石英閃緑岩に移化する處あり、或は淡紅色の輝石を加へ斑糲閃緑岩に移化する處あり。又山手鑛山及び廣戸村に於ては、横壓力を受けたるが爲め片理を呈し、山手鑛山附近及び廣戸に於ては、古生層の走向に沿うて迸出したるが爲め、岩盤中に數條の古生層を夾み、宛も古生層と累層するの觀を呈せり。石英閃緑岩又は備後神石郡坂手鑛山附近に於て、石英斑岩中に團塊を爲して、甲奴郡權現峠及び備中後月郡井山及び吉井鑛山附近に於て、古生層を貫きて露出し、時に黒雲母を雜へて英雲閃緑岩となり、時に輝石を加へて斑糲石に近づく。

伯耆日野郡多里村三平山及び金持、東伯郡田代、備後甲奴郡高尾及び三坂、

閃緑岩より
來る砂鐵

備中阿賀郡明智峠等に小岩脈を爲して迸出するもの亦閃緑岩に屬するなり。三坂の地にあるものは輝石を雜へ斑糲岩となり、三平山及多里村等に於ては少量の石英粒を混じ、稀れに黒雲母を伴ふ。此等の閃緑岩は通常絹鑛及びチタン鐵鑛を含むを以て、三坂及び上萩等に於けるが如く閃緑岩より産出したる砂鐵は、之れを花崗岩より得たるものに比すれば、其の品位劣等なるを免れず。

出雲飯石郡の大部を占むる花崗岩は、斜長石の量を増加して石英閃緑岩となる處尠からず。又同郡松笠に於て花崗岩の裂罅を貫いて迸出するものは、輝石を雜へて斑糲岩に近づく。

輝緑岩

輝緑岩 中國地方に於ける輝緑岩の露出は極めて尠く、宍道山脈の鷲鑛山附近に於て、岩脈を爲して泥板岩砂岩の累層を貫通するものは、輝石と斜長石と成る暗色の輝緑岩にして、其の他備後國惠蘇郡森脇の地に、黝青色緻密なる本岩の岩脈あり。但し輝緑岩の岩脈を爲すものは、概ね多少の石基を抱きて輝緑紛岩となり、或は粒狀富士岩となる。孰れも其の區域狭少にして地

斑禰岩

質圖上に之れを表はす能はず。

斑禰岩(飛白岩) 斑禰岩の本地方に於ける露出は、高く水涯に崛起し、沿岸航路の目標となる長門高山の山骨を構成するものを重なるものとせざるべからず。此の岩石は中粒乃至粗粒状の花崗質の堅岩にして、其の東西の兩側に横はる中生層を貫きて之れに多大の接觸變質作用を與へ、主として斜長石及び輝石より成り、其の多少風化霏爛せし所は、長石去りて表面多孔状となり、葉片状の輝石其の内に殘留突起せるを見る。鏡下に照すに、以上主成分の外、副成分として、石英、黒雲母及び磁鐵鑛を含み、輝石には異剝石と紫蘇輝石の二種ありて、互に共生し、又雙晶多し。

田万川の西畔に方り江崎の南に小丘を爲し露出せる斑禰岩は、灰綠色を帯び中粒状を呈し、斜長石、異剝石及び石英に加ふるに柱状の角閃石を以てし、輝石閃綠岩に類似す。其の堅牢なるを以て、之れを採掘して石垣若くは堤防用の石材に供す。

備中阿哲郡九ノ坂、及び芦立の地に古生層を貫き數條の岩脈を爲して露出

橄欖岩及蛇紋岩

する斑禰岩は、斜長石、異剝石及び第二次の角閃石よりなり、斜長石亦綠簾石の細粒に變成したるもの尠しとせず。副成分としては磁鐵鑛、クロム鐵鑛等を含む。此の岩石は蛇紋岩に變態せるもの多し。

橄欖岩及び蛇紋岩 備中阿哲郡及び備後甲奴の境界、三光山の西、綠礬山の四近に花崗岩及び古生層を破りて迸發せる橄欖岩は、主として橄欖石及び磁鐵鑛より成り、橄欖石は多く蛇紋化し、或は透角閃石若くは滑石に變ず。粟田の地に閃綠岩を貫通する二條の蛇紋岩脈は、橄欖岩より變成したるものなり。又川上郡吹屋村及び甲奴郡大佐の地に古生層を貫き岩脈となりて現はる、蛇紋岩も亦橄欖岩より變成せるものなり。

石見那賀郡後野より佐野に降る峠の切り通しに、綠色硅質の變質岩を貫き、岩脈を爲すものは、橄欖岩に屬するも、多くは蛇紋岩に變化し、鏡下に照すに網状を呈する纖維質の鑛物中に、分解せざる橄欖石の少量を殘し、磁鐵鑛の多量を其中に散點せり。

火山岩

(ロ) 火山岩

石英斑岩

石英斑岩 本岩は他の諸地方に於けるが如く、一方に於ては花崗岩より花崗斑岩の階級を経て本岩に移化するものと、一方に於ては玻璃質物を増し、流紋岩に移化するものとの二種ありて、此の間に諸種の階級あるを以て、其の各種に就て之れを詳述するは決して容易の業に非ず。

本岩の主なる露出は備中備後美作伯耆安藝長門の諸地方に及び、或は中生層を貫き、或は古生層を破り現はれ其の他小岩脈となり露出する所は一々枚擧すべからず。備後惠蘇郡比和四近にあるものは、淡黄色を帯び無數の球顆を有する石基中に、點々石英正斜の兩長石及び少量の黒雲母を散點し、其の石見邑智、安藝高田兩郡界に跨り、久喜大林等の銀鑛脈を擁するものは、灰綠色の石基中に球顆を含み、其の間に石英正長石及び黒雲母を雜へ。其の備後世羅郡戸張より小國の方面に連亘するものは、灰綠色微晶質の石基中に、石英正斜の兩長石及び黒雲母を基布し、御坂層を貫ける流紋岩内には、其の

岩片を捕捉して、正に其の流紋岩成生以前に噴出せしものたるを證し。安藝高宮郡鬼ヶ城山の北方に現出するものは、微晶質の石基中に、石英正斜の兩長石を基散し、更に黒雲母を雜へ花崗斑岩に移化するの傾向を有し。備中阿哲郡矢戸及び下神代の地に古生層を破り迸發せるものは、長石及び石英の潛晶質石基中に、石英及び正斜兩長石を斑點し、副成分として角閃石綠廉石榧鑛ヂルコン鱗石英燐灰石磁鐵鑛輝鐵鑛等を雜へ、又稀れに輝石或は雲母を含む。伯耆日野郡板井原四近、或は多里四近に現はるものは、潛晶質の石基中に、石英及び正斜の兩長石を散點し、副成分として殆ど前者と同様の鑛物を含有す。

其の他淡黄色を帯び完晶質の石基中に、往々にして六方錐體を呈する石英、概ね新鮮なる正斜の兩長石、及び多く分解せる少量の黒雲母を基散するものは、石見深折の地に、古生層を貫く岩脈となりて現はれ、古生層との間に磁鐵鑛を混ざる銅鑛床を抱き、灰白色微晶質の石基中に、石英及び肉紅色の長石を斑點するものは、土井の地に於て廣瀬の河畔に、古生層の走向に沿ひ細

石英斑岩の接觸變質

長き岩脈を爲して出て、白色乃至灰白色を帯び、微晶質の石英中に石英及び正斜の兩長石を散點するものは、有田上田万間の大峠の坂路に現はれ、黄褐色を帯び文理質の石英中に、石英正斜の兩長石を基布するものは、美濃郡杉原の附近に現はる。

石英斑岩は其の古生層及び中生層を貫き迸發するに當り、接觸變質せしめたるに決して少からざるは、花崗岩と異なることなく。備中阿哲郡則安及び正田の地に於ては、古生代の石灰岩は石英斑岩の爲に接觸變質せられ、接觸變質物として柘榴石綠簾石及び透輝石を生じ、長門狗留孫山に於ては玢岩と中生層との間に介在し、著しく中生層を變質せしむ。又山上學士に據れば石見國那賀郡渡津に現はるゝものは、流紋岩に酷似し、藍色電氣石の群晶を包含す。

中國山脈の分水界附近に迸發したる石英斑岩は、往々にして角礫質を呈することあり。

玢岩

玢岩は概ね中生層及び古生層並に花崗岩を貫き、大小の岩脈を爲して

玢岩の種類

現はれ、時に岩床狀を爲して出づ。礦物成分上より云へば、閃綠玢岩と輝綠玢岩とに分つを得べく、備中川上郡に露出するものは、多く閃綠玢岩に屬し、宇治及び小泉地方の中生層を貫き、小岩脈を爲せるものは、輝綠玢岩及び雲閃玢岩に屬す。備後甲奴及び三谿の兩郡并に勝光山に存在するものは、多く閃綠玢岩に屬し、時としては石英を雜へて石英閃綠玢岩となり、又惠蘇郡川北及び甲奴郡大戸等に於て、小岩脈を爲すものは、雲母を雜へて雲閃玢岩となる。甲奴郡領家の地には、玢岩は御坂層中に熔岩流を爲して露出し、美作西々條郡山城に古生層を貫き現はるもの及び久米川南村中生層を貫き出づるものは、孰れも閃綠玢岩に屬し、島根半島の中生層(?)を貫き現はるゝは輝綠玢岩に屬す。

石見那賀郡西村及び黒澤村附近の地に於て、石墨千枚岩中に岩床狀を爲し、長石千枚岩を貫通して岩脈を爲すものは、孰れも濃綠色又は暗灰色を帯ぶる堅緻の岩石にして、概ね分解せる潜晶質石英中に、柝木狀の斜長石及綠色の角閃石若くは輝石を斑點し、西村の路傍に沿ひ、石墨千枚岩中に、幅二三尺

の不規則なる岩床状を爲すものは、更に藍色の藍閃石と眞鍮黄色の黄鐵礦とを混ぜり。太田河畔に臨み安藝山縣都穴又は沼隈郡久地の古生層に屬する粘板岩を貫くものは、幅四乃至六米に達し、微晶質にして暗綠色を帯べる石基中に、角閃石及び斜長石を基散して閃綠玢岩となり、副成分として燐灰石綠簾石及び黄鐵礦等を混じ、岩脈の粘板岩に接する所は、斑状構造著しからずして閃綠岩に酷似す。

備後三次町の東北に花崗斑岩を破りて噴出し、釜ヶ峰附近の群山を構成し、回所は往々第三紀層の爲に充填せらるゝ玢岩は、其の露出區域比較的に廣大なるを以て、其の種類亦尠からず。三次郡山家の路傍に現出するものは、暗黑色を帯ぶる微晶質の石基中に、破碎せる石英斜長石及び少量の黒雲母を散點し石英玢岩に屬し、岩體中往々花崗斑岩の圓塊を擒にし、花崗斑岩の迸發以後に噴出したるを證するものあり。三次町の河畔に臨む斷崖を爲すものは暗灰色にして流理を呈する石基中に角閃石及び斜長石を星羅して閃綠玢岩となり、岩體中富士岩の塊片を裹むものあり。同郡島敷に現れ、蠟石の母岩を

三次町東北の玢岩

爲すものは、流状構造を呈する石基中に、斜長石及び輝石を基散して輝綠玢岩に屬し、其の多少分解せるもの、空隙には、後成に係る石英若くは玉髓を生ぜり。惠蘇郡川北の地に現はるゝものは、微晶質暗黒色の石基中に、石英角閃石斜長石を包み、石英閃綠岩に屬し、同郡釜ヶ峯附近の山岳を構成し、湯木殿畑山脈産蠟石の母岩を爲すものは、斜長石に加ふるに正長石を交へ、其の量増して石英斑岩又は石英粗面岩となるものあり。

三次町の南なる西酒屋の地に、花崗岩を貫き、又は其の上に溢流するものは、暗綠色にして流状構造を呈する石英中に、輝石及び斜長石を散點し、輝綠玢岩に屬し、雙三郡三良坂の南なる海田原の地に、玢岩質角礫岩と共に現はるるものは、晶體磁鐵礦に化せる角閃石と、柁木状の斜長石とを微晶質の石基中に散布し、閃綠玢岩に屬し、岩體往々にして富士岩片を捕捉し、丸田の地に現はるものは、草綠色の角閃石及び柁木状の斜長石を、流理を帯び磁鐵礦の微粒を以て充たさるゝ濃栗褐色の石基中に基散し、閃綠玢岩に屬せり。安藝山縣郡加計の北に在て、花崗斑岩と花崗岩との間に、東北東より西南

玢岩脈

西の方向を取り噴出し、黒土鶉木庚申の諸嶺を構成する玢岩は、多くは輝緑玢岩に屬し、輝石及び斜長石の斑晶を微晶質の石基中に基布し、其鈴張峠に花崗岩を貫通するものは石英玢岩に屬し、黒色を帯ぶる微晶質の石基中に、晶體碎けたる石英及び柘木狀の斜長石を散布し、其の高田郡志路西方の山骨を構成する輝緑玢岩は、黒色微晶質の石基中に、斜長石及び多少綠簾石化せる輝石并に後成の石英を散點せり。

玢岩の古生層花崗岩若くは花崗斑岩を貫通し、小岩脈を爲すものに就き更に一瞥せんか。石見那賀郡折居の銅山附近に長石千枚岩を貫き岩脈を爲す灰綠白斑の輝緑玢岩は、長石輝石の微晶より成りて多少流理を呈する石基中に、半ば分解せる斜長石輝石磁鐵鑛等を散點し、美濃郡秋冷に於て粘板岩を貫く灰綠白斑の石英閃綠玢岩は、微晶質の石基中に、分解せる斜長石角閃石及び石英粒を基散し、其の鹿足郡青原の南、大木の里道に角岩に接する粘板岩を貫く輝緑玢岩は、流理を呈する石基中に斜長石輝石を點在し、更に多量の磁鐵鑛粒を混ぜり。

長門西部の玢岩

玢岩分析成

吉賀河畔の壘に於ては、黒綠白斑緻密質の輝緑玢岩、花崗斑岩を貫き小岩脈を爲すあり。長門神宮山の山麓に於ては黒色白斑の輝緑玢岩、花崗岩を貫くあり。其の他小岩脈を爲し諸種の地層を貫通するもの決して尠からず。

長門の西部に現はる、玢岩は、岡田學士の研究により其の詳細を知るを得たり。學士は顯微鏡の試験上、之れを石英閃綠玢岩紫蘇輝閃綠玢岩輝石玢岩閃綠玢岩頑火玢岩の各種に類別したり。又蓋井島の閃綠玢岩塊か花崗岩中に捕捉せられ、其の成生花崗岩より古きことを示すものあるは、花崗岩の部に已に記述せるが如し。而して此等の玢岩は多く其の周邊の中生層に接觸變質を與へ居る事實よりして考ふれば其の迸發が此の地方の中生層成生以後なるを知るに足るべし。角島圖幅地質説明書によれば、此の地方の玢岩の分析成續は次の如し。但し第一號は謂はゆる頑火玢岩、第二號は紫蘇輝玢岩、第三號は阿川の東に於て玄武岩に被はれ、富士岩に酷似するの外觀を呈する玢岩なり。

(一)長門豊浦郡奥野

(二)同郡上小野

(三)同郡大浦

流紋岩

硅酸及不溶硅酸鹽	八〇〇一	七六、七七	七七、〇二
内硅酸 (SiO ₂)	五九、二一	五七、四八	五九、三四
礬土 (Al ₂ O ₃)	三、〇八	五、三〇	五、六八
酸化鐵 (Fe ₂ O ₃)	五、四九	九、三八	六、九三
酸化滿俺 (Mn ₂ O ₃)	〇、五二	〇、六三	〇、四〇
石灰 (CaO)	三、七六	三、五一	三、二五
苦土 (MgO)	一、三九	一、八九	二、一三
磷酸 (P ₂ O ₅)	〇、一三	〇、〇九	〇、一〇
加里 (K ₂ O)	〇、三五	〇、五三	〇、九二
曹達 (Na ₂ O)	〇、七〇	〇、九五	一、六五
熱灼減量	五、二八	一、六二	二、七八

流紋岩・石英粗面岩 本邦は一般に火山岩に富む、殊に中國山脈の如く、地
皮脆弱にして火山岩の迸流噴出甚だ隆盛を極めたる地に於ては、諸種の火山
岩各地に分布し、其の噴出の區域決して狭少ならず、而して流紋岩の如きも

流紋岩の種
類

流紋岩の山
塊

亦其の一なり。

中國地方に於ける流紋岩の分布此くの如く廣さを以て、其の石理成分の點
に於ても種々の差異を生じ、其の現出の状態又必ずしも一ならざるも、其の
石理の點より云へば、粗粒にして外觀花崗岩に似、少量の石基を抱くもの、
及び流狀著しく現はれ標式的の流紋岩をなすもの等あり。現出の状態より云
へば玢岩に於けるが如く既成の岩層を貫きて細長き岩脈をなすものと、既成
の岩層を破り交噴出して山塊を構成するものとあり。而して其の露出の區域
は固より前者に於て狭小にして、後者に於て廣大なり。

流紋岩の石理構造の著しく種類に富むは、其の既成の岩層を破りて山塊を
構成せるものに多く之れを發見するなり。因幡鳥取市附近久松山より摩尼山
に連なり、湯所に小丘を崛起するものは、微晶質石基中に石英及び正長石の
斑晶を點布し、石英斑岩に近づき、備中和氣郡矢戸村明神山、津山川沿岸に
露出するものは、黒色緻密にして石英の斑晶を有し、津山町の南に噴出した
るものは、流狀構造を呈し、石基玻璃質を帯び、備中小田郡矢掛村近傍に露

出するものは、石英の斑晶を有せざるも、分析の結果硅酸の全量八〇ペルセント以上に達し、明かに其の流紋岩たるの實を示し、備後新市町の東北毛無山四近を構成するものは、新市より下湯川に至る路傍に柱状節理を呈して現はれ、出雲八束郡一畑寺附近に第三紀層を通して噴出せるものは、青色を帯び、角岩の外観を呈し、眞珠構造を現はし、全岩殆ど玻璃質より成り、石見長濱の南に方り、第三紀層を貫き現出するものは、玻璃質にして流理を呈し、又は岩片を混ざる石基中に、破れたる石英と正斜の兩長石及び綠泥質物を散點し、江川の河畔なる谷住郷にあるものは碎屑状にして凝灰質を帯び、玻璃質を呈し流狀構造を有し、球顆を散點する石基中に、石英正斜の兩長石及び少量の綠簾石を基布し、田津の地に花崗岩に近く現はるゝものは、岩面虎斑の如き斑紋ありて流狀構造を呈する石基中に、粒狀の石英及び玻璃質の長石を線狀に羅列し、川本の對岸に方り仙岩寺の崖下に露出するものは玻璃質にして流理ある石基中に、石英正斜の兩長石及び綠簾石の破れたる斑晶を散布し、其の附近なる川下の地にあるものは、淡綠色の石基中に夥多の球顆を排

列し、各球顆の相接する所多角形の輪廓を現はし、安藝山縣郡松原に花崗斑岩を貫き噴出し、其の一部は蠟石に化成するものは、淡灰色緻密の岩石にして、流理を呈する石基中に、石英及び正斜の兩長石を混じり、石基の空隙、後成の玉髓を以て充され、豊田郡上竹仁に花崗岩を貫く黒色白斑のものは、玻璃質の石基中に球顆を有す。其の他長門阿武郡河内の附近に露出するものは、外觀花崗岩に似て少量の石基を有し、内に石英正斜の兩長石及び綠簾化せる輝石を散點し、謂はゆるネバダイトとなり、石見美濃郡飯の浦附近の地に、花崗岩に接し現はるゝ者は、灰白微晶質の石基に、徃々烟色を帯べる六角錐體の石英正斜の兩長石及び黒雲母を基散し花崗斑岩に近づき、同後谷の地にあるものは、灰白暗灰の兩色互に交りて墨流しの如き流理を呈する地に、石英玻璃長石斜長石を散點して流紋岩の特性を顯はし、阿武郡唐津附近にあるものは黒色白斑の堅岩にして、晶化せし玻璃より成れる石基中に、石英玻璃長石及び斜長石を雜へ、全中畑若くはサヘガ峠附近のものは灰褐色の地に綠色滑石質の岩片を混じり、多少流理を呈する石基中に、石英正斜の兩長石を點

流紋岩脈

在し、益田の附近に石墨千枚岩を貫きて露出するものは、灰白斑褐微晶質の石基中に、後成に係る石英粒の集合及び正斜の兩長石を基散し、湊附近に露出するものは泥板岩若くは斑岩の碎片を交へ、角礫状を爲して隱微晶質の石基中に、石英正斜兩長石の破片を基散し、碎屑状を爲す。

笹ヶ谷銅山の南に方り、古生層を貫きて須郷田山を構成する流紋岩は、流紋構造を呈する玻璃質の石基中に、石英及び正斜の兩長石を撒布し、岩塊屢、輝石富士岩脈の爲に貫通せらる。

更に岩脈を爲して現出する流紋岩に就き一言せんか。石見那賀郡三隅の北に位し、國道に沿へる小野の地より、東平原の山地に向ひ、石墨千枚岩を貫く淡褐白斑の流紋岩は、微晶質の石基に、石英正斜兩長石及び分解せる雲母を散點し、道路修築用の材料に供せられ、美濃郡都茂の北に、長石千枚岩を貫きて現はる、流紋岩は、褐灰色微晶質の石基中に、破碎せる石英、高嶺土化せる正長石及び斜長石并に黒雲母を交へ、花崗斑岩に類せり。而して笹ヶ谷銅山附近に、扁豆状の石灰岩を介在し、角岩粘板岩及び砂岩の累層を貫き

流紋岩と鑛床と

流紋岩の特性

流紋岩の應用

隱岐の流紋岩

個々の岩脈を爲すものは、微晶質にして多少流理を呈せる灰白褐斑の石基に、點々正斜の兩長石及び石英の斑品を基散する岩石にして、其の石灰岩に接する所は、單に其の接所に俗にキクデと稱する角閃石を發生するのみならず、尙ほ其の内に黄銅鑛黄鐵鑛閃亜鉛鑛等の硫化鑛物を胚胎せり。笹ヶ谷銅山は實に此の接觸鑛床を稼行するものなり。

流紋岩は此くの如く金屬鑛床と深き關係を有するを以て、應用地質上重要な岩石にして、中國地方鑛脈の多くは本岩中に胚胎せられ、若くは本岩が大小の岩脈を爲して他の岩層を貫通する處に、接觸鑛床を爲すもの甚だ尠からず。尙ほ本岩の特性は、石理流狀を呈すること多くして、又玻璃質を抱くもの尠からざること、及び第三紀層玄武岩富士岩等の新成の岩盤と多く相伴ひ、且つ第三紀層を貫くものあること、并に其の多量の凝灰岩を生ずることにして、此の凝灰岩中には有益の建築石材となるものあり。又其の脈狀を爲すものは礪材に適するもの尠からず。

流紋岩の項を終るに當り、隱岐の流紋岩に就て少しく述ぶる所あるべし。

在し、益田の附近に石墨千枚岩を貫きて露出するものは、灰白斑褐微晶質の石基中に、後成に係る石英粒の集合及び正斜の兩長石を基散し、湊附近に露出するものは泥板岩若くは斑岩の破片を交へ、角礫状を爲して隱微晶質の石基中に、石英正斜兩長石の破片を基散し、碎屑状を爲す。

笹ヶ谷銅山の南に方り、古生層を貫きて須郷田山を構成する流紋岩は、流紋構造を呈する玻璃質の石基中に、石英及び正斜の兩長石を撒布し、岩塊屢、輝石富士岩脈の爲に貫通せらる。

更に岩脈を爲して現出する流紋岩に就き一言せんか。石見那賀郡三隅の北に位し、國道に沿へる小野の地より、東平原の山地に向ひ、石墨千枚岩を貫く淡褐白斑の流紋岩は、微晶質の石基に、石英正斜兩長石及び分解せる雲母を散點し、道路修築用の材料に供せられ、美濃郡都茂の北に、長石千枚岩を貫きて現はる、流紋岩は、褐灰色微晶質の石基中に、破碎せる石英、高嶺土化せる正長石及び斜長石并に黒雲母を交へ、花崗斑岩に類せり。而して笹ヶ谷銅山附近に、扁豆状の石灰岩を介在し、角岩粘板岩及び砂岩の累層を貫き

流紋岩脈

流紋岩と鑛床と

流紋岩の特性

流紋岩の應用

隱岐の流紋岩

個々の岩脈を爲すものは、微晶質にして多少流理を呈せる灰白褐斑の石基に、點々正斜の兩長石及び石英の斑晶を基散する岩石にして、其の石灰岩に接する所は、單に其の接所に俗にキクヂと稱する角閃石を發生するのみならず、尙ほ其の内に黄銅鑛、黄鐵鑛、閃亜鉛鑛等の硫化鑛物を胚胎せり。笹ヶ谷銅山は實に此の接觸鑛床を稼行するものなり。

流紋岩は此くの如く金屬鑛床と深き關係を有するを以て、應用地質上重要な岩石にして、中國地方鑛脈の多くは本岩中に胚胎せられ、若くは本岩が大小の岩脈を爲して他の岩層を貫通する處に、接觸鑛床を爲すもの甚だ尠からず。尙ほ本岩の特性は、石理流狀を呈すること多くして、又玻璃質を抱くもの尠からざること、及び第三紀層立武岩富士岩等の新成の岩盤と多く相伴ひ、且つ第三紀層を貫くものあること、并に其の多量の凝灰岩を生ずることにして、此の凝灰岩中には有益の建築石材となるものあり。又其の脈狀を爲すものは礪材に適するもの尠からず。

流紋岩の項を終るに當り、隱岐の流紋岩に就て少しく述ぶる所あるべし。

隠岐に在ては流紋岩は、富士岩に次ぎ廣潤なる面積を占め、島後に在ては其の北西部及び南部の地域に廣く分布し、島前に在ては焼火山の頂部を構成し、其の他狹隘なる露出を見る所尠からず。西郷灣の東、雄池雌池の近傍并に福浦都萬等に露出するものは、白色若くは淡赤色を帯び、硅質緻密流紋を呈し、往々白色又は淡赤色の兩條線を交互に重疊するものあり。山上學士によれば主として結晶胚を抱く褐色玻璃質の石基より成り、斑晶としては常に玻璃長石及び往々にして石英粒を散布す。又福浦にあるものは石基中にトリキョット(毛石)ありて、褐色圓狀の玻璃を中心として輻射狀に排列し、雄池雌池の近傍にあるものは、石基中に磁鐵鑛黑雲母及び長石の微晶を交へ、長石の巨晶斑點を爲して此の中に散布し、都萬附近にあるものは、微晶質の石基中に、石英粒長石并にヂルコンを含む。其の他島後の東郷下卯敷下西、及び島前の豊田福井等に露出するものは白色粗鬆にして往々浮石様の外觀を呈し主として針狀の長石及び石英粒より成る石基中に、粗大なる長石及び不定の石英晶片を混じ、島後中山越の南方及び島前焼火山の頂等に露出するものは、褐色角

粒狀富士岩

礫質にして、玻璃質を帯び著しく流理を呈する石理と、長石及び石英の斑晶とより成れり。

粒狀富士岩 粒狀富士岩の本區域に於けるものは、概ね大小の岩脈をなして既成の岩層を貫通する者なるをもつて、其の露出區域自ら狹少なるを免れず。其の稍大なるものは、石見の濱田の南方に、流紋岩及び花崗岩を貫通し、長形の岩塊を爲すもの、並に長門河井迫より斜に南西に延び、山谷に至り蛭狀を呈するものとす。孰れも灰綠色乃至濃綠色を帯び、細粒狀の者より微晶質の石基を有する堅緻の岩盤にして、其の鑛物成分は斜長石輝石若くは角閃石を主とし、磁鐵鑛石英綠泥石綠簾石等を副とす。然れども隨所多少岩質を異にし、其の山谷の路傍に流紋岩を貫き岩脈を爲すものは、細粒狀にして輝綠岩特有のオフィチック組織 Ophitic structure を呈し、輝綠岩に近づき、其の河井迫に岩崖を爲すもの及び周布川の上流の地に在るものは、少量の石基を抱き斑狀を呈し玢岩に近づく。

粒狀富士岩の應用地質上要用なるは流紋岩と同じく其の金屬鑛床と密接の

粒狀富士岩と礫床と

石英富士岩

關係あるもの尠からざること是れなり。彼の美作英田郡にありて、三十餘條の鑛脈を有する瀬戸鑛床の如きは、粒狀富士岩の小岩脈が縦横に貫通する接觸部に沈澱したるものにして、其の他國分寺銅山も亦然り。

石英富士岩 石英富士岩は岩脈を爲して數所に露出し、時に角閃石を含みて英閃富士岩となり、時に黒雲母を雜へて英雲富士岩となる。石見大森の南に方る仙之山の南麓に於て頑火富士岩中に現はるものは、石英角閃石斜長石に加ふるに、輝石燐灰石磁鐵鑛及び輝鐵鑛等を以てし、其の降露坂に露出するものは、流紋岩に似たる外觀を呈し、鏡下には角閃石及び輝石を含み、閃輝石英富士岩と稱すべきものなり。濱田の東方半里の所に、富士岩質角礫岩を貫き、栗褐色の地に白色の長石、玻璃光澤を帯べる石英、漆黒色の雲母を雜へ、一大岩脈を爲して露出する者は、英雲富士岩に屬し、住民之を黒川花崗岩と稱し、之れを採掘して石垣用に供せしことあり。鏡下にては褐色玻璃質の石基中に、歪み破れたる石英斜長石玻璃長石及び黒雲母を星羅して更に磁鐵鑛を加へ、岩質流紋岩に類するも、斜長石の玻璃長石より多きをもつ

角閃富士岩

て之を富士岩中に入れたり。

角閃富士岩 石見周防の地を構成する高臺狀を爲せる峯巒中、特に一頭地を抽んずるの圓錐丘が所々に羅列するは、此の地方を通過する旅客の目を引く所也。此の圓錐丘は古生層花崗斑岩等の弱點を破り迸出せる火山岩より成り、即ち角閃富士岩に屬するものなり。其の古生層を破り噴起せるは周防徳山の西北の地にある四熊岳、鹿野市の東南にある金峯山等にして、石見津和野の四近にある地倉ヶ山青野山及び野坂峠の西に崛起する者の如きは、花崗斑岩を破り、若くは花崗斑岩と流紋岩との境界に沿ひ噴出せるものなり。岩石は淡黝色乃至暗黝色にして、柱狀を爲せる角閃石は肉眼にて認め得べきもの多く、玻璃を多く含まざる微晶質の石基中に、斑晶として角閃石斜長石及び磁鐵鑛を散點し、時に少量の石英を含むことあり。

輝石富士岩 茲に輝石富士岩と稱するは、主として普通輝石及び紫蘇輝石を含む富士岩を云ひ、斜方輝石に屬する頑火石を多く含むものは、本地方に割合に多く配布せらるゝを以て、別に項を設けて之れを記す。

輝石富士岩

輝石富士岩
の山塊

輝石富士岩の本地方に於ける露出は割合に廣からず、而して其の現出の状態の如きも、流紋岩に於けるが如く山塊を構成するものと、岩脈を爲すものとの二種となすを得べく、其の山塊を爲せるものゝ重なるものを擧ぐれば出雲八京能義の郡界を爲す京羅木山より天狗山に連なる山脈を爲すもの、飯石郡八重山近傍、石見國安濃郡才坂四近、濱田の沿岸、那賀稻代及び今市、神門川の下流に近き黒山及び因幡氷の山連山並に飯盛山及び鰐谷山の山群を構成するもの、隠岐列島の大部分を爲すもの等にして、往々にして氷の山に於けるが如く集塊岩を伴ふ。

氷の山群山を構成するものは、巨智部博士によれば、輝石富士岩の外、英頭火富士岩、玄武岩流紋岩粒状富士岩等ありて、極めて錯雜の火山岩なり。又因幡飯盛山及び鰐谷山の山群を構成するものも同様に異種の火山岩より成り、八頭郡釜の口に於ては玄武岩、同郡加瀬木に於ては輝石富士岩、同高山に於ては英閃富士岩及び英頭火富士岩あり。

濱田町附近
の輝石富士
岩

石見濱田町附近に露出するものは緑褐の雜色を帯び玻璃を抱き、流理を呈

隠岐の輝石
富士岩

する石基中に、斜長石綠簾石を基散し、馬島の島骨を構成するものは、濃綠色微晶質の石基に、斜長石及び綠泥石又は綠簾石に變態せる輝石、并に磁鐵鑛を基散し、鶴ヶ島に露はるゝ者は、灰褐色微晶質の石基に斜長石を星羅し、稻代附近にして特に木都賀に存するものは、黒色白斑の岩盤にして、流理を呈する玻璃質の石基中に、斜長石を散布し、綠泥石又は玉髓を以て充されたる扁圓孔を連ね、今市四近に角礫岩を伴ふものは、微晶質の石基内に斜長石及び一部綠泥石又は綠簾石に變成せる輝石を雜へ、益田町の南なる久々茂の地に角礫狀を爲し現はるゝものは、灰綠色微晶質の石基に、斜長石及び綠泥化せる輝石と、後成の綠簾石とを點在し、山折の地に現はるゝものは、灰綠斑黒にして流理を呈せる石基内に、斜長石輝石並に少量の角閃石の斑晶を基布せり。

隠岐の大部を占むる輝石富士岩亦地方に由り、其の色澤石理構造等に多少の差異あるを免れず。島後の西北に方る北方の地に露はるゝものは、黒色緻密なる玻璃質富士岩にして、材木を束ねたるが如き柱狀節理を呈し、知夫里

島に属する波嘉島を構成するものは、暗褐色にして板状節理を呈し、微晶質の石基内に、斜長石の巨晶及び少量の輝石并に磁鐵鑛を斑點し、島前西の島耳浦及び中の島日の津須賀間にあるものは、黒雲母を含み、前者は褐色斑状にして少量の鱗灰石を有し、後者は黒色緻密にして稀に輝石の巨晶を含む。隠岐列島に於ては、其の迸發の時期比較的に古く、玄武岩及び流紋岩に先ちて迸發したるの證を呈せり。

異様の富士岩

富士岩の一種異様なるは、因幡氣高郡御熊より下光本に至る中間の丘陵を構成するものにして、此の中には斜長石の多量と、磁鐵鑛及び含水酸化鐵鑛の少量とを含み、鐵苦土硅酸鹽類は殆ど全く之れを含有せず、縞に後成の綠簾石粒を散見するに過ぎず。

輝石富士岩

輝石富士岩の古生層中生層第三紀層花崗岩流紋岩等既成の岩層を通じて岩脈を爲すもの、本地方亦其の露出に乏しからず、其の石理構造の如きも所により多く其の趣を異にするを免れず。今其の一斑を述んに、石見美濃郡下條九郎の地に、硬砂岩及び粘板岩の累層を貫きて岩脈を爲せる者は、濃綠色微

晶質の石基中に、粗大の斜長石輝石及び磁鐵鑛を基布し、鹿足郡中曾根の地に同様の地層を貫き岩脈を爲すものは、灰色白斑の堅岩にして針状斜長石の集合より成れる微晶質の石基中に斑品として斜長石分解せる輝石并に少量の石英を撒布し、長門阿武郡湊の北東佛坂の地に露はるゝものは、濃綠色微晶質の石基中に多少分解せる斜長石輝石及び磁鐵鑛を基布し、其の砂岩及び泥板岩より成る第三紀層上に岩床状を爲し、第四紀の礫層を以て被覆せられ、津田に近き鶴の鼻の水涯に現はるゝものは、濃綠色にして多少流理を呈する石基中に、斜長石輝石及び磁鐵鑛の斑品を雜へ、其の風化を受け霽爛したる所は葱皮状に剝脱せり。石見美濃郡波田の北東三谷の地に、花崗岩を通じて岩脈を爲すものは、栗褐色にして多孔質を帯び、流理を呈する玻璃質の石基中に、斜長石及び磁鐵鑛を雜へ、孔内玉髓を以て充たされ、津田の北、大濱の海岸に流紋岩を貫き斷崖を爲すものは、栗褐色を帯び流理を呈し、晶化せる玻璃質の石基中に、斜長石及び磁鐵鑛を基散し、中畑の地に同様の岩脈を爲し、所在之れを採掘して石材に供するものは、濃綠白斑の堅岩にして流紋

岩の礫片を雜へ、角礫狀を呈し、隱微晶質の石基中に、石英方解石に變態せる斜長石及び輝石を斑點し、長門須佐町の南西大狩峠に同じく流紋岩を貫通するものは、深綠色微晶質の石基を抱き、其の内に斜長石、綠簾化せる輝石及び磁鐵礦を散布し、石見鹿足郡須郷田山の西麓を流る、溪流に、流紋岩を貫き岩脈を爲すものは、黒色白斑の堅岩にして、玻璃を含める隱微晶質の石基中に、斜長石複輝石及び磁鐵礦を散布せり。

頑火富士岩

頑火富士岩 所謂白山火山脈の通過する所丹後以西の地には、頑火富士岩の多く噴出するを見る。因幡に在ては扇山に連なる岩美郡の中部及び千解岩毛無山長尾山等の各地に露はれ、伯耆に在ては大山船上山の如き山岳を構成し、石見に在ては三瓶山大江高山青野山を造り、猶周防に金峯山四阿ヶ岳を成せり。而して大森の銀鏡床は實に頑火富士岩の岩屑と凝灰岩中に胚胎せらる。本岩は黝色の地に暗色の頑火石を散布する斑狀構造の岩盤にして、鏡下にては隱微晶質の石基中に、斜長石及び暗黒なる綠を有する頑火石を基散し、尙ほ副成分として磷灰石チタン鐵礦を含むこと多く、其の他少量の鱗石英及

三瓶山の頑火富士岩

び石英を含み、時に黒雲母及び角閃石の多量を有することあり。三瓶火山を構成する雲母頑火富士岩は、主として黒雲母頑火石斜長石より成り、多くは多孔質にして緻密ならず。故に其の分解變爛したる者の表面は、凸凹參差を來し、頗る雅致あり。玩石家の三瓶石と稱し珍重するもの是れなり。

千解岩

千解岩とは因幡八頭郡の中央若櫻川の北岸、用呂富枝の地に絶壁を爲し、古生代の粘板岩上に横はれる一帯の熔岩床を稱するものにして、柱狀節理を呈し蝨々として數千の材木を建て列ねたるが如し。蓋し扇の山より噴出したるものなるべし。淡灰色粗鬆の頑火石富士岩にして多少の石英を含有す。

毛無山は其の南方の半腹に黝色斑狀の頑火富士岩を露出し、因伯の國境に位する長尾山を構成する頑火富士岩中には、更に紫蘇輝石を含有するものあり。

大山火山の頑火富士岩

大山火山を構成する富士岩も三瓶火山のものと大差なく、黝色粗鬆にして時に角閃石の斑品を含み、又普通輝石を有す。船上山を構成するものは緻密

頑火富士岩の分析成績

暗黝色にして、時に板状節理發達し、四國屋島の古銅富士岩に似たる外觀を呈す。其の他伯耆鉢伏山の東角鷲峯山毛無山附近の丘陵は、頑火富士岩より成り、長尾山の山道に露出するものは、二種の斜方輝石斜長石の斑品を、玻璃を抱く微晶質の石基中に基布し、時に暗褐色の雲母を含有す。

左に地質調査所にて執行せる毛無山の頑火富士岩の分析表を示す。

硅酸	礬土	第一鐵酸	第二鐵酸	石灰	苦土	加里	曹達	水
六、七三	一八、〇六	一、九	三、四	六、三	二、四六	一、三	三、五	一、五

玄武岩

玄武岩 中國地方に割合に多く噴出する玄武岩は、之れを其の現出の状態により、岩脈を爲すものと、岩床若くは山岳を形成するものと、熔岩流を爲すものとに區別するを得べし。

岩脈を爲せる玄武岩の第三紀層を貫ぬけるものは、石見益田の北上遠田の地にあり。漆黑色を帯び、堅緻にして、往々孔隙を一方に羅列し、流理を呈し、長石輝石磁鐵礦粒と玻璃とより成る石基中に、多少蛇紋化せる橄欖石

玄武岩脈

と、割合に新鮮なる輝石とを基布し、孔隙の多くは後成の玉髓を以て充填せらる。其の古生層の粘板岩を貫きて安養寺に近き丸山銅山の事務所より、山神坑に向はんとする崖下にあるものは、灰綠堅緻の岩石にして、風化せし所は黄灰色を帯び細粒状を呈し、砂岩の如き外觀を呈す。斑品は輝石橄欖石及び少量の玻璃長石にして、石基は針状の長石及び磁鐵礦粒より成り、輝石の大なるものは晶體熔化して其の大部黒質物に變せり。

玄武岩の山岳

玄武岩の圓錐形の山岳を形成するものは、出雲能義郡九合山、八束郡星上山茶臼山中海の中に低平の丘を形する大根島、備後世羅郡の明神山、出雲飯石備後雙三兩郡界の女龜山右見那賀郡大糞山周防佐波郡日暮ヶ岳長門萩町の北にある笠山長門阿川東面の秀峯たる嶽山角島と相對する附野天神山等にして、其の岩床を爲せるものは長門の海上に遙かに孤立する見島を初めとし、沿岸に砲臺の如き有様を爲して基布せる相島樞島大島等に現はれ、陸上に於ては高臺状を爲して、東臺西臺梅ノ木千石臺長澤臺羽賀臺を爲し、固有の地形を呈して現出す。此の類の玄武岩は、石理粗鬆にして多孔質のものあり、緻密

玄武岩の岩床

大根島の玄武岩

のものあり、其の色の如きも灰色なるあり、黒色なるあり、或は栗褐色のものあり、外觀は種々に變化するも、鏡下の性質は大概其の揆を一にし、微晶質の石基中に多少分解せる橄欖石と、割合に新鮮なる輝石とを斑點し、更に多くは玻璃長石の少量を加ふ。多孔質の者の孔竅は、概ね石英質物を以て充たさるるも、其の見島本村より宇津に至らんとする路傍に斷崖を爲して露出する者の如きは、孔竅内に方解石及び黒雲母の一種アノマイト Anomite を含む。低平の圓錐丘を成す出雲大根島の玄武岩は、外觀甚だしく富士の斜長石玄武岩に類し、多孔質にして中には孔の直徑三センチメートルに達する者あり。此の孔には往々にして多少葡萄狀を呈せる玉滴石を含むとあり。石基は暗灰色にして斜長石及び橄欖石の斑晶あり。橄欖石は斜長石中の包裹物たることとあり。又獨立に斑晶として存在することあり。孔内には又金屬的光澤ある薄皮を被覆するが、之れは昇華作用により生ぜる赤鐵鏽か磁鐵鏽かなるべし。俗に島石と稱し之れを採掘して建築石材とす。鏡下にては斑晶として長石普通輝石及び橄欖石あり、就中長石最も大にして其の量亦最も多く、普通輝石

大根島の密岩

之れに次ぎ、橄欖石を最も少しとす。石基は針狀或は小なる柵木狀の長石粒狀の輝石及び有色玻璃より成り、玄武岩的なり。

大根島の東端波入村宇津江には熔岩隧道あり、俗に之れを風穴と稱す。方向は主として東西にして、大小二個ありて互に相通ず。北にあるものは大にして長さ三十二間半、他は凡そ十八間半にして、更に長さ五間半の小枝を出だす。幅は最も廣き所は五間に達すべく、高さは凡そ十五尺の所を最高とし、最も低き所は匍匐して行くべし。隧道の天井は多少鱗狀を爲し、熔岩鐘乳は殆ど之れを發見する能はず。下底は多く泥土と水とを貯へ、中には脚を没する所あり。隧道の断面は上下に短く左右に長き橢圓形にして、側壁に於ける平行なる凸凹線は富士に於けるが如く著しからず。隧道盡きて行く能はざる所は里俗之を「行キツマリ」と稱し、上部の岩塊崩壞して路を埋め、匍匐せざれば行く能はざる所は、里俗之れを「背コヌリ」と云ふ。

玄武岩の風化して土壤を爲せるものは、吸收力特に強く、一度之れに肥料を施さんか、永年の間之れを保持し、加之空氣の透過も恰も其の當を得、頗

玄武岩の土壤

隱岐の玄武岩

孔質となり、此の層理に沿へる間隙、若くは孔竅中に黒雲母の一種アノマイトの夥しく生ずるを見る。
玄武岩は又隱岐列島に露出し、殊に島後大満寺山以南に於て最も其の著しきを見る。西郷町の後方に於ける低平なる臺地は多孔質粗鬆の玻璃質玄武岩より成り、大満寺の山頂は、細粒黒色の地に長石輝石及び橄欖石の斑晶を基散するものより構成せらる。

玄武岩の節理

長門阿川の東に聳ゆる嶽山天神山、向津具半島の極西端たる俵島、島戸浦の北角及び角島の極北岬牧崎に露出する玄武岩は、柱状節理能く發育し、宛然材木を束ねたるが如き觀を呈し、向津具半島角島其の他に露出せるものは、板状節理能く發育し、遠く之れを望めば成層岩より成れるが如き觀を呈せり。

六 温 泉

温泉

中國地方は前卷諸地方に比して温泉に乏しく、殊に硫黄泉に於て一層稀なるは活火山の存せざること亦其重なる原因なるべし。又温泉の中には交通不

岡山縣地方
湯水温泉

眞賀温泉

奥津温泉

鷺ノ湯温泉

便の地に僻在して、未だ世に顯はれざるもの少なからず。今例に依り茲に之れを各行政區域に分ちて其の一斑を述べし。

岡山縣 本縣の北部眞庭郡神湯村湯原に湯本温泉鹽類泉五十度あり。勝山町より高田川を上る五里餘にして、其の間道路嶮惡なり。位置高田川の清流に臨み、高燥なり。泉水は花崗岩の裂罅より湧出し、浴用の外、之れを採酌して樽に入れ、各地に輸送販賣す。本泉の南方二里餘を隔てる高田川の西岸なる中間に眞賀温泉炭酸泉四十度あり。亦花崗岩の裂罅より湧出し、泉水無色透明にして硫化水素の臭あり。道路狹隘にして車を通ぜず。苫田郡津山町の北七里を距る奥津村に奥津温泉鹽類泉四十二度あり。東に日浦山聳え、西に溪流を控え、風景愛すべし。泉水は花崗岩の裂罅より二ヶ所に湧出し、泉口を分ちて銚湯下湯と呼ぶ。道路峻嶮嶮険多くして交通不便なり。勝田郡湯郷村に鷺ノ湯温泉鹽類泉三十四度あり。倉敷川西岸石英粗面岩の凝灰岩中より湧出し、之れを浴槽に移し、火熱を加へて療浴に供す。本泉は嘗て中古地變ありて、温泉埋没せしを貞觀二年叡山の僧圓仁法師再び之れを改修せりと

三石温泉

稱す。現時の浴室は洋風の二層樓にして、近傍に旅舎二十餘個あり。氣候温和風景秀麗にして、交通便なれば浴客甚だ多し。和氣郡三石村の南方十餘町を隔てる石英粗面岩の丘陵地に三石温泉酸性冷泉あり。温めて深浴に供す。其の他本區域に於て湧出する各種の温泉は左表に示すが如し。

岡山縣地方温泉所在地

郡	村	字	泉名	泉質	温度	地質
眞庭	八幡	樟次	樟次温泉	鹽類泉	三十八度	花崗岩
全	全	禾洋	禾津温泉	全	三十一度	全
吉備	福谷	西山内	湯ノ原温泉	炭酸泉	十九度	全

廣島縣地方

湯ノ山温泉

吉和温泉

廣島縣 本縣は中國地方中最も温泉に乏し。佐伯郡水内村大字和田に湯の山温泉炭酸質泉二十三度あり。湯の山の中央花崗岩崖の裂隙より湧出す。風景幽雅なれば夏時浴客多し。全郡吉和村の吉和温泉單純泉二十二度は田圃の花崗岩の裂罅より湧出し、無臭無味にして、微アルカリ性の反應を呈す。深

山野温泉

山口縣地方
湯田温泉

鍵湯温泉

安郡山野村の山野温泉硫黄冷泉は山野川の北岸古生層の地より湧出す。土地僻遠に位し、交通不便なれば樵夫農民の浴するに過ぎず。其の温泉の配布次の如し。

廣島縣地方温泉所在地

郡	村	字	泉名	泉質	温度	地質
佐伯	上水内	多田	湯來温泉	單純泉	二十五度	秩父古生層
甲奴	矢野	...	矢野温泉	全	二十三度	花崗岩
雙三	布野	上布野	尻無谷温泉	弱炭酸質泉	十五度	花崗斑岩

山口縣 本縣に於ける温泉も亦僅少なりとす。吉敷郡下宇野合村の湯田温泉鹽類泉四十三度は第四紀新層より湧出し、泉水淡黄色を帯び、透明無臭にして少しく鹹味あり。位置山口町の南に接し、道路平坦交通自在なれば夏季浴客頗る多し。豊浦郡川棚村宇湯町の鍵湯温泉鹽類泉三十三度は本村の一小山麓花崗岩の裂罅より數ヶ所に湧出し、浴槽は上下の二個に區分せらる。縣

粟野温泉
貝光温泉
湯本温泉
湯町温泉
鳥取縣地方
岩井温泉
湯谷温泉
吉岡温泉

下屈指の靈泉として知られ、浴客常に絶えず。全郡粟野村の粟野温泉鹽類泉は冷泉にして、石英粗面岩と第三紀層の接合線より湧出するものゝ如し。土地僻遠に位すれども夏季海水浴を兼ね來浴する者多し。全郡長府村の北神田川の上流に貝光温泉鹽類泉三十度あり。花崗岩より成れる小丘の土砂中より湧出す。大津郡深川村大字湯本の湯本温泉單純泉三十三度は深川の上流山麓に位する火山岩の間隙より湧出し、之れを禮湯恩湯に區別す。泉水は淡黄色無味にして、少しく敗卵の臭あり。本泉の西南二里餘を隔てる俵山村字湯町に湯町温泉單純泉三十三度あり。全じく火山岩の裂罅より湧出し、一を猿湯と呼び、他を新湯と稱す。位置川流に沿ふを以て往々水災に罹かると云ふ。

鳥取縣 縣下岩美郡岩井村の岩井温泉鹽類泉四十七度は蒲生川の左岸第三紀層の地より湧出し、其の湧出する所を古へ石井郷と稱せり。泉水無色透明にして浴客多し。八頭郡明治村湯谷の湯谷温泉鹽類泉三十三度は鳥取市を距る西南四里餘にして、第四紀新層より湧出す。播磨街道以西は道路險惡にして車を通ぜざれば浴客も亦隨て尠なし。氣高郡吉岡村の吉岡温泉は鳥取市の

勝見温泉
山田温泉
三朝温泉
關金温泉

西二里半の地にありて交通便なり。泉水は第三紀層よりニヶ所に湧出し、一を上ノ湯鹽類泉五十七度、他を下ノ湯硫黃泉三十三度と稱す。永祿の頃吉岡將監此の地を領せしを以て吉岡湯村と稱し、浴槽を設けて追年繁盛に赴きたりと云ふ。全郡正條村大字勝見の勝見温泉硫黃泉四十三度は第四紀新層なる田圃より湧出す。一に鷲ノ湯と稱し、鳥取市の西五里餘を隔つ。東伯郡三朝村大字山田の山田温泉鹽類泉五十度は三朝川北岸の第四紀新層より湧出し、附近に二三の浴舎あり。交通稍不便に屬す。寶曆元年三月突然湧出せしより以來連絡として今日に至り絶ゆることなしと云ふ。本泉の南二十五町を隔てる三朝に花崗岩の裂罅より湧出する三朝温泉炭酸泉五十八度あり。一に枕株ノ湯と稱し、泉水無色透明なり。全郡倉吉町の西南を距る二里半の地にある關金に關金温泉炭酸泉四十七度あり。泉水火山集塊岩の地より湧出し、淡黄色にして無臭無味なり。吉方温泉は鳥取市外吉方村にあり。(鹽類泉五十度第四紀新層中より湧出す。此の他本區域の温泉は左表の如し。

鳥取縣地方温泉所在地

島根縣地方
玉造溫泉
牛尾溫泉
三澤溫泉
頓原溫泉

郡	村	字	泉名	泉質	溫度	地質
氣高	正條	濱村	濱村溫泉	硫黃泉	四十一度	第四紀新層
東伯	松崎	引地	引地溫泉	鹽類泉	四十三度	火山集塊岩
全	泊	宿	泊宿溫泉	全	三十二度	輝石富士岩

島根縣 本縣は溫泉最も多しと雖も、冷泉に屬するもの多く、且つ來浴者少なきため浴舎の設けなきもの又た少なからず。八東郡玉造村の玉造溫泉鹽類泉六十五度は玉造川の東岸玢岩に接する第三紀層より湧出す。東西南の三方は丘陵を繞らし、北方は玉造川斜面にして、宍道湖に開く、松江市を距る僅に西南二里餘にして、夏日浴客多し。大原郡大東町の東一里を隔てる牛尾に牛尾溫泉鹽類泉二十八度あり。此の溫泉は斐伊川の支流牛尾川の南岸ありて、四面皆山を以て圍まれ、道路稍可なれども浴客少なし。泉水は富士岩の裂罅より湧出し無色透明なり。仁多郡溫泉村湯村に花崗岩の裂罅よりする三澤溫泉單純泉四十二度あり。風景閑雅なりと雖も、道路峻惡にして浴客少なし。飯石郡頓原村に頓原溫泉炭酸泉十度あり。山麓の花崗岩地より湧出し、

志學溫泉
小原溫泉
川合溫泉
溫泉津溫泉
有福溫泉

火力によりて澡浴に供す。昔は溫度高くして、火力を用ふるに及ばざりしが、漸次變化して遂に今日に至れりと云ふ。安濃郡佐比賣村の志學溫泉鹽類泉四十二度は富士岩の裂罅より湧出し、明治五年三月の石見大地震後溫度上昇せりと云ふ。其の北二里にある小原原に全じく富士岩の裂罅よりする小原原溫泉鹽類泉三十九度あり。兩泉共に三瓶山の溪間にありて、交通稍不便なりとす。全郡川合村の川合溫泉炭酸泉十三度は山間溪流中の花崗岩の裂罅より湧出し、明治五年の大地震の時始めて出現せり。邇摩郡溫泉津町に溫泉津溫泉(鹽類泉四十六度あり。縣内有名の溫泉にして、第三紀層より湧出し、元一箇所なりしが、明治五年の大地震の時新一を加へたり。地海濱に臨み、浴舎整備して、水陸の交通便なれば殊に夏季浴客の來浴するもの多し。那賀郡有福村の有福溫泉單純泉四十六度は黃鐵礦を散點する閃綠岩の裂罅より湧出し、四圍蜂巒環り、溪水其の間を流れ、北流して跡市川となりて海に入る。浴場の在る所地形高低ありて、道路稍不便なり。其の他本區域に湧出するものは左表の如し。

島根縣地方溫泉所在地

郡	村	字	泉名	泉質	溫度	泉地質
簸川	莊原	學頭	學頭溫泉	鹽類泉	二十六度	第三紀層
邇摩	福光	—	禰光溫泉	全	二十三度	全
全	大國	天河内	天河内溫泉	全	三十一度	全
那賀	美又	—	美又溫泉	全	三十七度	花崗岩
邑智	智矢上	下井手	下井手溫泉	弱鹽質泉	十五度	全
全	全	八田子	八田子溫泉	全	全	全
全	谷	鹽谷	寺屋敷溫泉	碳酸質泉	十六度	角閃花崗岩
全	都賀行長	藤	魚切谷溫泉	全	十四度	花崗岩
飯石	赤名	—	赤名溫泉	弱碳酸質泉	全	全

氣象の概説

第四章 氣象

中國地方は凡そ北緯三十五度内外にありて、本州島の西翼をなし、京畿及東海道地方と略、其の緯度を等しうし、氣候風土概して適順なり。本地方の地勢たる、北及び西方一帯は、日本海に枕みて遙にアジア大陸と相對し、南は瀬戸内海を隔て、近く四國に面す。而して中央には中國山脈に屬する峯巒蜿蜒起伏して、山陰山陽の兩面を區劃するが故に、其の風土も此の兩方面によりて多少異なるや論を俟たざるなり。就中降水量の配布に甚しき懸隔あるは其の最も顯著なることにして、前卷北陸編既に述べたるが如く、彼の黒潮の支流にして、裏日本の海岸に近く北流する對馬海流は、常に其附近の大氣をして濕潤ならしめ、之を脊梁山脈の北面に遊離凝結せしむること夥しきを以て、裏日本的一部分たる本地方は降水量多く、殊に冬期北西風卓越する時に際しては、密雲漢々天を蔽ひ、雨雪常に絶ゆることなし。之れに反して山陽地方は、北に中國山脈、南に四國山脈、南東に紀伊山脈等自然の障壁連亘し

て、殆んど全く外海と相断ち、四時轉換する所の卓越風も、其の含蓄せる水蒸氣を齎すこと少なく、彼の瀬戸内海ありと雖、其の面積狭少にして、是れより發散する所の水蒸氣は、以て充分に大氣を飽和するに足らざるが故に、一年を通じて降水量甚だ少く、信州及び北海道内地と共に寡雨地方の一に屬し、快晴の天氣持續するを常とす。此の現象は冬期に於て殊に顯著なるのみならず、瀬戸内海方面は、冬季と雖風力比較的弱きを以て、海上靜穩、船舶の往來に便にして、加之、四時晴天多くして乾燥なるは、頗る製鹽に適し、其の海岸に斯業の盛なる全國に冠たり。山陰地方が大陸の影響を蒙ることは、山陽よりも多かるべしと雖、一方に彼の對馬海流あるが爲めに、氣溫の如きは之れが爲めに調節せられ、風土多少海洋的たるを失はず。然るに山陽地方は其地勢上其氣候は多少既に内陸的に傾き、廣島岡山等の如きは松江鳥取等よりも年内氣溫の高下稍多きを見るなり。

氣溫 本地方に於ける年平均氣溫は、吳の十五度二、下關の十五度一より西郷(隱岐)の十三度九までの間にありて、山陽道地方は概ね十四度半乃至十

氣溫

五度、山陰道地方は十四度内外の年平均を保てるものと見做して大過なし。一年中に於て月平均氣溫の十度以下なるは、十二月より翌年三月に至る四個月間に於て、二月若しくは一月を最寒の期とし、其の平均示度は下關の五度乃至境の三度半の間にあり。又二十度以上なるは、六月より九月に至るまでにして、八月を最暑の期とし、其平均示度は味野(備前)の二十七度四より西郷の二十五度八までの間にあり。而して七月の八月よりも低きこと本地方にては一度半乃至二度半なりとす緯度進むに従ひ此の差大なり。年同溫線の配布は、十四度の線本地方の北東部にありて、日本海の南部は比較的高溫を保ち、隱岐及び因伯地方の如きは、他の同緯度の地よりも溫暖なるを見る。對馬海流の影響尠からずと謂ふべし。然るに山陽道の南西部に方りては、別に十四度の同溫線を以て圍まるゝ小區域ありて、比較的低温なるを示せる所あり。又氣溫の較差は山陰地方よりも山陽地方に一般に大にして、随つて最高低氣溫月平均の差も岡山竝に廣島は三十二度の多きに及び、下關及び濱田は二十九度の少きを見ると雖、絶對の最高低は他にも現はるゝ場合なきにあらず、

寒暑の日数

即ち其の最高は境の三十七度八華氏百度明治廿六年八月四日、廣島の三十七度五華氏九十九度五、十九年八月十九日を測り、最低も亦境の氷點下九度七(華氏十四度五、卅七年一月廿七日)、廣島の氷點下八度四華氏十六度九、十六月卅一日を測り、境の如きは、同一地にして兩極温の較差四十七度五に達せ年十二るを見る、亦尠しとせざるなり。然れ共、一般に山陰地方は、裏日本地方の常態として、冬季陰霽の日多きが故に、最高最低氣温の較差は、冬期に於て最も少なりとす。次ぎに寒暑の日數に就いて述べんに、最高氣温の三十度以上に昇りたる一個年間の平均日數は、廣島の四十八日、境の四十日を多きものとし、下關の二十六日を少きものとす。之れと反對に、最低氣温の氷點以下に降りたる平均日數は、岡山廣島山口等孰れも五十日内外の多きを數ふるに拘はらず、是等の地を距ることさして遠からざる下關にては、僅に十二日を數ふるに過ぎず。是れを要するに、山陽道の中央部は、寒暑共に烈しく、唯下關附近のみは然らざるを識るべし。

其の詳細は左表に明なり。

最高温度の年内三十度以上に昇りたる日

地名	平均日數	連日引續きたる最長日數	初		終	
			平均日	最早日	平均日	最遲日
下關	二十六日	十日間	七月十二日	六月廿三日	九月六日	九月十八日
廣島	四十八日	三十二日間	七月二日	六月八日	九月十三日	九月廿二日
岡山	三十五日	九日間	六月廿二日	五月廿二日	九月十四日	九月十四日
境	四十日	二十三日間	六月十四日	五月十四日	九月十日	九月廿八日

最低温度の年内氷點以下に降りたる日

地名	平均日數	連日引續きたる最長日數	初		終	
			平均日	最早日	平均日	最遲日
下關	十二日	七日間	十二月廿六日	十二月五日	二月十四日	三月十四日
廣島	四十九日	十五日間	十二月二日	十一月十三日	三月廿六日	四月三日
岡山	五十四日	九日間	十二月十四日	十一月廿六日	三月廿五日	三月廿五日
境	三十三日	十一日間	十二月十九日	十一月廿六日	三月廿六日	四月十日

又本地方の氣温を世界同緯度の地に於ける所謂標準氣温と比較するに、山

氣温の偏差

陽の中部にては、寒候に於て標準よりも低きこと七度の上に出て、暑期に於ては高きこと一度内外なるも、日本海沿岸地方にては、此の偏差稍少くして、寒候に於て低きこと六度内外、暑期に於ては標準と大差を認めず。而して年平均気温より見れば、中國地方一般に凡三度内外低きを見る。其の詳細は左の如し。

気温偏差表

地名	緯度	寒期(一月)	暑期(七月)	年平均
下關	三十三度五十八分	低きこと五度九	低きこと〇度一	三度
廣島	三十四度廿三分	低きこと七度二	〇度八	三度三
岡山	三十四度四十分	低きこと七度四	高きこと一度二	三度三
境山	三十五度卅三分	低きこと六度	高きこと〇度三	三度

平均気温表 (攝氏の度に據る)

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
下關	五、四	五、〇	八、二	一二、九	一六、八	二〇、七	二四、六	二六、四	二三、一	一七、七	一二、六	七、七	一五、一

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
吳島	五、二	四、八	八、一	一二、二	一七、四	二二、七	二五、一	二七、二	二三、二	一七、四	一二、三	七、一	一五、二
廣野	四、七	四、四	七、五	一二、七	一七、〇	二二、二	二四、三	二六、八	二三、九	一七、八	一二、〇	五、七	一四、六
味野	四、七	四、四	七、五	一二、七	一七、〇	二二、二	二四、三	二六、八	二三、九	一七、八	一二、〇	五、七	一四、六
岡山	三、六	三、七	七、二	一二、九	一七、二	二二、四	二四、五	二七、〇	二三、一	一七、三	一二、五	六、八	一五、〇
濱田	五、四	四、七	七、七	一二、四	一六、三	二一、五	二四、二	二五、九	二三、一	一六、二	一一、八	五、三	一四、五
境田	三、九	三、六	七、一	一二、〇	一六、二	二一、四	二四、一	二六、三	二三、三	一六、三	一一、二	六、三	一四、二
西郷	三、九	四、七	六、六	一一、六	一五、九	二〇、〇	二三、七	二五、八	二三、六	一五、八	一一、〇	六、六	一三、九

注意 氣象諸表は概ね明治三十六年迄の累年平均を以て示す。
最高及び最低気温表 (頁とあるは零度以下なるを示す)

地名	最高		最低		較差
	最高	日	最低	日	
吳島	三五、九	八月廿七日	六、五	二月廿八日	二九、四
下關	三五、六	八月十四日	七、一	二月廿八日	二八、五
廣島	三七、五	八月十九日	八、四	十二月廿六日	二九、一

味野	岡山	濱田	境
三八、五 八月十三日	三五、六 八月十一日	三三、七 八月六日	三七、八 八月四日
三二、四	三二、四	三〇、一	三〇、四
三三、四	三三、〇	三三、九	三三、〇
頁五、七 二月廿八日	頁八、二 二月廿八日	頁六、七 二月廿八日	頁九、七 一月廿七日
〇、二	〇、五	一、一	〇、四
頁四、四	頁五、四	頁三、四	頁四、三
四三、二	四三、七	四三、四	四七、五
三二、三	三二、九	二九、〇	三〇、〇

氣壓 本地方は我が國の西部に方れるを以て、氣壓一般に高く、其の年平均は七百六十一耗半乃至七百六十二耗の間にありて、七百六十二耗の年同壓線は、對馬及び隱岐を経てウラヂポストク附近に連結せる弧線に相當せり。各月平均示度の最低に達する時期は、各地一樣に七月にして、高壓を呈する時期は、本邦東部地方よりは稍、後れ、一月若しくは十二月にありて、其の高低の變化は年内一回に止まるを常とし、最大最小の差即ち一年中の振幅は、八耗半乃至九耗半の多きに及び、殊に西部に到るに従つて甚しきを見る。最近までの観測に係る絶對最高は、廣島に於て七百七十八耗九(明治廿八年十一月廿八日)最低亦廣島に於て七百二十七耗四(八月廿五日)を示せり。

低氣壓 低氣壓の中國地方に影響する者の平均進路を辿りて之れを観察するに、其

の主なるものは、冬春より初夏に亘りて、屢支那東海の北部に發生し、九州の西部より朝鮮海峡を過ぎ、日本海沿岸を掠めて北海道の西岸に達するものにして、是れが影響として顯著なるは、中國四國及び九州の地方に溫暖なる南西風を誘起し、且つ豪雨を伴ふにあり。又遠くルソン島の東方に發生して支那東海に入り、日本海より津輕海峡を経て、北海道の南東部に到る者の影響を蒙ることも尠からず。此の進路を取る低氣壓には、夏季の末に發生するものと、冬季に發生するものとの二種あり。其の普通なるは前者にして、常に南西諸島に災害を與ふれども、北上するに隨つて次第に微弱となる。之れに反して後者即ち冬季發生のものは、其の部位北進するに連れて勢力を増すを常とす。此の他三四月の交、臺灣の北東なる海上に發生し、九州四國の南海岸に沿ふて本州の東海岸に出づるものは、凜烈なる北西風を起すを以て著しく、又彼の二十日前後、南海岸に襲來し、中國の東部より日本海に趨る所の低氣壓も、暴威を振ふこと敢て前述のものに譲らず。

平均氣壓表 (耗を以て示し、海面及び重力の更正を施せり)

地名	月次												海面及重 力の更正	
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月		
下關	七六、一	七六、八	七六、三	七六、九	七六、七	七五、八	七五、五	七五、〇	七五、三	七五、二	七五、四	七六、〇	七六、八	加 三、五
吳島	七六、三	七六、八	七六、八	七六、二	七五、七	七五、二	七五、四	七五、五	七五、三	七五、三	七六、三	七六、一	七六、二	加 一、〇
廣島	七五、九	七五、六	七五、六	七五、三	七五、二	七五、七	七五、六	七五、〇	七五、九	七六、三	七六、〇	七六、七	七六、七	減 〇、四
味野	七五、六	七五、一	七五、三	七五、三	七五、九	七五、七	七五、六	七五、二	七五、〇	七五、九	七六、三	七六、一	七六、一	減 〇、三
岡山	七五、五	七五、四	七五、四	七五、三	七五、九	七五、〇	七五、三	七五、五	七五、三	七五、三	七六、三	七六、二	七六、二	減 〇、一
濱田	七五、六	七五、六	七五、六	七五、三	七五、二	七五、七	七五、九	七五、六	七五、九	七六、三	七六、三	七六、六	七六、六	加 一、〇
境	七五、三	七五、三	七五、三	七五、一	七五、二	七五、八	七五、五	七五、二	七五、四	七六、三	七六、三	七六、四	七六、四	減 〇、四
(最高) 廣島	七六、九													
(最低) 廣島	七三、四													

風向 風力は日本海沿岸地方に強く、瀬戸内海及び山嶽地方に弱く、吳の風速度は冬季にして、弱きは夏季若しくは秋季なりとす。殊に冬期は日本海の風濤は冬季にして、沿岸一帯の風物頗る荒涼を極む。最強風速度は廣島に於ける一秒間四十六米(南南東風八月十九日)なりき。尙次ぎに掲ぐる風速度表中境の速度意外に小なるは、其の地勢正面に丘陵を負ひ、卓越風を妨ぐるに據る。

卓越風向表 (方位)

の如きは、日本海方面の半にも達せざるを見る。年内を通じて風力強き時期は冬季にして、弱きは夏季若しくは秋季なりとす。殊に冬期は日本海の風濤は冬季にして、沿岸一帯の風物頗る荒涼を極む。最強風速度は廣島に於ける一秒間四十六米(南南東風八月十九日)なりき。尙次ぎに掲ぐる風速度表中境の速度意外に小なるは、其の地勢正面に丘陵を負ひ、卓越風を妨ぐるに據る。

地名	月次												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	
下關	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東	北四、東
廣島	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北
岡山	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北
境	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北

地名	平均風速度表 (一秒時)													
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年	最快速度
廣島	北二七	北四一	北一六	北四一	北二〇	北二四	北二〇	北二四	北七	北一四	北二六	北四	北二	北四
境	北五	北四	北二	北四	北一	北三	北一	北二	北一	北三	北二	北一	北二	北一
下關	三、三	四、八	四、六	四、八	四、四	四、〇	三、九	三、七	三、四	三、三	四、〇	五、五	四、三	四、九
吳	二、四	二、五	二、二	二、一	二、六	一、五	一、五	一、七	一、七	一、九	一、九	二、六	一、九	二、八
廣島	二、七	二、八	二、九	二、七	二、六	二、六	二、八	三、〇	三、三	三、〇	二、八	二、八	二、八	四、一
味野	四、四	四、三	三、四	三、三	三、一	二、九	二、九	三、三	三、五	三、三	四、六	三、五	三、五	三、九
岡山	二、四	二、六	二、五	二、六	二、五	二、四	二、九	二、四	二、二	二、八	二、四	二、三	二、三	三、九
濱田	六、二	六、一	五、四	四、九	四、二	四、〇	四、四	四、一	四、〇	四、三	六、八	五、〇	四、七	四、七
境	三、九	三、六	三、九	三、八	三、三	三、三	三、三	三、一	三、〇	三、〇	三、七	三、三	三、三	三、五
最快速度	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

湿度

湿度は各地甚しき差を認めざるも、地勢上日本海方面に大なることと言ふまでもなく、月平均凡そ八〇%(飽和一〇〇とす)内外なり。瀬戸内

海方面は稍小にして平均七五%を測る。而して各地一様に夏期七月頃に最大にして、秋季これに次ぎ、冬季二月頃に最小なり。絶對最小は廣島にて一二%^(廿三年)を測れり。又水蒸氣張力は年平均凡そ十糎内外にして、中庸に位し、其の最大は廣島にて二十九糎^(廿四年)、最小も亦廣島にて〇糎九を測れり。

平均湿度表 (百分率)

地名	平均湿度表 (百分率)													
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年	最
下關	七二	七二	七三	七三	七四	七五	八三	八一	七九	七四	七三	六九	七六	三三
吳	七〇	七〇	七三	七三	七四	七五	八〇	八一	七六	七五	七二	七四	七六	三三
廣島	七四	七三	七三	七四	七五	七六	八〇	七七	七六	七五	七二	七四	七六	三三
味野	七九	七六	七二	七三	七四	七五	八〇	七七	七六	七五	七二	七四	七六	三三
岡山	七三	七三	七二	七三	七四	七五	八〇	七七	七六	七五	七二	七四	七六	三三
濱田	七六	七六	七二	七三	七四	七五	八〇	八一	七六	七五	七二	七四	七六	三三
境	七八	七六	七二	七三	七四	七五	八三	八一	七九	七四	七三	六九	七六	三三
最	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

降水

降水 本地方の降水量は、表裏両面によりて大に其の配布を異にせり。即ち山陰道地方は北陸道に次いで雨雪多く、寡雨期に於ても甚しく少量ならず、年内の總量二千耗近くに達し、因伯以東に到れば其れ以上にも及ぶ、而して分水嶺を越え南下するに随ひ少量となり、遂に瀬戸内海沿岸の中央なる岡山附近に到れば、總量千耗内外を測るに過ぎずして、本邦中寡雨地の一たり。蓋し日本海の南部には對馬海流の暖流ありて、海上の大氣中に蓄積せる多量の水蒸氣は、北西風の齎す所となり、裏日本地方を通過して、脊梁山脈の北面に凝結を始め、雨雪を醸すこと夥しと雖、山陽地方は四周連嶺を以て圍繞せられ、外海の影響を受くること少く、僅に内海より發散する所の水蒸氣を以て雨源となすに過ぎざるが故に、降水亦寡少なるべきと暗易きの理なりとす。殊に冬季は北西風卓越するを以て、裏日本は到る所陰濕を加へ、表裏兩面天氣の隔絶實に甚しく、裏面山陰の地は日々陰雲暗嶺霰雪を飛ばし、皚々たる積雪は平地猶一二尺を測り、山間に到れば丈にも垂んとする所あれども、翻つて表面山陽に出づれば、寒風凜烈膚を劈くが如き日も、天氣は晴朗にし

降雨

て乾燥なること多く、降雪の日は多少ありと雖、平地に於て一尺に達するとは甚だ稀なり。今試みに冬季三個月間十二月一月二月に於ける各地の平均降水量を算するに、山陰地方にて、境五百二十八耗、宮津五百八十八耗の多きを測れども、是れと腹背をなせる山陽地方にては、岡山百十八耗、味野百十六耗の寡きを測り、其の間非常の差違を認むべし。但し六七月の梅雨季に際しては、山陽地方にも亦多量の降雨あるを常とし、陰霖連日に亘ることも珍しからず、殊に西部に到るに随つて其の然るを見る。

降水の絶對的に多量なりしは、境に於て一晝夜間に二百九十耗(明治廿七年八月廿七日)を測りたるを最とす。這は二十四時間内の量としては、さして甚しき豪雨とは稱すべからざれども、この殆んど全部即ち二百八十八耗は、唯四時間内の降下量たる點に於て、實に本邦豪雨中の第一位を占む。然れども之れを外にしては、本地方にて一日二百耗以上に達したることなし。

平均降水量表 (耗と寸)

地名	月次												年	計	最一日中	同日	
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月					
下關	六三三	七三三	一〇一〇	一五八三	一六六五	三三三三	二六〇七	二四四四	一四一三	一〇〇八	七三三	七三三	一五八四	一五八四	廿二年	廿二年	廿二年
吳	四三三	六〇三	一〇四〇	一三九三	一五三三	一九五三	二五三三	二〇三三	九一六	一〇三三	七〇〇	五〇〇	一四〇八	一三三三	廿七年	廿七年	廿七年
廣島	四三三	六四九	一〇〇〇	一七八二	一七六六	二二三三	二〇五五	一〇〇五	一五八四	一〇三三	六八一	四三三	一四七五	一四七五	十九年	十九年	十九年
味野	四〇八	三三三	七四七	九七四	一〇三三	一三三三	一五三三	七六九	一六六一	九四九	六二七	三九八	一〇七七	一〇七七	廿五年	廿五年	廿五年
岡山	三九六	四四〇	七五五	一〇一一	一四三三	一四〇三	一六六〇	八四六	一五三〇	九八三	六〇六	四三三	一四一七	一四一七	廿五年	廿五年	廿五年
濱田	二〇二	九七〇	一〇七四	一三九三	一三三三	一八五三	一八三三	二六六八	一五五七	一〇九三	二〇〇	一四九	一五四七	一五四七	廿二年	廿二年	廿二年
境	一八九五	一四三三	一三六四	一三三三	二〇九	一五九六	一八七七	二五五六	二〇七八	一六〇〇	一六〇	一九五五	一九二一	一九二一	廿七年	廿七年	廿七年
西郷	一八三三	一五二〇	一三九三	一三三三	一九五三	二二三三	二二三三	一〇〇六	一四五六	一四五六	二五五	一九一八	一七七三	一七七三	廿四年	廿四年	廿四年

天氣 本地方降水量の配布前陳するが如きを以て、雨雪日數も山陰道地方に多く、山陽道地方に少きこと説明を要せず。而して山陰道にても、雨雪日數は東漸するに従つて多く、其の年内平均日數は、近畿地方の宮津の二百二十一日より中國地方の境の二百六日、濱田の百八十八日を數へ、冬期は一個月二十五六日の多きに上る。八月は最も少きも猶十日或は十一日を數ふ。

之れに反して山陽地方は雨雪日數少く、吳百二十日、岡山味野百二十四日の年内平均日數を數ふるに過ぎず。殊に秋期及び冬期は晴朗の日最も多く、稍陰濕なるは春期なりとす。これを要するに一年三百六十五日間、山陰地方にて殆んど二百日内外、山陽地方にて百二十日乃至百五十日は多少降水あるべきものと覺悟して可なり。又連日引續き降水ありたる最長日數は、境の三十九日間(自二十二年二月三十一日)を推し、之れと反對に早魁の日打續きたるは、廣島にて四十四日間(十九年自七月八日)に亘りたるを最も著しきものとす。

平均雨雪日數表(一縣の十分の一に選せざる日は之れを算はず)

地名	月次												年	計	最一日中	同日
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月				
下關	一六〇	一四一	一四二	一四四	一三一	一三七	一三三	九八	一三〇	九九	一一九	一五〇	一五六四	廿二年	廿二年	廿二年
吳	九〇	八八	一三〇	一三三	一三六	一三〇	一三六	八三	一〇八	七四	六九	八一	一三九七	廿七年	廿七年	廿七年
廣島	一〇五	九七	一三九	一三八	一三一	一三八	一三一	九〇	一二四	八五	八四	八一	一三九八	十九年	十九年	十九年
味野	八四	九一	一三三	一三五	一三一	一三〇	一三一	七五	一二六	八七	七七	八一	一三四〇	廿五年	廿五年	廿五年
岡山	七七	九一	一三〇	一三八	一三一	一三〇	一三一	八七	一二九	九三	八〇	七七	一三四〇	廿五年	廿五年	廿五年
濱田	二〇二	一〇七	一三九	一三三	一三三	一八五	一八三	二六六	一五五	一〇九	二〇〇	一四九	一五四七	廿二年	廿二年	廿二年
境	一八九五	一四三三	一三六四	一三三三	二〇九	一五九六	一八七七	二五五六	二〇七八	一六〇〇	一六〇	一九五五	一九二一	廿七年	廿七年	廿七年
西郷	一八三三	一五二〇	一三九三	一三三三	一九五三	二二三三	二二三三	一〇〇六	一四五六	一四五六	二五五	一九一八	一七七三	廿四年	廿四年	廿四年

境

十月十二日 十月廿三日 十月廿三日 四月十九日 五月八日 五月八日 十一月五日 十一月十日 十一月十日 三月廿三日 四月廿八日 四月廿八日 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月

警報信號標

警報信號標 正式氣象警報信號標の本地方に建設せらるゝ地を舉ぐれば左の如し。(明治三十八年一月末調)

岡山縣

岡山市内山下、兒島郡日比村、上道郡三蟠村大字江並、小田郡笠岡町、淺口郡玉島町大字柏崎、邑久郡牛窓町、兒島郡八濱町、兒島郡味野村、兒島郡下津井町。

廣島縣

廣島市宇品、尾道市土堂町、沼隈郡鞆町、佐伯郡殿島町、豊田郡忠海町、豊田郡東野村木ノ江港、加茂郡廣村、豊田郡御手洗町、豊田郡瀬戸田町、御調郡糸崎港、安藝郡瀬戸島村。

山口縣

下關市(測候所)、大島郡久賀村字古町、玖珂郡柳井津町字岸ノ下、態毛郡上關村字長島、都濃郡徳山町濱崎港、佐波郡防府町三田尻港、豊浦郡神田下村字犢牛、大津郡仙崎村字後原、阿武郡椿郷東分村字鶴江臺、阿武郡須佐村字浦東。

島根縣

松江市末次本町、簸川郡杵築町、邇摩郡温泉津村、那賀郡濱田

町大字原井、隠岐知夫郡浦郷村。

鳥取縣

鳥取市藪片原町堤上、西伯郡境町字臺場。

第二編 人文

第一章 沿革

一 石器時代

石器時代の民族に關しては、前の諸卷に於て、屢記述したるか故に、徒らに蛇足を加ふるの繁を避け、進んで中國地方における遺跡の分布に就きて調査するに、明治卅四年までに知られたる總數は、僅かに五十九箇處に過ぎず。これを日本全國に存在せる三千四百六十六箇處に比すれば、漸く其の二十一分の一強に當るのみ。今卅四年東京理科大学の編纂にかゝる、石器時代人民遺物發見表により、國別に示せば左のごとし。

備前	六	美作	三	備中	九九
備後	二二	安藝	二	周防	二
長門	二	因幡	一	伯耆	一

出雲 一 石見 一 隱岐 一

此等の數は單に調査の周到なると否らざるとによりて常に異なるべきものなれど、而も今日に至るまで斯く發見の少きを見れば此地方に於ける遺跡の饒かならざると概ね推知するに足るべし、而して山陰地方の極めて寥々たるに反して、山陽地方、殊に三備の諸國が、比較的多きを占めたるは、注意すべきものとす。其の遺物の種類は、石鏃石斧錐石石錐石鎗砥石有孔石器獸骨等にして、石鏃は實にその三分の二強を占めたり。また之に反して土器の器見せられしものは極めて僅少に留り、遺物發見表に載する處、僅かに備前備中に各二箇處、備後に一箇處、通計五箇處に過ぎず。

右に述べたるかごとく、三備地方は中國における主要なる遺跡地たるを以て、少しく考察を試みるに、遺跡の發見せられたる場所によりて、石器時代人民が多く今日の海岸附近に散在せる事を知るを得たり。而して其の遺物に就きていはゞ、備前國邑久郡豊原村及び備後國深津郡大津村大字大門の貝塚より發見せられたる土器の殘片には、其の縁中に貝殻の一端を押し當て、絞

様と爲したるものあり、また刻みたる鹿骨裝飾用と認むべき有孔の小石器あり、また備中國小田郡後月郡より發見せられたる石庖丁の多數は、一見エスキモー所用のものに類し、一孔のものと無孔のものとありて、無孔のものは糸巻形にして、本邦他地方より未だ發見せられざるものとす。なほ此等の石庖丁は、九州地方より發見さるゝものゝ如く大形ならず。石斧は三備地方は甚だ少く、多くは磨製なりと雖、石鏃は前項にもいへるが如く非常に多數を占めたるは、蓋し當時民族の需用多かりし爲なるべし。形状は十中の八九は三角形にして、石質は粘板岩なるが多く、なほ備中、沙美海濱より發見せるものは、嘗て武蔵日向より出てたると特に類似せるものあり。

二 神話時代

神話時代に於ける中國は、出雲民族興亡の史跡を印せると甚だ多く、従うてまた尠なからざる神話奇蹟を傳へたり。而して其の民族の勢力たるや、山陰・山陽より、北陸南海に至るまで蔓延し、殊に出雲附近は、勢力の中心點と

伊弉諾伊弉册
の二尊中國地
方を経營す

出雲民族の發
展

して、はた民族の根據地として、本邦の開闢史中にありて、最注意すべき地方と爲す。今次を逐うてこれを記述すべし。

舊史を按ずるに、伊弉諾伊弉册の兩尊が經營したる國土、即ち所謂大八洲の中に於て其の中國に屬するものは、隱岐の三子島と、大倭豊秋津島との二にして、隱岐の三子島は隱岐國、大倭豊秋津島は本洲全部を指せるものとす。而して二尊は天之挾手依比賣をして隱岐を、天御虛豊秋津根別をして豊秋津島を統轄支配せしめしが、當時所謂高千穂民族の勢力ありし範圍は、恐らくは近畿地方を出でざりしものゝごとし。是に於てか出雲附近を中心とせる出雲民族の興起を來し、高千穂民族と駆逐競争する大活劇を生ずるに至れり。

出雲民族の歴史は、素盞鳴尊よりはじまる。尊は舊史によれば伊弉諾伊弉册二尊の子にして、二尊の大八洲を形成したるの後、天下に主たる者を生まんとて、第一に天照大神を生み、第二に月讀尊を生み、第三に素盞鳴尊を生み、更に天照大神に高天原を、月讀尊に夜の食國を、素盞鳴尊に海原を治むべく命したりしに、素盞鳴尊は只、命を奉せざるのみならず、高天原に赴きて

狂暴の振舞ありしを以て、天照大神の怒に觸れ、遂に高天原より放逐せられ、羅國曾茂梨の地に下り、後また出雲國に赴くと見えたり。然れどもこれもとより神話にして、絶體に史實と見做すべからざるや勿論なり。吾人に見る處によれば、天照大神と素盞鳴尊とは異なる系族なりしを、後世に至りて兩民族の神話の相混同して、同一民族の出來事なるかのとくに變し、遂に天照大神と素盞鳴尊と、兄弟たりしといふ傳説を生みたるものなるべし。即ち素盞鳴尊は韓土より渡來して、霸を高千穂民族と争ひしものなるべく、尊及び出雲附近の諸地方と、韓土との關係に就きて、今日に傳はれる幾多の傳説は、明らかに之に證明せり。

出雲地方と朝鮮との關係

日本書紀の引用せる一書には、尊が高天原を逐はれし後、其の子五十猛神と新羅の國曾戸茂梨に至り、更に埴土を以て舟を造り、東に渡りて出雲國に着せると見え、また他の一書には、尊は、韓國の島はこれ金銀あり。若し吾兒の御する國に浮寶あらずば、いまた佳からじと稱して、杉檜椽樟等の樹木を培養し、然る後熊成峯に赴き、轉して根の國に入るとも見え、また出雲風

國引きの神話

土記には、國引坐八束水臣津野命が、新羅の國の三崎に、國の余りありて稱して國來くと引き來りて、出雲國に縫ひ足したるもの、即ち意宇郡なりといへる、有名なる國引の神話を載せたり。臣津野命は素盞鳴尊四世の孫と古事記に見えたれど、果して玄孫に當れりや否やは詳かならず。但同一民族たる事は疑を容る可からざるがごとし。笹川種郎氏は素盞鳴尊と同神なるべしといへり。それ或は然らん。また延喜式神名帳、出雲國意宇郡の條に、玉作湯神社、同社坐韓國伊太底神社、楫夜神社、同社坐韓國伊太底神社、佐久多神社、同社坐韓國伊太底神社など見ゆ。伊太底社は、即素盞鳴尊の子なる五十猛神なり。以上述べ來れる處によりて考ふれば、素盞鳴尊と韓土と、非常に密接の關係を有したりしを知るべく、尠なくとも其の民族が出雲に來れる前には、韓土に據りたりきと爲すも不稽の言にはあらざるべし。風土記なる國引の神話が、植民移住の事を語れるものなることは、既に先賢の論せられし處、又疑を挿むべきにあらざる而已ならず、更に海流の關係よりして推測するも、兩土の間道般の因縁ある、もとより怪しむに足らざるなり。事や、